

# 魔導装甲アレン

第一部 黄砂に舞う羽根

秋月あきら

## 第一章 砂漠の都

太陽が燦然と降り注ぐ枯れた大地に少年はいた。

舞い上がる黄砂に吹かれながら、少年は砂に埋もれる足を一歩一歩着実に動かし、どこ行く当てもなく歩いていくようだった。

少年の年の頃は十五、六歳と言ったところだろうか？

頭には耳の垂れ下がった犬に似ているパイロットハットを被り、その帽子にはゴーグルが付けられ、身体を覆う茶色い服は帽子と同じ素材らしき色褪せた皮製の物で、その服は砂や陽光を拒むような厚手の服だった。

衣服の所々は汚れ、解れ、破れ、少年の旅が長いものだったことを物語っている。

そう、少年は旅慣れた物腰をしていた。

そのことは少年の表情からも見て取れた。

深く被った帽子から覗く瞳は、遙か彼方を見つめているようで、なにも見つめていないような眼差し。

少年はあの先になにを見る？

そして、なにを求め、旅をしているのだろうか？

その時、少年の腹が奇怪な音を立てて鳴いた。

ぐうううううううううう。

腹を押さえた少年が砂の上に膝を突き、そのまま前のめりに

### 3 黄砂に舞う羽根

なりながら顔面から砂にダイブした。

少年の口から微かな声が漏れる。

「腹減ったあゝゝゝ」

今、少年に最悪最強の敵が襲い掛かる！

空腹。

たかが空腹と莫迦にすることなかれ。この少年は金銭的な都合から旅の途中で食料を切らせ、一週間もの間、口に入れた物は塵と空気と水だけ。その水もついさつき飲み干してしまった。少年は意識を朦朧させながら砂の上に寝転び、仰向けになりながら顔の前に腕を置いて天を仰いだ。

太陽はまだまだ高い位置にあり、陽の光が少年を串刺しにするが、気温そのものは高くない。大地が枯れている理由は、灼熱の太陽のせいではないのだ。

地平線の向こうで砂埃が霧のように舞い上がり、轟々と風が鳴る。

上体を起こした少年は目を細めた。

視線の先に映る光景。砂の上を走る巨大な影と小さな影。それを見た少年は思わず声をあげた。

「食料！」

舞い上がる砂の中を巨大な影が小さな影を追っている。

轟々と砂を巻き上げ、風を鳴らしながら爆進する巨大な影の正体は岩蛇だった。その全長は約三〇メートルもあり、岩のよくな鱗に全身を覆われていて、小象であれば丸呑みにされてしまいそうだ。それでも小物の岩蛇だ。

巨大な岩蛇に追われていたのは、二足歩行のクエツク鳥と呼ばれる飛べない鳥に乗った男だった。

『クエツク』と鳴き声をあげることから、その名を付けられたクエツク鳥は、人に乗せた状態で時速約六〇キロメートルの速さで走ることができる。だが、それでは岩蛇の魔の手からは逃げられない。

身体をくねらせる岩蛇は砂の上を泳ぐようにして獲物を丸呑みにしようとしている。このままでは、男はクエツク鳥とともに真っ暗な岩蛇の腹の中に納まってしまっただろう。しかし、そうはならなかった。

巨大な穴としか思えない大口を開けた岩蛇が男を呑み込もうとしたその時、男の手から閃光を放ちながら煙を撒き散らす弾丸が発射された。信号弾だ。

男の放った弾は巨大な口の中に消えていき、岩蛇は巨体を揺らしながら狂うように頭を振った。

表皮は岩のような鱗に覆われていようと、口の中に弾を打ち込まれたのでは岩蛇も堪ったものではない。しかし、致命傷にはならず、むしろ岩蛇は怒り狂うように暴れまわった。

一部始終を見ていた少年はお腹を擦りながら呟いた。

「皮剥がせば食えるな」

少年は岩蛇を仕留める気でいた。いや、喰らう気でいた。

暴れまわる岩蛇によって砂の大地は波打つように動き、砂に足を取られたクエツク鳥が男に乗せたまま転倒する。

砂の上に大きく放り出された男の上に巨大な影が覆い被さる。

巨大な壁のように迫ってくる岩蛇から男は逃げる術を失っていた。だが、男は見た。陽光を浴びて空に舞い上がった小さな影を。

ぼろ切れのマントを空中で投げ捨てた少年は、天に向かって咆哮しながらもだえ苦しんでいた岩蛇の口の中に飛び込んだ。った。

少年が岩蛇の口の中に飛び込む瞬間、どこかで歯車の鳴る音がして、少年の右手が激しい閃光を放った。

「喰らえ糞蛇っ！」

怒号をあげた少年が岩蛇の長い舌に右手を押し付けた瞬間、岩蛇は巨大な身体を大きく震わせてスパークした。岩蛇は少年によって電撃を喰らわされたのだ。

舌をだらりと伸ばして痙攣する岩蛇は巨体を砂の上に大きく打ちつけた。

砂煙が舞い上がり、砂を被る岩蛇は微かに痙攣するものの、気を失っているようで動く気配はもうない。

息を荒げて砂の上に大の字になって寝転ぶ少年の顔に男の影が射す。

「おまえ、人間か？」

体躯のいい無精髭を生やした男の声には感嘆と畏怖の色が雜ざっていた。

自分を見つめる男を霞む目で見ながら、少年は息絶え絶えといった声で呟いた。

「……飯……食わせろっ」

そして、少年の意識は闇の中に落ちていった。

砂漠の中心に聳える鉄の要塞。シユラ帝國が世界に誇る皇帝ルオの居城である巨城だ。

権威を示すためだけに広い玉座の間。大理石の床に敷かれた金糸の刺繍が施された紅い絨毯が玉座まで伸びている。その玉座に座る者は、この帝國の若き皇帝ルオだ。

皇帝であるルオの前に威風堂々と立つ、雄ライオンのような髪型をした女性。白衣のようなロングコートを着た彼女は、濡れた唇からセクシーな低音で掠れた声を部屋に響かせた。

「目下のところトツシユの行方は不明。街の外に出かけたとの情報もあるけれど」

目の前にいるのが皇帝だというのに、「ライオンヘア」の口調には敬意の欠片も含まれていなかった。それに対して皇帝も気にしたようすもない。

「トツシユは行方知れずか。して、あの話の真意は？」

「裏づけは取れたわ。すでに坑道は我が軍が占領し、発掘は至極順調よ。トツシユが街に帰って来て、このことを知ったらどんな顔をするか、楽しみだわ」

妖々と魅惑的な笑みを浮かべる「ライオンヘア」。それにつられて皇帝ルオも静かに笑う。

「大地の下に眠るモノは、神か悪魔か……」

「なにが飛び出して来ようと、“失われし科学技術”は、この世界に新たな風を吹かせるわ」

「それは滅びの風かもしれないよ」

「滅びの力でも手玉にとつて見せますわ」

「それは頼もしい」

陰を纏い、くつくつと嗤う皇帝ルオの表情は、悪戯な悪魔のようだった。

皇帝ルオの悪評は多く、独自の美意識を持つ彼の虐殺の数々は国を跨いで人々に知られる。

三年前、前皇帝であるルオの父が崩御し、十三歳という若年でルオが帝位を継承して間もない時であった。ルオは領土拡大のために、とある砂漠に住む部族の要塞を落とすことになり、彼はただ一言を発した

串刺し刑が観たい。

その一言だけで、女子供関係なく一二〇人あまりの人間が串刺しにされ、その半分以上の人間が生きたまま串刺しにされたのだった。

その光景は凄まじく凄惨であり、串刺しの刑を実行させられたルオの軍隊ですら躊躇いを覚え、嘔吐する者や、最後までルオの命令に従えずに串刺しの刑に処された者もいたほどだ。

串刺しの方法は肛門から内臓に串を差し込んだり、へそを刺したり、心臓を刺したりといういろいろな方法が採られ、串刺しにされた者はみな地面に串とともに立てられ、ルオのオブジェにされた。そして、ルオは乾いた大地に血を滴り落とすオブジェを見ながら、大声を張り上げて満足げに笑ったのだと言う。

以上の悪行が、暴君ルオの名を世界に知らしめた最初の行で

あり、序の口であつた。

玉座に座り、足を前に投げ出したルオは、なにかを思い出しように手を叩いた。

「ああ、そうだ。今朝の料理で舌を少し火傷したんだつたよ」

「『作った料理人を切り刻んで家畜の餌にしる』ですわね？」

「ライオンヘア」はルオのことを熟知しているのだ。

ルオは満足そうに笑つた。

「君は最高の側近だ。ただ、信用はできないけどね」

「いいえ、アタクシは“貴方”に身も心も捧げた奴隷ですわ」

「嘘が上手だ君は。君が朕に仕えるのは科学と魔導の研究のためだろう？」

「ええ、それもありますわ。でも、アタクシは本当に貴方を慕つているのよ。貴方は史上最悪の暴君だわ」

今まで立っていた「ライオンヘア」が跪き、投げ出されたルオの足に手を伸ばす。

ルオは自分の投げ出した足に靴の上から接吻する女を見下しながら、満足げな表情を浮けて嗤つた。

「お褒めの言葉ありがとう」

顔を見合わせて二人は、陰を纏いながら静かに静かに嗤つた。

少年は硬いベッドの上で目を覚ました。

最初に少年が見たものは、茶色い染みのある灰色の天井。次に見たものは灰色の壁。それ以外はなにもなかった。そこは汚いベッドと灰色の壁しかない部屋だった。

ベッドから跳ね起きた少年は金属のドアの前に立った。ドアノブなどは見つからず、電動スイッチも見当たらない。つまりこちらからでは開けられないというわけだ。

少年がドアに向かってファイティングポーズを取ると、どこかで歯車の回る音がした。しかし、その音は徐々に弱くなり、やがて止まった。そして変わりに別の音が鳴る。

ぐううううううううううう。

重い息について腹を擦る少年は、そのまま背中から冷たい床に寝転んだ。

「腹が減つてなにもする気が起きねえ」

少年の声が虚しく部屋に響いて消えた。

天井の染みを見つめながら、少年が虚ろな目をしていると、金属のドアがスライドして部屋の中に無精髭を生やした男が入つて来た。

部屋に入つて来た体躯のいい男は、岩蛇に襲われていたところを少年が助けた男だった。

男の姿を確認した少年は眼の色を変えて飛び起きると、自分より背の高い男の襟首を掴んで叫んだ。

「この糞野郎！ 命の恩人をこんなところに閉じ込めやがって！」

「俺様は慈善家じゃないんでな、例え命の恩人でも素性が知れない者は信用できない。ここまで運んできてやっただけでも感謝しろ」

ぐううううううううううう。

男の襟首を掴んでいた少年の手から力が抜けていき、ヘナヘナと少年は膝から崩れ落ちた。

「腹が減って……飯食わせる……」

男は腹を押さえてうずくまる少年を見下げながら、思わず口から空気を噴出して笑った

「腹いっぱい食わせてやるから付いて来い」

「俺をここに閉じ込めて置かなくていいのか？」

「おまえが目覚めた時に、勝手に出歩かれると困るから閉じ込めて置いただけだ」

「それだけか？」

「いや」

男は裏のある笑みを浮かべた。その笑みを見て少年はさして気にしないように鼻を鳴らした。

「ふくん。で、あんた名前は？」

「人に名を聞くときは自分から名乗れ」

「俺の名前はアレン。で、あんたは？」

「俺様はトツシユ。この街じゃ、ちつとは知れた名だ」

「自慢なんて聞きたかねえ。早く飯食わせる」

「……口の悪いガキだな。付いて来い」

トツシユは頭をかきながら部屋を出て行き、アレンはその後を覚束ない足取りで付いて行った。

部屋の外は長方形の筒のような廊下が続いていた。

所々が茶色く錆びている廊下を照らす明かりは、等間隔に天井にぶら下がっている裸電球だけで、廊下全体が薄暗いために

遠く先は闇だった

二人は足音を響かせながら廊下の奥へ向かった。

前を歩くトツシユが顔を向けずにアレンに話しかけた。

「ところでおまえ、魔導師か？」

「違う」

「じゃあ科学者か？」

「いいや。俺は魔導師でも科学者でもない、ただのガキさ」

この世界を支える二大柱は科学と魔導。

魔導と科学の融合により生まれた魔導炉により、膨大なエネルギーが二十四時間、止まることなく都市にエネルギーが供給される。しかもそれも過去の恩恵。今に残る“失われし科学技術”によって世界は成り立っている。

廊下の突き当たりには金属の梯子があり、それを登って二人は地上に出た。

アレンは自分たちの出てきたマンホールを見ながら興味深げに呟いた。

「おもしろいところから出たもんだ」

「他言しない方がおまえの身のためだ」  
「なるほど」

すぐにアレンは理解した。このマンホールは秘密の出入り口と言ったところなのだろう。

辺りは朱色に染まり、石畳の路に影が射している。

左右は石などで造られた凹凸のない建物に囲まれ、もちろん人通りはない。

アレンはトツシユに連れられ裏路地を抜けると、そこは一変して人通りの多い歓楽街だった。

目がチカチカするようなネオンが街を照らしはじめ、得体の知れない出店が並び、娼婦たちが仕事をはじめている。夜が更けてくれば、もつとこの街は賑わうことだろう。

トツシユとともに人ごみの中を歩きながらアレンが呟いた。

「こんなデカくて活気のある街は珍しいな」

「この街にはなんでもある。武器も薬も　暴力もな」

「たしかに治安も衛生もサイテーだな」

まだ日が完全に落ち切っていないというのに、屋台で酒を引つ掛けて喧嘩をはじめている若者たちが目に飛び込んでくるし、汚れた路の片隅では鼠たちが食べものに集まっている。

掘っ立て小屋のような店が並ぶ中、トツシユがアレンを連れしてきた店は豪華な門構えの店だった。

店内に入るとすぐに、大胆に切り込まれたスリットから脚を覗かせるチャイナドレスを着た美女に出迎えられた。

「いらつしゃいませトツシユ様」

店の女はトツシユの名を知っているようだ。

しばらくして、チャイナ服を着た別の美女が店の奥から出てきて、トツシユがなにも言わなくても店の奥の個室に案内された。

個室は朱色が多く使われ、部屋の真ん中には朱色をした円形の回転テーブルが置かれていた。

席に着いたトツシユはメニュー表をアレンに見せながらしゃ

べった。

「この店はエビチリが美味いんだ」

「俺、辛いのが苦手なんだけど、この店辛そうなもんばっかな」

「食わせてもらう立場の奴が文句言つな」

「文句じゃねえよ、腹の中入ったらみんな同じだしな」

「それでおまえはなに頼むんだ？」

「うんじゃ、全部持つて来させる」

「は？」

トツシユは眼を丸くして、半ば呆れたように口をポカンと開けた。

面倒くさそうにアレンはメニューを全部なぞるように指差して口を開いた。

「聞こえただろ、ここに書いてあんの全部持つて来させる」

「全部食う気か？」

「もちろん、残さず食う」

「よし、おい全部持つて来い！」

トツシユが近くにいた店員に声をかけると、店員はドレスのスリットから脚を覗かせながら慌てたようすで厨房に走って行った。

しばらくして湯気の立つ料理が次々と運ばれて来て 消えた。もちろんアレンの腹の中に。

腹の底に料理を流し込んでいく小柄な少年を見ながらトツシユがため息をついた。

「マジで食ってやがる。おまえの胃はジャンクイーターか……」

ジャンクイーターとはゴミでも金属でもなんでも喰う怪物の名前だ。

アレンは口いっぱい豚肉を頬張って、それをウーロン茶で流し込んで喉を鳴らした。

「俺の胃は特別せいだかな。あんたの財産全部食ってもいいぜ」

「それはやめてくれ」

トツシユは苦笑いを浮かべながら少し汗をかいた。

そして、店のメニューを全部食い終えたアレンは腹を擦りながら天井を仰いだ。

「食った食った、これで三日は食わなくても平気だ。飯食わせてもらったついでに、もうひとつ頼みたいことがあんだけど、いいか？」

「あつかましい奴だな。言ってみろ」

「仕事の世話してくんねえか？」

「なにができる？」

急にトツシユの眼が鋭く光り、アレンは不敵な笑みを浮かべた。

「なんでも」

「それは話が早い」

そしてトツシユも笑った。

トツシユの言葉からも伺えるように、彼ははじめからアレン

にある話を持ちかける気であったのだ。

煙草に吹かせながらトツシユが仕事の内容を話しはじめた。

「仕事に頭は必要ない。ただ向かって来る敵を倒せばいい」

「ふ〜ん、ボディガードってことかよ？」

「目的はある物を手に入れることだ。それを手に入れるために、おまえは俺に手を貸す。簡単な仕事だろ？」

「簡単とは思えないけどね」

アレンは空気を察していた。目の前にいる男は小物ではない。それだけに仕事が簡単なものとは思えなかった。

無言でアレンは三本指を立ててトツシユの眼前に近づけた。それを見たトツシユが口を開く。

「三万イエンか？」

三万イエンもあれば、まあまあ困ることなく一年間暮らせる額だ。

アレンは首を振った。

「いいや、三食昼寝付き」

「……おまえなあ」

「それから、報酬は五〇〇〇イエンでいい。前金に二〇〇〇イエン、仕事が終わったら残りの三〇〇〇イエン、もちろんキヤツシユで」

「その条件を飲もう」

と、トツシユが言葉を発し終えたときだった。爆音とともに厚い壁が粉々に吹き飛び、辺りが咳き込むような煙に包まれた。

料理店の裏路地に集まった数人の人影は身を潜め、盗聴器によつて厚い壁の向こうで交わされる会話の一部始終を聴いていた。

《仕事に頭は必要ない。ただ向かつて来る敵を倒せばいい》

《ふ〜ん、ボデイガードつてことかよ？》

《目的はある物を手に入れることだ。それを手に入れるために、おまえは俺に手を貸す。簡単な仕事だろ？》

《簡単とは思えないけどね》

壁の向こうは店の個室で、そこにいるのは二人だけらしいことが確認されている。ここに集まっている者たちの標的は、そのうちのひとり。トツシュと呼ばれる男だ。

《その条件を飲もう》

と盗聴器から聴こえた刹那、女の声が裏路地に響き渡った。

「突入！」

硝煙と爆音とともに分厚い壁が破壊され、店の中に一人の女と銃を構えた男たちが流れ込んだ。

アレンとトツシュは先の見えない煙の中を逃げようとしたが、席から立ち上がったのみで足を止めて、両手を高く上げた。

煙が晴れてくると、ハンディバズーカを持つ女が現れ、その後ろに従える男たちは小型マシンバルカンの銃口をアレンとトツシュに向けていた。

女は白衣のようなロングコートの裾を揺らしながら、ミニスカートから覗く脚を見せ付けるように歩き、ブーツの踵を鳴ら

してトツシユに詰め寄った。そして、雄ライオンのような金髪ヘアをかき上げながら濡れた唇を舐めた。

「お久しぶりねトツシユ」

妖艶な声音だった。

この女の名前はライザ。“ライオンヘア”と異名される帝王ルオの側近だ。

トツシユは両手を挙げながら口にくわえていた煙草を床に吐き捨てた。

「そんなでもないだろう。前に遭ったのは一週間前だったか？」

ライザと話しながらもトツシユの目は他のところを観察していた。

目の前にいるライザの持つハンディバズーカは、ライザが社長を務めるライザ社の最新型モデルで、発射する炸薬弾は感度が高く、威力も非常に大きい。しかも、どうやら正規の物ではなく、ライザ専用に変更が施されているようだ。

ライザの後ろにいる男たちの持つ銃は最新式の小型マシンバルカンで、優れた連射性と集弾性を備えている。

この部屋の出口は元からあった出入り口の扉とライザが壁に開けた穴。壁にできた穴まで行くには小型マシンバルカンを構えた男たちの中を通ることになり、逃げるとすれば出入り口の扉か？

だが、敵は連射性を備えた小型マシンバルカンを装備している。バルカンを乱射されたら逃げ切るのは困難と言える。

トツシユは横で手を上げてしているアレンに目を向けた。

「どうにかできるかアレン？」

「いいや。まだあんたから金もらってないからどーもならん」

それは金さえもらえば、この状況を打破できるということか？

“ライオンヘア”は獲物でも物色する眼つきで、アレンを下から上に舐めるように見た。

「可愛らしい坊やね。トツシユといるからにはただの子供じゃないだろうけど……」

自分を見て舌舐めずりしたライザを見てアレンは悪寒を覚えた。

「俺はこんな男と一切関係ない。ちょっと飯をおごってもらっただけ」

もちろんアレンの言う『こんな男』とは他でもないトツシユのこと。まだ雇い主でない男に懸ける命は持ち合わせていないのだ。

一切の自分との関係を絶とうとするアレンの言葉に、トツシユは呆れたように言葉を吐いた。

「……おいおい、そりゃないだろ」

「だってまだ金もらってないもん」

「飯おごってやっただろ」

「あんたの命助けたからチャラだね」

「砂漠から運んでやっただろ！」

アレンとトツシユはこのまま喧嘩でもはじめそうな勢いだっ

た。それを止めたのはハンディバズーカを二人に向けたライザだった。

「アナタたち、自分の置かれている状況を理解しているのかしら？」

自分の置かれている状況を忘れているトツシユが、鋭い眼つきでライザに振り向いて怒鳴り散らした。

「わかつてる！」

とんだとばっちりを受けたライザは、唇を尖らせて不満顔をする

「アナタたちはアタクシたちにいつ殺されても可笑しくない状況なのよ。わかったら口を謹んで、手を首の後ろに回して膝を突きなさい！」

トツシユはすぐにライザの言うとおりにしたが、アレンは手を天井に向けて上げたままで従うようすを見せなかった。

「だから俺はこんな男と関係ないから解放して欲しんだけど？」

とアレンが言っても無駄なようで、怒っている“ライオンヘア”はハンディバズーカの銃口をアレンの顔面に向けた。

「さっさとアタクシの言うとおりになさい。そうすれば命は取らないわ」

「はいはい」

抵抗をあきらめたアレンはため息混じりの声を漏らして床に膝を突いた。

ライザはアレンとトツシユをすぐに殺す気はないらしい。そ

れに疑問を覚えたのはトツシユだった。

「どうしてすぐに俺様を殺さん？ いつもなら容赦なく銃撃されるが、拷問にかけてジワジワと殺す気か？」

「拷問もいいけど、今のアタクシにアナタを権限はないわ。今日は商談に来たのよ」

商談に来たにしては物騒な格好だ。それに、この状況では一方的な取引しかできそうにない。だからこそトツシユは取引に応じるしかない。

「それでどんな商談だ？」

「“アレ”を手に入れるために力を貸して欲しいのよ」

ライザの言う“アレ”と聞いてアレンはすぐにピンと来た。

トツシユはアレンを雇おうとした際に目的を『ある物を手に入れることだ』と言った。そして、『ただ向かって来る敵を倒せばいい』とも言っていた。さしずめ“敵”とは今日の前にいる輩のことだったのだろう。

少しの間、沈黙して考え深げに俯いていたトツシユが顔を上げた。

「俺様に拒否権はないらしいが、報酬くらいはあるんだろう？」

この状況において報酬を要求するトツシユにライザは妖艶と微笑んだ。

「さすがは“暗黒街の一匹狼”さんだこと、肝が据わっているわね報酬はアナタの命でどうかしら？ 今後一切、帝國はアナタの命を狙わない。アナタが帝國に危害を加えなければの話だ

けど」

「俺様の命か……魅力的な提案だが、金も欲しい」

「ふふ、一〇〇万でどうかしら？」

「その条件で飲もう」

商談が成立したところで、アレンがこの場に適さない間延びした声を発した。

「あのさあ、俺の処分はどうなるわけえ？」

妖しい眼つきでアレンを見たライザは、上唇を舐めて熱い吐息を漏らした。

「坊やはアタクシが可愛がつてあげるわよ」

アレンはゾクゾクと身を震わせて、わざと嘔吐するような仕草をした。

「オエー、そりゃ勘弁だ」

「アタクシはアナタみたいに性格の曲がった子が好きなのよ」

「俺はあんたの期待に添えないと思うけどな」

「あら、そんなことないわよ。それに、“一匹狼”が雇った子だし、興味がそそられるわ」

「まだ雇われてない」

「なら、アタクシが代わりに雇って差し上げるわ」

「それはお断り」

アレンは小型マシンバルカンを構える男たちに一瞥した。男たちの緊張の糸は全く途切れるようすはない。つまり、少しでも可笑しな動作を見せれば撃たれる。

どこかで歯車が激しく回転する音が聴こえた。その音にライ

ザが気づいた時には、アレンが右足で床を激しく蹴り上げたところだった。そして、蹴られた床は四方に碎け、アレンは扉までの五メートルという距離を軽く跳躍した。

銃口から火を噴く小型マシンガンから弾丸が連射され、アレンに当たった三発の弾が高い金属音をあげて地面に落ち、最後に当たった一発がアレンの左肩の肉を貫いた。

「くっ！」

歯を食いしばるアレン。

アレンは銃弾を躲しながら、右手で拳を作つて眼前の扉を激しく粉碎し、個室から飛び出すことに成功した。

鮮血が吹き出る左肩を右手で押さえながら、アレンは賑わう店内を跳躍した

店内で飯を食っていた客たちは、自分たちの座るテーブルを足場にして料理を滅茶苦茶にし、一〇メートル以上もの距離を跳躍する少年を見て目を白黒させた。

この店の個室は完全防音であり、店の賑わいもあつたのも相俟つて、個室の壁がハンディバズーカによって破壊されたことに気づいていなかった。客たちはアレンが扉を破壊したときにはじめて騒ぎに気づいたので。

店を飛び交うアレンにマシンガンの銃口を向けられるが、それをライザが静止させた。

「もういいわ、騒ぎを大きくする必要もないわよ。それにあの子まだ詳しくは知らないんでしょ？」

ライザに顔を向けられたトツシユは大きく頷いた。

「どうせ盗聴してたんだろう。この店の中で話したことで全部だ」

「なら放置しても問題ないわね。でも、可愛い子を逃がしたの  
は残念だわ」

そう言っつてライザは自分の人差し指を濡れた唇で軽く噛んだ。

その日の夕暮れ、シスター・セレンはいつもどおり夕食の買  
い物を済ませ、自分の勤める教会へ足早に帰ろうとしていた。

セレンは生まれた時からこの街を出たことがなく、かれこれ  
一五年ほどこの街に住んでいるが、それでも夜は怖いし、この  
街の治安がいいとも思っていない。そのため、僧衣の下には、  
護身用としていつもハンドガンを忍ばせている。だが、そのハ  
ンドガンの銃口はこれまで一度も火を噴いたことがない。

ネオンが店を彩りはじめ、屋台からは香ばしい肉やソースの  
焼けた匂いが漂ってくる。

武器や防具を扱うジャンクショップの横を抜け、セレンは裏  
路地の横を抜けるところだった。昼間ならば、この裏路地を通  
つて教会に帰るのだが、日が落ちはじめてからは通りたくない  
路だ。そのため、いつもならば素通りするのだが、今日に限っ  
ては違った。

裏路地の闇から音が聴こえた。

「ちよつと嬢ちゃん、手を貸してくれないかい？」

それは中年男性の声音だった。

セレンは闇の中に顔を突っ込み、そこにいる男を確認しよう

とした。セレンの頭には困っている人を助けなくてはいけないという使命感だけで、それが危険な行為だったことをすっかり忘れていた。仲間以外の人間と関わらないことが、この街でトラブルに巻き込まれない鉄則だったにも関わらず。

薄暗い路地の中に入り、壁に寄りかかり腹を押さえて座っている中年男がセレンの目に入った熊のような男は顔を歪ませながら歯を食いしばり、見るからに苦しそうな表情をしていた。

「大丈夫ですか？」

とセレンが声をかけると、男は荒々しい息遣いで答えた。

「ちよつと腹の調子が……よくなくなつてよ……」

「悪い食べものの中つたん　!？」

セレンは物陰から突然現れた男によって口を押さえられてしまった

そう、一人が病人のフリをして、残りの一人が物陰に隠れて獲物を狙う。男たちは暴漢グループだったのだ。

普段、暴漢に襲われる割合が多いのはこの街の人間ではない。それが今、暴漢グループに襲われているのは、この街に一五年も住む者だった。セレンは自分の間抜けさを悔やんだ。

セレンの口は泥臭くて毛むくじゃらの分厚い手によって塞がれ、真後ろにいる男の身体がセレンのヒップや背中にぴったりと密着している。時折、耳に吹きかけられる荒い息にセレンは身震いした。こんなときにセレンにできることは神に祈るのみだが、その祈りも通じない。

病人のフリをしていた男が立ち上がったかと思うと、セレン

は乳房を鷲掴みされた。

「尼さんのクセになかなかいい乳してんじゃねえか」

目の前で舌舐めづりをする男を見てセレンは失神しそうになった。きつとこのまま男たちがいいようにされて、身包み剥がされて売られるか、殺されるか、するのだろうセレンはいっそのこと殺して欲しいと思った。

地面には先ほどセレンが羽交い絞めにされてしまったときに落とした買物籠があり、その周りには汚れてしまった野菜や果物が散らばっている。それを見たセレンの目頭は熱くなり、大粒の涙が頬を伝って地面に次々と落ちた。嫌だ。

心の中でなにかが吹っ切れたセレンは、自分の口を塞いでいた芋虫みたいな指を、歯を立てて思いつきり噛んでやった

「痛えっ！」

情けない声をあげて男がセレンから身体を放した瞬間、セレンはその隙を突いて僧服の裾を捲り上げ、太ももに装着していたホルダーからハンドガン抜いて構えた。

銃口を向けられた男は両手を高く上げ、セレンに指を噛まれたもう一人の男は、噛まれた指を口に銜えながらセレンから距離を取った。

「わ、わたしから離れて、さっさとどこかに行ってください……さ、さもないと撃ちますよ！」

セレンは自分では凄みを利かせて言っただつもりだったのだが、その言葉は振るえ、ハンドガンを構える手も大きく震えていた。それを見た男は銃口を向けられながら嗤った。

「嬢ちゃん、ちゃんと銃口を向けないと当たんねえぜ」

そのとおりだった。セレンの手は震えていて、銃口は男から明後日の方向を向いている。これではとても銃弾が命中するとは思えない。

「撃ちます、本当に撃ちますよ！」

セレンは叫ぶが、もはや男たちは信じていない。この女には撃てないと確信している。

口から指を抜いた男がセレンにジリジリと詰め寄り、セレンの前にいる男の巨大な手が伸びる。

「撃ちます！ あっ!？」

撃てなかった。セレンは手首を掴まれて捻られ、そのままハンドガンを地面に落としてしまった。銃を持っているだけでは、護身用にはならないのだ。

セレンの身体は巨漢の男によって力のまま地面に押し倒され、僧衣が泥で穢された。

再びセレンは男に捕まり、もう一人の男がハンドガンを拾い上げてまじまじと見詰めた。

「こりゃマガジンが装填されてねえぞ。がははっ、こんな玩具で冷や汗かいて損したぜ」

ハンドガンには弾が入っていなかった。これではセレンが引き金を引いていても弾は出るはずもなかった。銃の取り扱いに慣れていないセレンは、そんなことも気づいていなかったのだ。シスターに覆いかぶさる熊のような男が、穢れを知らない乳房を激しく揉みしだく。

「止めっ!？」

叫ぼうとしたセレンの顎が無理やり閉じられた。自分の顎から伸びる毛むくじやらの腕をセレンが目線で追うと、そこにはニヤついた男の顔があつた。セレンは熊男の上に乘られて胸を掴まれ、もう一人の男には顎を無理やり閉められ叫ぶこともできなかつた。

再びセレンは心の中で神に祈りを捧げた。

そのときだつた。

裏路地に缶カラを蹴飛ばしたような音が響いた。

男たちは耳を尖らせて、音のした方向を勢いよく振り向き、熊男が声をあげた。

「誰だてめえ!？」

「俺のこと？ ただの通りすがり」

闇の奥から現れたのは左肩を手で押さえた少年だつたその押さえている手からは、紅い血が滲み出していた

セレンは神に感謝した。これで自分は助かるかもしれない。

けれど、次の少年の言葉にセレンは愕然とさせられた。

「ちよつと横通るけど、俺のこと気にしないでお楽しみを続けて」

この言葉に男たちは口を開けてきよんとした。

少年の態度は男たちが怖いとか、関わりたくないとか、そういったものではなく、本当にどーでもいいと言つた態度だつた。この少年は、少年の顔を持った冷酷無慈悲の悪魔かもしれない。空気の横を通るように少年は男たちの横を歩いていく。

このときほどセレンは自分の不幸を呪ったことはなかった。ただろう。救いの手が現れたと思つたら、それは悪魔だった。だつたらはじめから手なんて差し伸べて欲しくない。ぬか喜びとはこのことだ。

だが、話の展開は少し違つた方向に向かうことになった。セレンの顎を押さえつけていた男が、セレンを解放して立ち上がり、少年の背中に向かつて叫んだのだ。

「おい小僧、俺たちの顔見たからは生かしちやおけねえ！」  
そう言つた男の手には銀色に輝く刃のギザギザしたナイフが握られていた。

振り返つた少年はすぐく機嫌の悪そうな顔をして、自分の左肩から右手を離し、その手で紅く染まつた右肩の傷口を指差した。

「俺さ、今すぐく機嫌悪いわけ。なんでかつつと、撃たれたから。マジで痛くてイライラすんだよ！」

歯車の回転する音が裏路地に響いた刹那、ナイフを持った男の左頬を少年の拳が激しく抉つた。それは目にも止まらぬ速さだった。

少年に殴られた男は五メートルほど宙を飛び、地面に落ちてからは服に泥をつけながらゴロゴロと五メートルほど転がった。相棒が一発でヤられたのを見て逆上した熊は、頭に血を上らせてセレンの上から立ち上がると、なにも考えずに猪突猛進で少年に素手で殴りかかった。しかし、少年は赤子相手のように軽く熊を躲し、熊の腹に左膝で一発喰らわせてやった。それで

熊はノックアウト。

少年は口から泡を吹いてうつ伏せになる熊の尻を踵で蹴飛ばし、満足げな笑みを浮かべた。

「糞つたれが。俺に喧嘩売ろうなんざ一億年早えんだよ」

そう言つて少年は熊の後頭部に唾を吐きかけた。

目の前で繰り広げられた出来事に唾然としていたセレンであったが、我に返つて地面から立ち上がり僧衣についた汚れを手で払うと少年の前に立ち、大きく右手を振り上げた。

「この人でなし！」

バシン！

日も沈み真つ暗になつてしまつた裏路地に鳴り響く音。

セレンは涙ぐみながら少年の頬を叩いた。

普段であれば人に手を上げるなどしなかつただろう。しかし今は、極限状態の恐怖から解放されることにより、いろいろなことが思い出されて頭に血が昇っていた。

なにがセレンの感情を高めたかというと、それは少年の行動にある。

「あなた、わたしが襲われてたというのに、助けもしないで立ち去ろうとしましたよね！」

「別にいいじゃん、結果的に助けてやつたろ？」

「助けて頂いたのは感謝いたしますけど……あつ!？」

会話の途中でセレンは目を丸くして、自分の口をはつと息を呑みながら手で押さえた

セレンの視線は少年の左肩に注がれていた。そして、紅く染

まる少年の肩を見ているうちに、セレンの顔からスーッと血の気が引き、頭に昇っていた血が一気に足元まで落っこちた。

「だ、大丈夫ですかあ!?! 肩から血が出ているじゃありませんか、すぐに手当てしないと! あ、あの打ったりしてごめんなさい、ちよつと冷静さを欠いていたみたいで……」

と言っているセレンは今も冷静さを欠いているようだった。

目の前で慌てふためく年端も行かぬ尼僧を見て、少年はため息をついてパイロットハットの上から頭を搔いた。

「肩の怪我なんか大したことねえよ」

少年とセレンの歳は同じくらいだと思われるが、二人の纏っている雰囲気は明らかに違った。セレンはおどけなさの抜けない少女であり、少年は口も性格も悪いただのガキのようだが、少年はセレンとは明らかに違う影を纏っていた。

歩き去ろうとする少年の背中をセレンは見送りそうになってしまった。なぜだが、少年の背中に声をかけることに気が引けたのだ。しかし、セレンは喉から声を絞り出した。

「あの、待ってください。病院まで付き添います!」

少年が無愛想な顔つきで振り返った。

「病院は行かねえ」

「駄目ですよ、病院に行かなきゃ!」

「俺って頑丈だから、血なんてとっくに止まってんし。病院とかあんま好きじゃねえんだ」

「では、わたしの家で手当します」

「一晩泊めてくれんなら行く」

「えっ」

少年は悪戯な笑みを浮かべ、それを見たセレンは少し戸惑った。だが、命の恩人であり怪我人である少年をこのまま放って置くわけにはいかず、セレンは首を縦に振った。

「わたしの家は寂びれた教会ですけど、それでよろしければお泊めします」

「うんじゃ、泊めてもらうわ。で、あんた名前は？」

「わたしですか、わたしはセレンと申します」

「ふうん、俺の名前はアレン、よろしく」

差し出されたアレンの真っ赤な右手を見てセレンは少し戸惑った。アレンの手は乾いてひび割れた黒い血に覆われていた。

そんな手で握手を求められても困ってしまう。

すぐにアレンはセレンの表情を悟って、服で手についた血を適当に拭い去り、再び右手を差し出した。けれども、乾いた血は拭い去れず、また少し付いていたが、セレンは相手の好意を裏切つてはいけなと思いアレンの手を握った。

柔らかかった。アレンの手は思ったよりも柔らかくて温かい手だった。そのことにセレンは少し心を解きほぐす。

「柔らかくて赤ちゃんみたいな手ですね」

そう言われた途端、アレンは握っていたセレンの手を激しく振り払い、唇を尖らせて怒ったようにそっぽを向いた。

「俺は赤ん坊じゃねえ。ほら、さっさとあんたんちに案内しろよ」

「別にそういった意味で言ったんじゃないですけど……。わか

りました、わたしの家に案内します、付いて来てください」

なぜ相手に態度を悪くされたのかわからないまま、セレンはしゅんとした表情で歩きはじめた。が、その足が急に止まる。

「ああっ!? 夕飯のおかず!」

地面に散乱する野菜や果物を見て、セレンの瞳は少しずつ濡れはじめていた。それでもセレンは涙を堪えて、黙々と地面に落ちて汚れてしまった食べ物を拾い集めて籠の入れていく。

籠の中にリングゴ持った手がそっと入る。それはアレンの手だった。

「洗えば食えんだからクヨクヨすんなよ」

別にそういうことで泣きそうになってるんじゃない。セレンはそう思いながらも、アレンに優しさを感じて嬉しかった。

最初の印象よりも悪い人じゃないかもしれない。

街の奥まった道の前にある寂びれた教会。そこに訪れる迷える子羊たちはいない。この教会に出入りする者は、今やセレンただ独りだった。

所々、屋根や壁が風化し、破損してしまっている教会の外観を見て、アレンは正直な感想を口にする。

「これ本当に教会かよ、寂びれてんなあ」

この言葉を聞いてセレンは少しムツとしたが、すぐに悲しい表情をして呟くように話した。

「昔から寂びれた教会だったんですけど、三年前に神父様がお亡くなりになってからは、前にも増して寂れてしまっ……」。

今のところ新しい神父様が赴任して来る予定もありませんし、今この教会に勤めているのもわたしだけです……」

「つーことは、あんた独りで暮らしてることかよ？」

「ええ、三年前からは独りでこの教会に住んでいます」

そのため、セレンは裏路地でアレンに一晩泊めてくれと言われた時に、少し戸惑いを覚えて躊躇した。

女独りで暮らしている家に、たとえ命と恩人と言っても男を泊めていいものか。それにまだ相手の素性もわかっていないのに。それでも首を縦に振ってしまったのは、困っている人を見ると放っておけないセレンの性格だろう。その性格が幾度となくトラブルの種になったのは言うまでもなく、今日の出来事は最も最悪だった。

目の前にある教会は寂れていて、物静かな印象を受けるが、どこからともなく激しい地響きのような音が聴こえてくる。

「あのさ、近くで工事とかやってんの？」

アレンが尋ねるとセレンが大きく首を振った。

「一ヶ月ほど前から近くで工事をしているみたいで、今まで静かだったんですけど、先日から急にうるさくなってるんです」

「ふーん」

二人は壁と壁に挟まれた細い道を通って教会の裏手に回った。そこには小さな庭があり、そこで見た物にアレンは感嘆の声をあげた。

「こりやすげえな」

そこにあつた物は綺麗に咲き誇る色取り取りの花だった。

美しい花壇の横には湧き水の流れる水路があり、水のせせらぎとともに甘い香りのする風が爽やかに吹く。この場所は、この街のオアシスと言える場所だった。

セレンは花々をかけがえのない存在として、大切に思う眼差して見つめた。

「神父様は花を育てるのが好きな方でした。今でもわたしにそれを受け継いで育て、少しでも生活の足しになればと売っているんですよ」

「ふん、クーロンで大地に咲く花を見るなんて思ってたかった」

クーロンと呼ばれるこの街は、街としては大きく繁栄しているが、その大地は汚れ、枯れ果てているために栄養価もなく、花が咲くに適してるとは到底言えない。

教会の裏口から建物の中に入り、アレンはセレンに連れられるままに薄暗い廊下を歩いた。

廊下を歩いている途中で、不意にセレンがアレンに声をかけた。

「アレンさん、その床が」

「うわっ!？」

急に木造の床が割れ、アレンは抜け落ちた床に片足を取られてしまった。

事故とはいえ、大事な教会が壊されてしまったことにセレンは頭を抱えた。

「腐ってるって言おうとしたのに……もう、これからは気をつけてくださいよ」

「だったら、早く言えよ」

「だって、わたしはいつも意識せずに避けてるから、ついつい言いそびれてしまったんです！」

「つーかさ、腐ってるってわかかってんなら直すとかしろよ」

「直すお金もないですし、わたし大工仕事なんてできません！」

「なんであんた怒ってんだよ、床が抜けたのは俺のせいじゃないだろ」

「だって……」

生まれて間もないときからセレンはこの教会で育った。この教会はセレンにとつて掛け買いのない大切な場所であり、事故であったといえ、その大事な場所が壊されることに怒りがこみ上げてくる

頬を少し赤くしながらもセレンは高ぶる感情を抑え、アレンをある部屋に案内した。

ごんまりとした小さな部屋にはベッドとダンスが置いてあるだけだった。

「長い間使っていませんでしたけど、この部屋を一晚使ってください」

セレンは長い間使われてないと言ったが、その部屋の床にもダンスの上にも埃なく、アレンがベッドに腰掛けても埃が空気中を舞うことはなかった。そのことから、この部屋が定期的に、

セレンの手によって掃除されていることが伺えた。

「わたしは包帯と消毒薬を持って来ますから、この部屋でじっとして待っていてください」

「わかった」

セレンはアレンを部屋に残し、自分の部屋に救急セットを取りに向かった。

廊下を歩きながら、セレンは今さながらアレンを連れて来てしまったことを後悔する。しかし、この家には盗まれるような物はなく、アレンが自分ことを襲うような人とは思えない。でも、やはり見ず知らずの人を泊めることに不安はあった。

アレンは悪人ではないが、善人とも思えない。それがセレンの感想だった。

救急セットとタオルとバケツに張った水を持ったセレンは、アレンの待つ部屋のドアをノックもせずを開けた。

「……………!？」

部屋に入った途端、セレンは息を呑んで目を丸くした。

あまりの驚きにセレンは荷物を落とすことなく、ただ固まってしまえばかりで、アレンから目を離せずにいた。

セレンの視線の先には服を全て脱いでいる、全裸の状態のアレンが立っていた。

全裸を見られているアレンは気にすることもなく、セレンに声をかけた。

「ちよつとさ、背中見てくんない？」

「え、あつ……………」

自分に背中を向けるアレンから、セレンはまだ目を離せずにいた。

そこにあつたモノがただの男性の裸だったら、セレンは目を両手で覆って視線を逸らせたに違いない。しかし、そこにあつたモノは違ったのだ。

柔らかな曲線を描く脚の付け根にある小ぶりなお尻は、発達途中の少女のお尻のようであつたが、大きく形良く膨らんだ胸は見ているだけでセレンもドキツとしてしまう。そう、アレンは女だつたのだ。しかも、セレンを驚かせたのはそれだけではなかつた。アレンの右半身は鼠色に輝く金属によつて覆われていたのだ。

その場で動けなくなっているセレンの目の前までアレンが移動した。

「俺の身体ジロジロ見て、エツチだぞあんた。もしかして、そちの趣味があんのか？」

「え、違います、別に女の人が好きとかじゃなくて、その身体……」

「サイボーグだよ。こん中に入ってる臓器も半分は人工臓器」  
そう言つてアレンが右胸を叩くと、金属の鳴り響く音がした。アレンの右の乳房は左と形の上では差異なく再現されているが、やはり鼠色の金属でできていた。

アレンはセレンの手からタオルと水の張つたバケツを取り上げ、タオルを水で浸すと、右肩についた血の痕を拭きはじめた。血の拭き取られた傷痕は大きな瘡蓋になつていた。通常の人

間ではありえない回復の早さなのは言うかでもない。

水の張ったバケツの中に紅く染まったタオルが投げ入れられ、バケツの中から水が床の上に少しはね飛び散る。そして、アレンはセレンに向かって背中を向けた。

「背中ちよつと見てくんない？」

言われたとおりセレンがアレンの背中を　　というより、アレンから目を離せずにいたセレンが背中を見ると、そこには黒い煤がついたような跡が三つ並んでいた。その三つの後を線で繋げた先に、右肩の傷痕がある。この三つの跡はアレンが料理店で銃弾を受けたときのものであった。

「黒い煤汚れみたいな跡が三つありますけど？」

「そこんとこさ、へこんだりしてない？　ちよつと手で擦ってみて」

言われたとおりセレンはアレンの背中に触れた。温かかった。金属の背中は予想とは違い温かく、人の温もりが感じられた。しかし、人肌とは違い、硬い金属であることには違いなかった。

セレンが弾の痕を指先で擦ると、黒い煤が指先に残るだけで、アレンの背中にはへこんでいる痕もなにもなかった。

「別にへこんでもませんけど？」

「やつばな。あんな弾くらいでへこむはずないんだけど、いちよー確かめないとな」

「弾って、もしかして撃たれんですか!?　もしかしてこの傷も？」

にしては治りが早いことにセレンも気が付いた。

「貫通したから治りが早くて助かったぜ。炸裂弾とか喰らってたら泣いちゃうとこだったよなあ」

振り返ったアレンはセレンに向かって笑った。その笑みをみたとき、セレンはとんでもない人と係わり合いになってしまったことに気づいた。目の前にいる少年のような少女は、ただの人間ではない。

アレンは自分のお尻や脚などを見回すと、満足そうに頷いた。「他は撃たれたないみたいだな」

服を着替えはじめるアレンを見て、セレンはこれからこの少女とどうやって接すればいいのかを一生懸命、頭をフル回転させて考えていた。

まず、少年だと思っていたアレンが少女だったことで、それなりに態度が変わってくるだろうし、それよりもあの鼠色の身体を見てしまつては……。

アレンは軽くサイボーグと言ったが、あんな大掛かりな物は今だかつて、セレンは見たことも聞いたこともなかった。きつと、半身をサイボーグ化する技術は現代の技術ではなく、今に残る“失われし科学技術”によるものだろう。しかし、それでも誰がその技術を使ってアレンにサイボーグ手術を施したのかわからない。そんな技術を使いこなせる者が、この世に何人いるのか？

「あの、アレンさんつて……」

と言つて、セレンは口を噤んだ。

「俺がなに？」

「別にいいんです。それよりも、夕飯食べますよね？ 粗末なものしかありませんけど」

「夕飯はいらねえ。さつき腹いっぱい食って来たところだから……ま、代金は高くついただけ」

苦笑いを浮かべるアレン。それを見てセレンはなにを思ったか、こう口にした。

「食い逃げですか？」

「はっ？ 食って逃げたには逃げたけどさ、別に食い逃げじゃねえし、相手が一方的に撃って来たんだしさ」

「お金は持つてるんですか？」

「一文無し」

「やっぱり食い逃げしたんじゃないですか！」

「なんか勘違いしてねえか？ 俺は普通にトツシュって野郎と食事したら、変な女が配下の野郎どもをみたいのを引き連れて来て、気づいたらマシンガンでズドドドドドって撃たれたわけよ」

「トツシュって、“暗黒街の一匹狼”と呼ばれる人のことですか!？」

「そーいやー、そんな呼ばれ方してたような、してなかったような？」

「あなたいつたい何者なんですか!？」

これが一番聞きたかったことだった。

「何者って聞かれても困るよなあ。俺は俺だし、決まった職業

に就いてるわけでもねえしな」

誤魔化されているのか、本心からこんな回答をしているのか。アレンの表情からは窺い知ることはできなかった。

セレンはアレンから聞くことをやめた。世の中には知らない方がいいことが多い。きつと、目の前にいる少年に似た少女とは、深く係わり合いにならない方がいい。それがセレンの答えだった。

「わたしはこの部屋を出て右の突き当たりの部屋にいますから、用があつたら訪ねて来てください。じゃあ」

セレンは足早に部屋を出ようとしたが、それを真剣な顔をしたらアレンが止めた。

「あのさ」

「なんですか？」

「トイレどこ？」

「……はい？ え、えつと、部屋を出て左の突き当たりです」

「あんがと、じゃな」

人懐っこい笑みを浮かべるアレンに手を振られ、セレンはなんととも言えない表情で部屋を後にした。

その坑道が発見されたのは偶然だった

武器の運搬を秘密裏に行うために坑道を掘り進んでいたところ、その新たに掘り進んでいた坑道と古い坑道が偶然にぶつかったのだ。

古い坑道を見つけたトツシユは武器運搬計画を早々に取り止

め、失われた科学技術の発掘に乗り出した。

“失われし科学技術”の発掘は少人数で行われ、ダイナマイトなどは使用せずに、小型ドリルなどを使用し、地上に情報が漏れないように最大限の注意を払って行われていた。この場所は街の真下だった。そう、ここはクーロンと呼ばれる街の真下だったのだ。

最大限の注意を払いながらも、秘密はどこからか漏れるもので、もつともトツシユが気を払っていたはずの相手に嗅ぎ付けられしまった。それがクーロンの南に広がる砂漠の中心に存在するシユラ帝國の若き王 皇帝ルオだった。

街の外れのただの工事現場に偽装されていた空き地。そこに昨日から大量の人や、トラックに乗せた機材が運び込まれた。中でも一番目を引いたのは坑道掘削装置だった。

坑道掘削装置とはトンネルを掘るための機材であり、動力は魔導炉から供給されるエネルギーである電気だ。その全長は一四・九メートル、全幅二・八メートル、全高一・八から三・五メートルで重量三〇トン。先端に取り付けられたドリルには棘のような物が並び、それで岩などを砕きながら、約一時間の間に三〇メートル掘削することができる代物だ。

次々と運び込まれてくる機材を見ながらトツシユが頭を掻いた。

「まったくよー、俺様が街の奴らにバレねえようにしたのに、はあ」

ため息をつくトツシユの横で、“ライオンヘア”が前髪をか

き上げながら掘削装置を眺めていた。

「アナタのやり方じゃ、全坑道を見つけて出して掘り起こすのに何ヶ月かかることかしら？」

「一ヶ月くらいじゃねえか？」

「アタクシたちは三日でやるわ」

「雑な仕事して街のあちこちが陥没しそうだけだな」

「何事にも多少のアクシデントや犠牲はあるわ」

「そーですかい」

今のトツシユは帝國に牙を抜かれた狼だ。

トツシユの傍には常に彼を監視し、命を狙うライザ直属の軍隊　獅子軍の精銳が最低三名は付いている。それに加え、トツシユの腕にはプレスレット型発信機が付けられている。今のトツシユはトイレの中ですら気が休まらない。

と、思いきや。トツシユは大あくびをしながら、眠そうに目を両手で擦っていた。

「俺様は旅から帰って来て疲れてる。寝かせてもらう方がいいか？」

「駄目よ、アナタからは聞きたい話が山とあるわ。それに」

肉食獣のようなライザの金色の瞳がトツシユを放さない。

「アナタが街の外になにをしに行ったのか聞かせてもらいたいわ」

「女遊びをしに行ったただだが」

明らかに嘘だとわかる言葉だったが、それを平然とトツシユ

は言つてのけた。

「どんな遊びだったか詳しく聞きたいわ」

ライザは微笑みながらトツシユの頬に平手打ちを喰らわせた。避けられたものをトツシユは避けず、微動だにせず受けてたつた

紅く染まつた頬を気にすることなく、トツシユは不敵に微笑を浮かべた。

「女をヒイヒイ言わせてた。だが、たまにはこうやって女に甚振られるのもいいもんだ」

たとえ牙を抜かれても、狼の精神は変わらない。

「いいわ、話は少しずつ聞かせてもらうわ。まずは坑道の中に入りましょう」

踵を返し、白いコートの裾を揺らすライザが坑道の入り口に向かつて歩き、そのあとを背中に銃を突きつけられたトツシユが付いていった。

坑道の入り口は高さ三メートルの幅が四メートル。中も同じくらいの広さで、急な下り坂になっている。

オレンジ色のライトが点々と照らす坑道の中をしばらく歩き、先頭を歩いてきたライザの足が止まった。彼女の視線の先には金属の扉があった。

「この扉なんだけど、魔導学と科学の権威であるアタクシにも開けることができないのよ。もちろん破壊も試みたけど傷も一切付かず」

「俺様もいろいろやったが無理だった」

不気味な輝きを魅せる金属の扉。見た目はどうってことのない、まっ平らな板のような扉だった。それが開かない。

扉の前で腕組みをするライザ。

「なら、扉を無視して別の場所に穴を開けて中に入るうかしら？」

「俺様がすでにやった」

「知ってるわ」

ライザがこの坑道にはじめて足を踏み入れたときにはすでにこの扉までの道が掘り進められ、ライザが言った方法をトツシユが試した痕跡もあり、金属の壁の前で止まっている穴がいくつもあつた。

うくと唸つたライザは金属の扉をブーツの踵で蹴り飛ばしたあと、振り返ってトツシユに話しかけた。

「で、アナタはどうやってこの扉を開ける気だったのかしら？」

「さあな、手詰まりって感じだ」

「……あ、そう」

ライザの足が振り上げられ、扉を蹴飛ばしたのと同じ踵がトツシユの腹を抉った。

「うっ！」

トツシユは微動だにはしなかったが、その口元からは空気の塊が吐き出された。

「次は股間にいくわよ」

トツシユの股間の膨らみを見ながら妖艶と笑うライザの脚が

再び動く。

だが、トツシユがついに動いた。

ライザの脚を軽く躲し、後ろに居る銃を構えた三人の男たちよりも早くトツシユは動いた。

鋭い眼で狙いを定めたトツシユは銃を持っていた一人の男に襲い掛かり、腹を深く殴り、すぐにその男の後ろに廻り込んで、男を盾にしなから銃を奪い取った。

盾になっっている男は、それだけでも通常の銃弾を防ぐことのできる合金素材で織られた防護服を着用し、その上から多層構造の繊維素材で作られた防弾ベストを着ていた。文字通り、この男はトツシユの盾となっっている。

しかし、残った二人の男がトツシユを撃てない理由は他にもある。

トツシユの持つライフルの銃口はライザのこめかみに向けられていたのだ。

あっさりとしてやられたことにライザは頭を抱えた。

「ウチの精鋭が野犬に軽々とあしらわれるなんて、サイテーだわ」

悔しそう眉をひそめるライザのこめかみには、今もトツシユが銃口を向けている。

「形勢逆転はしたが、これからどうしたものか？」

敵の銃を奪い、人質も取った。がしかし、坑道の中は帝國軍の兵士たちで溢れ、そしてもう一つ。

「アナタの腕に付いているプレスレットのことをお忘れかし

ら？」

「いいや」

そう、トツシユの腕には発信機が付いていた。しかも。

「アナタに言い忘れていたことがあったわ」

不敵に笑うライザを前にして、トツシユも少し嫌な表情をす  
る。

「なんだ、言ってみる？」

「そのプレスレットが爆発するわ」

「そいつは困ったな」

さも困つてないように言つたトツシユは、銃の引き金から指をなるべく外さないようにして、プレスレットをしていた右手から左手に銃を持ち替えた。

「俺様の右半身が吹っ飛んだら、残つた左手でおまえの脳味噌を吹っ飛ばす」

それは本気だつた。この男なら必ずやるとライザも確信した。「アナタならたとえ死ぬことになつて、最後に敵に報いて死ぬでしょうね」

「俺様はただじゃなにもしない」

そして、ライザはついに折れた。

「わかつたわ、アタクシを人質にしてどこまで逃げられるかやってみなさい」

「最後まで逃げ切つてみせる」

トツシユが笑う。それは自信の表れだつた。

夕飯をついついいらないと行ってしまった手前、アレンのすることと言ったら寝ることしかなかった。

いびきを立てて脚を大きく広げて寝ていたアレンが突然の目を開けた。

なにかが爆発したような物音が聞こえたのだ。

しかし、彼女はまた目をつぶって寝ようとした。

どこでなにが起きようと、自分の直接危害が加えられなければ、関係ないのだ。

しばらくして、再び爆発音がした。今度のものは先ほどよりも大きく、建物が古くボロいせいもあるが、大きく建物が揺れた。

さすがのアレンもこれにはキレたようで、ベッドから上半身を起こして怒鳴り散らした。

「俺のジンサーの楽しみは寝ることと食うことだ！俺の楽しみを奪う糞野郎はどこのだいつだーっ！」

ベッドから跳ね起きたアレンは、適当に投げ置いていたパイロットハットを被り、部屋の外に飛び出した。

「きゃっ！」

可愛らしい声を出したのはもちろんアレンではない。部屋を急に飛び出して来たアレンにぶつかって、床に尻餅をついているシスター・セレンだ。

「もお、いきなり部屋から飛び出して来ないでくださいよ！」

「あなたの注意力が足らねえんだよ」

「もお！」

顔を膨らませて怒ったセレンは、アレンを無視するように廊下を走って行ってしまった。その後をアレンが追って、すぐにセレンの横に付く。

「あんたも馬鹿デカイ物音聞いたんだろ？」

「だから外に向かつてるんです！」

「なんの音だと思う？」

「わからないから見に行くんですよ！」

「そりゃそーだ」

二人はボロボロの椅子の置かれた静かの聖堂を抜け、教会の前の通りに飛び出した。

すぐにセレンが空に立ち上がる煙を見つけた。

「あそこはたしか工事現場」

「銃声だ」

アレンが呟いてすぐ、通りの曲がり角から人影が現れ、地面を激しく蹴り上げながらこちらに向かつて走って来た。

何者かに追われているような人影は、アレンたちの前を通り過ぎようとしたのだが、ふとアレンの視線が人影と合った。

「あんたは」

「おう、いいとこで会った、俺様を匿え！」

セレンは目を丸くしたまま謎の男に押され、アレンとともに聖堂の中へ後ろ歩きで押し込まれてしまった。

謎の男は聖堂の扉を閉め、アレンとセレンに向かつて振り返った。その男はトッシュユだった。

「とにかく俺様を匿え、礼はする」

次の瞬間、聖堂の扉が激しく開けられ、ライフル銃を持った数人の男たちが聖堂の中に流れ込んで来た。

「怪しい男を見かけなかったか！」

男たちは入って来るなり、アレンのセレンに銃を向けた。

もちろん『怪しい男』とはトツシュのことだが、トツシュの姿はすでにどこにもない。そこには古びた聖堂があるだけだ。

アレンは大あくびをしながら、受け答えをする。

「爆発音がしたみたいだから外に出ようと思ったんだけどさ、なんかあったの？」

「貴様らの知ることではない！」

「はいはい、そーですか。怪しい奴なんか見てねえよ。こつちにいるにはシスターだし、嘘は付かねえから、さつさと別んとこ探した方がいいぜ、追ってる奴が逃げちゃうよ。」

アレンの言葉に続いてセレンがひと押しする。

「神聖な神の家に銃を持ち込まないでください、お願いします。」

丁重に頭を下げるセレンであったが、男たちは構わず聖堂内を搜索しようとした。

だが、外の通りから男の声が聞こえて、足が止まる。

「怪しい男がいたらしいぞ！」

聖堂から男たちが無愛想な顔をして無言で出て行く。アレンが背中に唾を吐きかけたことにも気づかず。

一気に肩から力の抜けたセレンは早々に聖堂の扉を閉めた。すると、今までどこに隠れていたのか、トツシュがひょっこり

と顔を出した。

「プレスレットを外して男にプレゼントしたのが効いたな。俺様の悪運も大したもんだ」

「わたしは不幸のどん底です」

セレンは深くため息をついた。 今日の特についてない。

裏路地で男たちに襲われ、謎の少女を家に泊めることになり、今度は謎の男をその場の空気に流されて匿ってしまった。今朝割った卵に黄身が二つ入っていたが、もしかしたらその時に今日の運を使い果たしてしまったのかもしれない。

木製の椅子に腰掛け、煙草に火を点けたトツシュの顔が、薄闇の中に浮かび上がる。

「さてと、匿ってもらった礼はどうするか。一五〇〇イエンでどうだ？」

「一五〇〇イエンですか!」

思わず声をあげてしまったセレンを見て、トツシュがうぐんと唸る。

「それでは満足できないか。三〇〇〇イエンでどうだ？」

「違います、お金とかじゃなくて……」

さっさと出て行つて欲しかった。

これ以上ごたごたに巻き込まれたくない。それがセレンの本音だった。

「金じゃないと来たか。そんなことを言う人間がこの街にいたなんてな、さすがは教会だ。そんな慈悲深いシスターにお願いがあるんだが、一晩泊めて欲しい」

トツシュの言葉に、さすがにセレンは頭を抱えてあからさまに嫌な表情をした。泊めて欲しいイコール匿って欲しいと同じ言葉だ。だが、セレンはうなずいてしまった。

「わかりました、一晩お泊めします」

「ありがとうございます」

景気のいい声でトツシュは言うが、セレンにしてみれば悪い。煙草の煙を天井に向かって吐いたトツシュの前にアレンが立つた。

「あんたさ、まだ俺のこと雇う気ある？」

「前金は払える状態じゃないぞ。それに三食昼寝付きも難しそうだ」

「一万イエンで手を打ってやるよ」

「五〇〇〇イエンじゃなかったのか？」

「条件が変わったし。あー、それとさ、こっちのシスター・セレンへのお礼はこのボロ教会の建て直しでいいよ」

勝手に自分へのお礼を決められたセレンは声を荒げた。

「そんなこと頼んでいません」

「あんたさ、お礼はちゃんと貰わないと駄目だぜ」

アレンの言葉にセレンの心が揺らぎ、彼女がトツシュに頭を下げようとした瞬間、トツシュが先に口を開いた、

「匿ってもらっただけで教会建て直しとは高くついたな」

言われてみればそうだ。セレンはなんてとんでもないお願いをしようとしていたのかと、自分を恥ずかしく思っただけ顔を赤らめた。だが、トツシュの次の言葉に目を丸くした。

「だが、たまにはカミサマにコネを作つて置くのも悪くない。よし、二〇〇万もあれば立派な教会になるだろ」

「えつ、えつ、えええ、やめてください、そんな駄目です。とにかく駄目です、だってそんな教会なんて建てたら、ほら、街の人たちに壁とかステンド硝子とか持っていかれそうですし！」

とにかくセレンは慌てふためいた。普段から慌てることは多いが、こんなに慌てたのはきつと生まれてはじめてだろう。一秒間に瞬きを三回もしていることから、その慌てぶりが伺える。

今にも目を白黒させながら失神しそうなセレンの横で、呑気な顔をしてアレンが笑っていた。

「ま、いーんじゃないの。トツシユが直してくれるって言うんだからさ」

トツシユ。その名を聞いて、ついにセレンはお尻から冷たい石の床に崩れ落ちた。

「ト、トツシユ!? この方が“暗黒街の一匹狼”……」

おでこに手を当てたセレンは、ゆっくりと後ろに倒れて気を失った。

「あーあ、あんたの名前聞いたら氣い失っちゃったじゃん」

「俺様のせいじゃないだろ。とりあえずこのシスターをベッドまで運んでやろう」

「あんたがな」

「口の悪いガキだな」

「そいつはどーも」

悪戯な笑みを浮かべるアレンに舌打ちしたトツシユは、手に持っていた煙草を投げ捨て靴の裏で火を消すと、地面に横たわっていたセレンを胸の前で抱きかかえて歩き出した。

「シスターの部屋はどこだ？」

「んなもん自分で探せよ」

「糞ガキがっ！」

金で雇われようと、この二人の間には絶対に主従関係は成り立たないようだ。

## 第二章 帝國の影

心身ともに疲れていたのか、セレンはいつもよりも遅い朝を迎えた。

目を開けてベッドの上で上半身を起こしたセレンはふと思う。「あれ、わたし……？」

そうだ、聖堂で気を失って、きっと誰かがここまで運んでくれたのだろう。

そして、セレンの脳裏にトツシユの顔が浮かんだ。

セレンはおでこに片手の甲を当てて、背中からベッドの上に倒れ、口から息を吐き出した。

とんでもない人と係わり合いになってしまったと思いつつも、過ぎたことはしかたないとあきらめ、これ以上深く関わらないようにしようとセレンは心に誓った。二人とも。

ベッドから身体重たげに這い起きたセレンは、少しずつ気持ちを切り替えながら僧服に着替える。ただのセレンから、シスター・セレンに変わる瞬間だ。

シスターへと変貌したセレンは、胸の前で拳を二つつくり、気合いを入れて頷いた。

「よし、今日も頑張ろう！」  
これが毎日の日課なのである。特に今日は気合いが入っている。

自分の部屋から廊下に出たセレンは、そこで鼻をくんくんと動かした。

「……なんだろう？」

どこからかキツネ色に焦げたい匂いが漂ってくる。きつと、トーストの焼けた匂いだ。だとすると、この匂いは食堂から？ 踵を鳴らしながら足早にセレンが食堂に向かうと、そこではトツシユとアレンが美味しそうに朝食をとっていた。

キツネ色に焦げたトーストの上で蕩けるバター、白い食器の上に乗せられたハムエッグ、瑞々しい色鮮やかなサラダまであり、トツシユが飲んでいるのは湯気の立つコーヒードット。

セレンとトツシユの視線が合い、トツシユが先に挨拶をしてきた。

「おはようシスター」

「お、おはようございます」

頭を下げて、再び頭を上げたセレンは食卓の上を見た。

食卓にはセレンの分の朝食も置いてある。こんなに食卓の上に料理が並んだのは、いつ以来だっただろうか。食卓に一人以上の人間が着いているいつ以来だっただろうか。

爽やかな朝の光景を見て、セレンは嬉しくて少し口元が綻んだが、すぐにある疑問が頭を過ぎる。

「あの、うちにこんな食材ありましたっけ？」

トツシユはあくびをしながら首を横に振って答えた。

「いいや、なかった。だからこいつに朝市に買いに行かせた」  
こいつとトツシユが親指で示す先には、口元についたミルク

を服の袖で拭き取るアレンいた。そして、アレンの口から手が退かされてとき、セレンはあることに気づいた。

「その頬どうしたんですか？」

アレンの頬には紅い一筋が走っていた。なにかで切られたような傷痕だ。

「ああん、これ？ ちょっとさ、ごたごたに巻き込まれちまつてさ。ま、どーってことなんだけど」

「どうせすっ転んで切ったんだろ」

「ちげえよ、ばーか！」

トツシユに向かつてあつかんべーをしたアレンは、ヤケクソと言わんばかりにトーストに喰らい付いた。あつかんべーをされたトツシユはアレンに構うことなく、コーヒーを飲みながら黙々と食事を続けている。結局アレンはなぜ怪我をしたのか語らず仕舞いだった。

それは今朝のことだった。

「おい、金渡すからパンと野菜と卵とハムでも買って来い」

トツシユにいきなり金を差し出されたアレンは露骨に嫌な顔をした。

「なんで俺が行かなきゃいけないんだよお」

「俺様は街を出歩けんからな。家の中でガクガクブルブル震えてることしかできん」

「よく言うぜ」

トツシユから金を奪い取るように受け取ったアレンは、鼻で

笑って部屋を出て行こうとした。そのアレンの背中にトツシユが声をかける。

「あと、タイムズ紙っていう新聞も頼む」

「あいよ」

アレンは背中越しに手を振って部屋を出た。

セレンよりも早く起きたアレンとトツシユは台所で食材を確認し、食材が乏しいということで、トツシユがアレンに朝食の材料を買いに行かせた。

街外れの静寂と物悲しさに包まれた教会を出て、石畳の上を散歩でもするように歩くと、やがて石畳の道が乾いた地面になり、アレンは少し大きな通りに出た。

街は朝から活気付いている。その活気の質は夜とは全く違うものだが、根底にあるものは人間の生だ。

生きるために必要なものとして、衣食住が拳がられるが、それを満たすことは難しい世の中だ。その衣食住のひとつである“食”がここにはあった。

ビニール屋根の店が立ち並び、店には所狭しと野菜や肉や魚食材が敷き詰められている。

彩り豊かな野菜や果物、生きたままの鶏やさばいたばかりの紅い肉、身が締めまり鱗の輝く魚たち。ここに集まった食材はすべて街の外から輸入されて来たもので、食材の豊富さは文句のつけようがない。問題を挙げるとしたら、たまに食あたりを起すくらいなものだろう。

声のデカイ親父や頭にタオルを巻いた丸顔の女主人が、今日

も朝から客相手に汗を流している。そんな人々の往来する店と店の間を歩きながら、アレンは目的の品を買っていく。

まずは豚のもも肉を加工したボンレスハムを二本買い、次は薫り立つパン屋の前で立ち止まり食パンを一斤買おうとしたが、やっぱりやめて一斤の三倍にあたる一本の食パンを買った。

新鮮な野菜も買い、卵も買って、さあ帰ろうとしたところでアレンは立ち止まった。

「デザート喰いてえ」

両手に食材の入った紙袋を持ち、アレンは“胃”の向くままに果物屋に向かった。

赤や黄色や緑の色鮮やかな果物たちが並び、甘い香りが店の周りに漂っている。

柑橘系の果物を見ただけで、アレンの口の中は甘酸っぱさで満たされ、彼女はゴクンと唾を呑み込んだ。

柑橘類の横には真っ赤に染まった林檎があり、色艶良くてこれも食欲をそそられる。

口元を拭ったアレンは結局両方買うことにして林檎に手を伸ばした。が、その林檎がアレンの手の先から突如姿を消した。

林檎が消えた方向へとアレンが視線を移動させると、そこには金髪の“ライオンヘア”が立っていた。

「あら坊や」

赤い林檎と真っ赤なルージユが妖艶と誘っていた。

一番美味そうな林檎を取られたことも腹立たしかったが、それよりも昨日の一件がアレンの頭に血を昇らせた。

「テムエ！」

アレンは持っていた紙袋を地面に置き、ライザの襟首に掴みかかるようにしたが、赤い林檎が宙に投げられライザの白コートが波打ち、ハンドガンがアレンの顔に向けられた。

「それで防ぐ気かしら？」

ライザのハンドガンの先にはグローブに隠されたアレンの左手があった。

「防いでやるよ」

「アナタの手は鋼鉄でできているのかしら？　でも、このハン

ドガンから出る玉は鉛じゃないわよ」

「ふ〜ん」

興味なさそうな返事だった。それは絶対に防げるという自信の表れか？

ちよつとでも二人に触れれば、この争いに巻き込まれそんな危機に直面して、人々は後退りするようにこの場から徐々に離れて行った。

ライザの持っていたハンドガンから、なにかが蠢いているような奇妙な音が聴こえはじめた。

「このハンドガンは“失われし科学技術”を使ってアタクシがこの世に生み出した傑作。グングニールとアタクシが名づけたこの銃から発射されるエネルギーは、一瞬にしてすべてを灰にしてしまうのよ」

「ふ〜ん、魔導銃ってことか」

魔導をつくられた武器や兵器の威力はどれも威力が凄まじく、

つくり出すこともとても困難なために滅多にお目にかかれない。それを前にしてもアレンは『ふくん』で片付けてしまった。魔導銃ですらアレンの脅威ではないというのか？

物怖じしないアレンを前にして、ライザは苛立ちを覚えるとともに、ある種の欲求に駆られて上唇を妖しく舐めた。

「アナタがアタクシの足元で屈服する姿が見たいわ」

「それは嫌だ」

「アタクシに反発する者を屈服させてときの快感……」

いつの間にかライザの片手は自らの股間に宛がわれ、熱い吐息を漏らしながら、ライザは目の前にいる“少年”を今にも食べたいそうだった。

目の前でよがる女を見ながら、アレンは背筋をゾクゾクさせながら蒼い顔をした。

「うげえ、早く俺のこと撃って殺してくれ……」

「もう駄目、愛しすぎて殺したい」

「だからさっさと撃てよ！」

「ああん！」

雌獅子が甲高い喘ぎ声をあげた刹那、グングニールから稲妻が迸り左手ごとアレンの身体を貫かんとした。だが次の瞬間、ライザは瞳を限界まで見開き、稲妻がアレンの手の中へ吸い込まれていくのを目の当たりにした。

「どうということなの!？」

冷静さを取り戻そうとしている最中で、ライザはグングニールをアレンに奪われ、その銃口を顔面に向けられた。

「俺の勝ち」

悔しそうな表情をしながらライザは唇を噛んだ。屈辱だった。自分の理解の範疇を超えたできごとが屈辱だった。しかし、それが彼女を再び燃え上がらせた。

「最高だわ、最高よ、どうしてもアナタをアタクシのモノにしたい」

「はいはい、わかったから自分の立場理解しろよ。あんた絶体絶命のピンチなんだぜ？」

「アタクシが窮地に追いやられているとも言いたいのかしら？」

武器を奪われ、その武器で命を狙われている。これを窮地と言わずなんと言う？

だが、ライザは自信に満ち溢れた妖艶とした笑みを浮かべていた。

「アタクシは科学者にして魔導師。アタクシに不可能なことはなくてよ。でも、今日はお預け」

「はあ？ あんたこの状況から逃げられると思ってんの？」

「アタクシはどろどろに熟れた果実が好みなの。では、御機嫌よう。そして、これがアタクシの印」

ライザの手が風を鳴らして素早く動き、長く伸びた真っ赤な爪がアレンの頬を切った。

そして、ライザの姿は空間に溶け込むように消えてしまった。それはまるで白昼夢のような光景だった。

完全にライザが姿を消してすぐ、アレンは自分の頬を触れ、

その指先についた鮮血を眺めた。これは夢ではない。

「空間転送か……いろんな意味で厄介な女」

アレンの周りには人ひとりいなかった。

途中まで何人かの間人がギャラリイとして残っていたが、ライザの持っていたグングニールが稲妻を吐き出し、辺りが激しい閃光に包まれた瞬間、ひとり残らず逃げてしまった。

アレンは片手に握ったままだったグングニールを、近くに置いてあった自分の買い物袋の中に投げ込み、地面に転がっていた林檎を拾い上げた。

拾い上げた林檎を服の袖で拭き、アレンは大口を開けて林檎に噛り付いた。

汁が口から零れ出し、口いっぱいに広がる甘酸っぱい香り。

「さ〜とと、買い物も終わったし帰ろっと」

このときアレンはトツシュに頼まれた新聞のことなど、すっかりと忘れていた。

朝食を食べ終えたアレンは懐から一丁のハンドガンを出して、顔の前で弄繰り回しはじめた。見せびらかすように。

見せびらかされたトツシュは、あまりにアレンがワザとらしくするので、無視しようとも考えたが、銃に施された紋様を見て気が変わった。

紋様は雷のようなエネルギー感が溢れるデザインで、トツシュはそれをひと目見て、ただのデザインではなく、魔導的意味が込められていることを悟った。

「なんだそのハンドガンは、ただの銃じゃなさそうだが？」  
「拾った」

これは嘘だ。

実際はライザの忘れ物だが、アレンはライザと出遭ったことすらトツシユに話してなかった。

「拾っただと？　嘘をつくな。魔導銃が道端に落ちてたとしても言うのか？」

「うん」

真顔で頷くアレンにトツシユが一言。

「おまえの真顔はうそ臭い」

「じゃ、もらった」

話の内容をコロコロと変える時点で、アレンの話は信憑性に欠けている。そもそも、この少女に本気で嘘をつく気があるのかどうか？

「誰にだ？」

「女」

「どこのどいつだ？」

「ライオンみたいな髪型の女」

「ライザかっ!？」

声を荒げたトツシユが勢いよく椅子から立ち上がり、テーブルの上に置いてあったカップが倒れ、中の黒い液体がテーブルの上を侵食して、やがて黒雫が床の上で四方に弾けた。

弾け飛んだ雫とともにトツシユの頭もぶち飛んでいた。

「この糞ガキがっ！　なぜあの女に遭ったことを言わなかった

「んだ！ 俺はあの女に狙われてるんだぞ！」

「そりゃご愁傷様で」

「ご愁傷様で済むか。おまえが奴らに付けられてたらどうするんだ？」

「そんなときゃそんなときで、逃げるなり戦うなり、どーにかなるつしよ」

「馬鹿だろおまえ」

「おう、ロクな教養も受けてない」

ぬけぬけというアレンの言葉に、テーブルに両肘を突いたトツシュは頭を抱えた。

こんな“少年”を雇った自分がどうかしてたとトツシュは悔やんだが、あのときトツシュが目撃したアレンの力は本物だ。

なんとかと鉄は使いようという言葉があるように、アレンは使いようによっては自分のとつて強い味方になるとトツシュは考えていた。だが、馬鹿を見るとという言葉もトツシュは忘れてはいない。

トツシュが思考を巡らせていると、戸口の方から情けない女の子の声が聞こえてきた。

「ああ〜ん、ごめんなさーい！」

裏返った声を出したのはセレンだった。しかも、彼女はひとりではなかった。後ろにいる白いロングコートを着た“ライオンヘア” ライザだ。

「こんなところに身を隠してただなんて、今ごろ神に命乞いかしら、トツシュ？」

「成り行きだ」

静かの答えたトツシユの視線はライザの後ろに注がれていた。戸口の奥から蟲のように湧き出てきた重装備の男たちは、ライザを抱えの獅子軍の精鋭だ。その数、目で見えるだけで四名。その他に教会の周りに待機している可能性は高い。

ライザは鈍く光るナイフをセレンの首元に突き付け、唇を濡れた舌で舐めて笑った。

「トツシユ、この娘を殺されなくなったら、武器を全て捨てて投降なさい！」

「殺せばいいだろ、そのシスターとは赤の他人だ」

「そんなあゝ！」

情けない声をあげるセレンの瞳は涙をいっぱい溜め、今にも防波堤が壊れて大洪水になりそうな状態だった。

そんな中、アレンはトイレに立ったセレンが残っていた朝食のプチトマトを、指先でつまんで口の中に放り込んでいるところだった。

「甘すっぱー、このプチトマト」

場違いな声をあげたアレンにライフルの銃口が四つ向けられた。つまり、ライザの後ろに控えていた男たち全員がアレンに銃を向けたということだ。

アレンは銃口を向けられていることなど気にせず、わざとらしく口に手を当てて大あくびをすると、口元をつり上げて不敵な笑みを浮かべた。その眼は恐れを知らぬ魔人の眼差しだった。

「あのさ、そのシスターを解放してくんない？」

「駄目よ」

間を入れずライザが言った。

「アタクシにメリットがないわ」

人質を無償で解放するほどライザはお人よしではない。人質に捕った娘はトツシュとの交渉の道具でしかなかったのだが、トツシュは娘を殺してもいいと言う。この時点で、人質は人質の役割を果たさなくなった。つまり、セレンはいつ殺されても可笑しくない状態なのだ。

セレンの首の皮一枚をこの世と繋ぎ止めているのは、ライザのアレンに対する欲求だった。

「トツシュとの交渉は決裂のようだけど、坊やはこの娘の命を案じてるみたいじゃない？」

流し目を使うライザの交渉相手はアレンに移っていた。

一人目の交渉相手であるトツシュは、『殺せばいいだろ、そのシスターとは赤の他人だ』と交渉の余地なし。

二人目の交渉相手であるアレンは、『あのさ、そのシスターを解放してくんない？』と交渉の余地あり。

ライザの本来の目的はトツシュの身柄確保であるが、彼女は仕事に私情を挟み、第一優先事項であるはずのものが覆される。

それが皇帝の勅令であつてもだ。ライザと皇帝ルオの関係は地位も権力も及ばないところにある。との家臣たちのもっぱらの噂だ。

自分のことを妖しい目つきで見えるライザから視線を外したアレンは、深くため息をついてから懐に手を入れようとした。が、

すぐに銃口を向けられて止めた。

「武器向けんなよ、肝が冷えるだろ。懐ん中に入ってる交渉道具を出そうとしただけだよ」

しかし、それを出したらアレンは蜂の巣になっていたに違いない。

不敵に笑うアレンの衣服の下で膨らみを見せる物体は、魔導銃　グングニールだった。これをアレンは交渉の道具に使うとしたのだ。

アレンはライザの姿を確認してすぐに、グングニールを懐に隠していた。呑気に他人のプチトマトなんて食ってるわりには、こーゆーところはしつかりしているのだ。

懐を指差すアレンを見て、ライザは首を傾げた。

「そこにどんな物が入っているのかしら？」

「あんたの落とし物」

このアレンの一言でライザは理解した。だが、果たして人と銃が同じ天秤にかけられるものなのか？

「いいわ、アタクシのグングニールとこの娘、交換しましょう」

交渉はあっさりしていた。人の命など魔導銃に比べれば、取るに足らないものだと言えれば判断したのだ。だが、彼女の気持ちは移ろい易い。

「やっぱりやめたわ。この娘、坊やの恋人？ それとも愛人？ だったら、坊やの目の前で甚振るのも一興ね」

「残念だけど、赤の他人。まだ一緒に寝てもない」

可笑しなことを口にしたアレンに対して、人質のセレンが顔を真っ赤にして声を荒げた。

「やめてください、誤解されるようなこと口にししないで下さいよ！ あなたと寝れるわけじゃないじゃないですか」

この言葉に深い意味はない。セレンは同性同士ということを知り強調したかったのだが、この場にアレンが女であること知る者はセレン以外いなかった。

「あら、フラれちゃったわね」

悪戯にライザが笑った。明らかに勘違いされている。

勘違いされようが気にしないのか、本当にそういう性癖があるのか、アレンは何事もなかったように話を戻した。

「それでさ、ここん中に入ってる銃とシスター・セレンを交換する話なんだけど、どーすんの？」

「そうね、まずグングニールをテーブルの上に出しなさい。少しでも可笑しな真似をすればわかるわね？」

ライザの言葉に頷いたアレンは懐にゆっくりと手を入れはじめた。このとき、ライザの後ろに控える獅子軍の持つライフルの銃口は、すべてアレンに向けられていた。ケアレスマスだ。

トツシュの足が激しく床を蹴り上げた。

銃口をトツシュにも向けるべきだったと気づいたときには、時すでに遅し。

腰からハンドガンを抜いたトツシュとライザの目が合う。

瞬時にライザがセレンを突き飛ばした刹那、トツシュのハン

ドガンが火を噴いた。

一斉に奏でられる銃声の中で、呆然としていたセレンの手が引かれた。

「逃げるぞ！」

セレンの手を引いたものは、グローブのはめられた硬い手だった。

肩が外れるかと思うほどにセレンは手を引かれ、次の瞬間には小柄な少女の背中に担がれていた。

銃弾を避けながらトツシユが前を走り、その後ろからセレンを担いだアレンが追う

神聖な聖堂で銃が叫び声をあげ、セレンはアレンの背中で肩を震わせていた。

「どうしてこんなことに……」

「あんたがツイテナインだろ」

相手の気持ちも考えないで素っ気無く言うアレンに対して、セレンは殺意にも似た感情を覚えたが、それはすぐに心の奥底から来る哀しみ流されてしまった。

もう一生、この教会に帰って来ることができないのではないか。そんな気がセレンはしていた。

道を塞ぐ扉をトツシユが開けると、大量の光が寂れた聖堂に流れ込んだ。まるでそれは天へのお導きのようであったが、果たして本当にこの先は天国か。いや、地獄かもしれない。

教会の前には数人の武装した獅子軍がライフルを構えて立っている。と思われたが、可笑しなことに、教会の前には誰も

いなかった。

すぐにアレンが教会前に止まっていた軍用ジープを見つけて叫んだ。

「乗り込め！」

「鍵がないだろ！」

トツシユが叫ぶが、アレンは気にすることなく運転席に乗り込み、セレンを助手席に乗せた。

どこかで微かに歯車が鳴り、アレンの左手が鍵の差し込み口に触れるや、バチンと閃光が火花を散らした。するとジープのエンジンが唸り声をあげ、アレンは床が抜けるくらいアクセルを踏んだ。

「俺様を置いて行く気かっ！」

自分を置いて走り出したジープの荷台にトツシユは汗をかきながら乗り込んだ。

走り去るジープに銃弾が浴びせられるが、一発も当たることなくジープは逃げ切った。

遠ざかるジープの影を眺めながら、ライザが妖しく微笑んだ。

巨大な鉄の塊がクーロン上空を旋廻し、街に影を落とすした。

シユラ帝國が世界に誇る巨大飛空艇 キュクロプス。一つ目の巨人の名になぞられた、その飛空艇の船首には、巨大な眼のような穴が開いている。その穴こそが街を死の灰と化し、世界を恐怖のどん底に叩きつける失われし科学の脅威 魔導砲だ。

過去に一度だけ実践で使用されたキュクロプスの魔導砲は、一撃で辺りを光の海に沈め、約四〇〇〇平方メートルが一瞬にして灰と化したと云う。その光景を遥くで見た者は、天に光の柱が昇るのを目撃し、神々が戦争をはじめたのかと思つたそうだそして、その光景は目を閉じても、長い間、瞼の裏に焼きついてしまつていたと云われている。

楕円形の機体をしたキュクロプスが風を震わせ大地に降り立ち、クーロン近くに横付けされた。

巨大飛空艇の昇降口から延びる鉄の階段が大地に足を着け、朱色のマントを羽織る少年が足音を響かせながら一步一步と階段を下りてくる。その歩き方一つを取つても、王者 いや、魔王の風格に相応しい。

地上で少年を待つ軍の者たちは、皆、直立不動で敬礼をして“魔王”を出迎える。その中でただひとり、“魔王”に敬意を払わぬ者がいた。

「貴方自ら赴くなんて、どういう風の吹き回しかしら？」

ライザは吹き付ける風の中で、髪の毛をかき上げながら皇帝ルオに訊いた。

「地の底になにが潜んでいるのか、自らの目で見たくなつたんだ」

「せつかく来てもらったのはいいけれど、お楽しみにはまだ早いわ」

「あと、どのくらいかかるんだい？」

「さあ？」

などど皇帝の前で不確定な返事をしようものなら、気まぐれで拷問に掛けられて殺されるのだが、ライザだけは特別であった。

うぐんと唸ったライザは口元で人差し指を立て、蒼い空を仰ぎながら口を開いた。

「街の外に鍵を取りに行ったトツシユ次第ね」

「ほう、鍵を？」

「鍵がなんなのかわからない以上は、彼を泳がせて鍵までの道案内をさせる。鍵が見つかり次第、トツシユたちの抹殺を命じてあるわ」

「誰を向かわせたんだい？」

「手が開いていたスイキと、もうすぐ仕事が付きそうなキンキにも、仕事を片付け次第と依頼を出しておいたわ」

「なるほど抜かりはないようだ」

と、ルオは満足そうに笑うが、ライザは少し気がかりなことがあった。

「そうね、スイキとキンキなら……」

シユラ帝國のお抱え殺戮集団“鬼兵团”の一員であるスイキとキンキ。この二人の手にかかれば、トツシユなど赤子のようなもの。だが、ライザの脳裏に浮かぶ“少年”の顔。

「あの坊やが気がかりだわ。あの子の内から生じる気は、たしかに魔の力だった」

この女には珍しく、不安な表情を浮かべるライザを前にして、ルオの表情も曇る。

「あの子とは誰のことだい？」

「素性は不明。けれど、魔導師特有の気が感じられたわ」

「君を感じさせたか？」

「ええ、身体の中が熱く火照ったわ」

「盛りのついた犬みたいに欲情するなんて、穢らわしい女だ」

ルオの手が大きく振りかぶられ、ライザの頬を力強く引つ叩いた。

紅く色づいた頬を片手で押さえながら、ライザは甘い声を漏らす。

「でも、貴方が一番よ」

砂海原の中を、砂を巻き上げ泳ぐように走るジープ

茶色い布を頭から被り、砂から身を隠す三人の男女。一人は車の運転をするトツシュ。二人目は荷台で寝転がっていびきを立てているアレン。そして、三人目は頭を抱えて頂垂れるセレソだった。

「どうしてわたしまで……」

どうして自分はこんな場所にいるのか。それもこんな人たちと。

「どうしてって言われてもなあ」

笑って誤魔化すトツシュをセレンは横目で睨み付けた。

「自分が悲劇のヒロインだなんて言いませんけど、少しでもあなたに人を思いやる気持ちがあるのなら、わたしを街に帰してください！」

「用が済んだらあの街に戻るつもりだ」

「今すぐ！」

「今すぐは無理だ。それに俺様たちと一緒にいるところを見られてから、シスターも奴らに狙われてるだろうな」

「わ、わたしも……ああ……」

「心配するな、シスターをトラブルに巻き込んだのは俺様だ。シスターの命だけは俺様が責任を持って預かる」

「勝手にわたしの命を預からないでください」

「じゃあ、シスターが命の危機に晒されるときに、知らん振りして立ち去れってことか？」

「そんなわけないじゃないですか！」

「だったら俺様に命を預けるんだな」

「……………」

ぐうの音も出なくなったセレンは、首を横に振って悪夢を振り払おうとしたが、振り払えるのは砂埃だけで、悪夢は消えてくれなかった。

ジーブは砂漠の中を走り、ある場所に向かっていた。その目的地を知る者はトツシュだけだ。

「わたしたちはどこに向かっているんでしょうか？」

「さあてな」

「そんな返事は許しません。わたしの身にも関係することなんですから」

「シスターは俺様に命を預けたんだから、黙っ」

「黙りません！」

真剣な顔をするシスターに負けてか、トツシユは重い口を開いた。

「……そうだな、これも運命つてやつか。なあ、シスター、本当に俺様の話を聞くか？」

聴けば後戻りはできなくなる。それはセレンにもわかっていたが、もうすでに足は踏み入れてしまっている。

「聴かせてください」

「帝國から一生命を狙われるぞ」

この辺りで帝國と言えば、皇帝ルオの率いるシユラ帝國しかない。そして、シユラ帝國の悪評をセレンは嫌と言うほど耳にしている。それでも彼女は首を縦に

「やっぱり駄目ですよ。聴きません聴きません、わたし長生きしたいですから、これ以上トラブルに巻き込まれたくないです。トツシユさんに命預けましたから、必ずわたしのこと守ってくださいね！」

先ほどまでの真剣な顔をしたシスターはどこいつてしまったのか。トツシユは目の前で慌てふためくセレンを口を半開きにして見つめていた。

「シスター、あんた正直な人だな」

「ただの怖がりです」

「よくそれであんな街に住んでられるな」

「臆病者だから生き抜けたんです」

「まったくだ。俺も臆病者だから、これまで死なずに済んできた」

そんな莫迦なとセレンは思った。

“暗黒街の一匹狼”と呼ばれるトツシユの噂はセレンも耳にしている。拳銃を持ったやくざもん一〇〇人と素手で遣り合って勝ったと言うのは朝飯前で、警戒厳重なシユラ帝國が運営管理する銀行からキャツシユを根こそぎ奪い去ったのが昼飯前で、ある街に雇われてシユラ帝國の軍隊と遣り合ったのが晩飯前。

そして、彼の最大の偉業と云われるのが、シユラ帝國の皇太后つまり皇帝ルオの母君の寢室に侵入したことで、それが食後のデザートというところだろうか。

トツシユのことを考えながら、ここでふとセレンの頭にあることが浮かんだ。

「トツシユさんて、職業なんなんですか？」

「なんだと思う？」

「金さえもらえればなんでもする、なんでも屋さんですか？」

「いいや違う。俺様はトレージャーハンターだ」

「はい？」

目を丸くしてきよとんとするセレンを、ジープを運転しながら横目で見たトツシユは、少し口元を緩め恥ずかしそうな顔をした。

「聞こえてただろ、トレージャーハンター。宝探し屋だよ」

「わたしのことからかかっているんですか？」

「からかってなんかないぞ。俺様の夢はガキの頃から世界を股にかける、トレージャーハンターって決めてたんだ」

少し胸を張って大きな声を出したトツシユの横で、セレンが

笑いを堪えながらクスクスと微かに声を漏らした。それを見て、トツシュが子供のように唇を尖らせて不機嫌そうな顔する。

「なにが可らしい？」

「だって、可笑しいじゃないですか」

「なにがだ？」

「……やっぱり可笑しくありません。トツシュさんて、噂だと凄く怖い方のイメージがありましたけど、実際にこうして話してみると、悪い人じゃないかもと思います」

「噂なんてものは、尾ひれがどどん付いていくものだからな」

トツシュは鼻先で笑い、横のセレンから前方に視線を戻した。そこで彼は目を見開いた。

大地が振動し、約二〇〇メートル前方が砂煙に覆われ、その先がまったく見通せない。

竜巻か、いや違う。

砂蛇か、いや違う。

それは群れだった。

トツシュの視線の先で、右から左へと影が次々と飛び跳ねるように上空を移動している。それはまるで、砂から砂へと飛び跳ねて泳いでいるようだった。いや、泳いでいるのだ。

雲海のような砂煙の中から飛び出す生物の形状は、身体は菱形で平たく、尾が糸のように細長い。人々はこの生物にサンドマンタという名を付けた。

何十匹というサンドマンタの大群を前にして、セレンは感激

の声をあげた。

「こんな雄大な自然の光景を目の当たりにできるなんて感激です！」

「俺様もこんな大群の大移動を観たのははじめてだ」

ジーブを止めたトツシユは、サンドマンタたちが通り過ぎるのを待った。その間に、荷台から聞こえていたいびきが聞こえなくなり、変わりに大きなあくびの音が聞こえてきた。

「ふわあ~~~~っよく寝た。お、美味そうなのが空飛んでんじやん」

目を覚ましたと思ったら、すぐに食のことである。

呆れ顔をしたトツシユが荷台に向かって振り返った。

「おまえは寝ることと食べることしか頭じゃないのか。あんな硬い骨格に覆われた生物をどうやって喰うんだ？」

「う〜んと、普通に皮剥けばいいんじゃないの。蟹とかといっしょいっしょ」

「いっしょなわけないだろうが」

ジーブの荷台でサンドマンタを喰うとか喰わないなどと話されたら、せつかくの雄大な光景も台無しだ。セレンはため息をついてサンドマンタの大群から視線を外すと、手に顎を置いてふと横を見た。

「あ、二人とも見てください!？」

セレンの声に誘われて、アレンとトツシユはそこに広がる光景を見た。

砂漠の中で、そこだけが水の恵みに育まれ、草木が生える緑

地　オアシスだ。だが、トツシユはすぐにそれを否定した。

「さつきまではなかった。　　厩の夢　　だな」

「大蛤喰いてえ！」

トツシユの言葉に、すぐにアレンが言葉を乗せたが、セレンには二人の言葉がさっぱり理解できなかった。

「あのお、　　厩の夢　　とか、あとなんでいきなり大蛤の話になるんですか？」

「俺様が説明する。　　厩の夢　　ってのは、つまり厩気楼のことだ。“厩”は大蛤のことで、“気”は息、“楼”は楼閣の楼。

この砂の中に住んでる大蛤が吐く気が厩気楼になってるってわけだ」

「そうなんですかあ、だいたいわかりました」

うんうんと首を縦に振って頷くセレンの首が、ガクンと揺れた。それはトツシユが急にジープを走らせたからだ。

「厩の夢　　に囚われる前に早いところ逃げよう！」

アクセルを踏み、ハンドルを切るトツシユにセレンが声をかけた。

「逃げるってどうしてですか？」

「厩の夢　　に囚われた者は、下手をすれば一生夢の中の住人ってことだ」

幻のオアシスが水の中にあるように揺れ動き、遙か後方に消えていく。

薄れゆく幻影を眺めながら、アレンがボソツと呟いた。

「俺の蛤い……」

燦然と輝く太陽は、まだ一番高い位置には到達していなかった。

木製のドアが軋めきながら開けられ、中から無数の皺が刻まれた老人の顔が出てきた。

「どうぞ中へお入り」

三人は老人に促されるまま家の中に入った。

茶色いローブを羽織った老人の後姿は、まるで枯れ果ててしまった古い木のようなだ。幾星霜を生きた老人は、その姿からも声からも、性別を判断することすらままならない。

石造りの家の室内には古ぼけた木製の家具が並び、この家で使われている金属はすべて真鍮だった。そして、どこからかお香を焚いた独特な匂いが漂ってくる。

居間に通された三人が椅子に座って待っていると、老人が薫り立つコップを三つトレイに乗せて運んできた。

「どうぞ召し上げれ」

枯れ枝のような手からセレンはコップを受け取り、コップの中身を覗き込んで鼻で息をした。

鼻を抜ける心地よい花々の甘い香りが口の中で広がり、セレンは薫りに誘われてコップに口を付けた。

「美味しい」

と、自然と口から零れた。

至福の顔をするセレンを見て、老人がにっこりと微笑む。

「裏庭に生えていたハーブに、特性のシロップを三滴ほど加え

たもんさ」

老人の言葉は緩やかな川のせせらぎのようで、この家の中の時間は外の時間の流れよりも遅く流れているようだった。

セレンはこの家に懐かしさと温かみを覚え、いつまでものんびりとティータイムをしていた気分だったのだが、彼は違うらしい。

「俺様は前回ここに来たとき、まんまと惑わされちゃったが、今日はそうはいかない」

目をギラギラと輝かせ、気合い十分なトツシュの横で、あくびをする音が聞こえた。

「わたし……なんだか、眠くなっちゃいました……」

眠い目を擦りながらあくびをしたセレンは、腕を枕にしてテーブルの上に沈んだ。そして、すぐに彼女の鼻から安らかな寝息を聞こえてきた。

眠りに落ちてしまったセレンを見て、トツシュは訝しげな表情をしていた。

「やはり、この飲み物に睡眠薬が入っていたのか」

トツシュの言葉を受けて、アレンはカップの中を満たす液体を覗き込んでいた。

「ふーん、そーなんだ。飲まなくてよかった」

食えることと寝ることが思考の大半を占める彼にしては珍しく、アレンは一口も飲み物に手をつけていなかった。もしかしたら、野生の勘とやらで危険を察知していたのかもしれない。

老人が静かに笑う。

「ほっほっほっ、同じ罨には引っかからんか」

「俺様が二度も同じ罨に引っかかってたんじゃ、世間様に顔向けできんからな。さて、シスターが眠ってくれたのはちようどいい、クーロン地下に眠るエネルギープラントの話でもしようか」

以前にもトツシユはこの老人の家を訪ねている。そのときは話半ばで眠気に襲われ、気づいたらクエツク鳥の背中に揺られ、砂漠の真ん中を彷徨っていた。同じ過ちは繰り返さない。

クーロン地下にエネルギープラントがあるというのはアレンも初耳だった。トツシユはここに来るまで詳しい話をなにひとつしていなかったのだ。

「クーロン地下にエネルギープラントがねえ。で、この“姐ちゃん”となんの関係があるわけ？」

老人は表情一つ変えないでアレンの顔を見つめていたが、やがて破顔一笑した。

「おぬしはわしを“姐ちゃん”と呼ぶか。ほっほっほっおもしろい小僧じゃ」

“姐ちゃん”と呼ばれたのが嬉しかったのか、老婆は不気味な笑いを低く立て続けている。

トツシユは「この老人、“婆さん”だったのか」という感心した表情をしていたが、すぐに気を取り直して話を元に戻した。「クーロン地下に眠るエネルギープラントの開発に、あなたが携わっていたという話は前回もしたと思うが、覚えておいでか大魔導師リリス殿？」

「わしを耄碌したただの婆と思っているのかい？」

妖婆リリスは妖艶と笑った。その笑みを見たトツシユは、久しぶりに背中に冷たいものを感じ、自分が額から汗を流していることに気づいてすぐに拭った。

「いいや、失礼した。それでエネルギープラントの件だが、あそここの入り口を開けられるのは、この世でもうただひとりあなただけと知っているのだが、やはり開ける気はないか？」

「ないね」

リリスの返事はあっさりしていた。だが、ここまでは前回来たときと同じだ。

正直トツシユには切り札もなにもなかった。彼はもとより考えるより身体が先に動く性質なのだが、ひとたび頭を使えば切れ者と早変わることから、その辺りを高く評価して彼を高額で雇う者も多い。だが、今回に限っては目の前にいる老婆の心を動かす材料が、なにひとつ見つからなかったのだ。

うゝん、と深く唸って、それっきりトツシユは口を開かなくなってしまった。その代わりにアレンが口を開く。

「なあ姐ちゃん、金で雇われる気はないのかよ？」

「ないね、わしは金なんぞに興味ない」

それは前回トツシユが条件として提示し、すでに断られている。金では動かないのだ。

「そんじゃ、姐ちゃんの望みを叶える代わりにつてのは？」

「自分の望みは自分で叶えられる」

「じゃあさ、俺と一晩過ごすつてのは？」

「ほほっ、おもしろいこという」

平然ととんでもないことを言っただけのアレンを見る妖婆の瞳は妖しく輝いている。その瞳は目の前にいる“少年”が、“少女”であることを見透かしているようだった。

鼻を小刻みに動かしたアレンは、少し部屋を漂うお香の匂いが強くなったのを感じた。すると、すぐ隣でトツシユが顔面からテーブルに突っ込んで気を失った。香りにやられたのだ。

この部屋での脱落者は二人目。セレンもトツシユも深い眠りに落ちてしまった。その中でアレンだけが平気な顔をしている。妖婆リリースの目は輝きを放っていた。それは嬉しさの表れだった。自分の妖術にかからぬ者に対しての興味関心。

「おぬしには効かぬか」

「ちよつと鼻が詰まってるさ」

鼻をわざとらしく嗅いだアレンは、まだ手をつけていなかったコップに口を付け、薫り立つ液体を一気に胃の中に流し込んだ。

「美味しいね」

なんともなかった。それどころか、アレンはトツシユのコップにも手をつけて、中味を一滴残さず飲み干してしまったではないか。

「ふほおっつほっほっほっほっ、おぬし何者じゃ？」

「唾飛ばから大口開けて笑うなよ。俺は俺だ、ただのガキさ」

「魔導手術を受けた“少女”をただのガキとは言うまい」

「……なんだ、やっぱバレてたのか。だったら姐ちゃんも

「さ？」

「わしもわしじやて」

「あつそ」

素っ気ない返事をするアレンであるが、彼女は目の前にいる妖婆に関する秘密をなにか知っているようだった。だが、別に追求するつもりもないらしい。

いつの間にかリリスの手にはポットが握られており、妖婆はアレンのカップに煌びやかに輝く液体を注いだ。

「このハーブティーが気に入ったのなら、いくらでも飲むがよい」

「お菓子ないの？」

「おぬしに食わず菓子などない」

「ケチ」

「わしをケチとな？」

「あーそうだね、あんたはケチさ。扉 くらい開けてくれりゃあいいのに」

「その“扉”の向こうになにがあるか知っておって、そんな口を利いておるのか？」

「いいや、知らないし、そんな興味もない。俺はただ横でぶっ倒れてる、この兄ちゃんに金で雇われただけだし」

深い眠りに落ちているトツシユは、当目を覚ましそうになかった。

妖婆はアレンの瞳を見つめていた。ただ見つめているだけではない。妖しい彩を放つ瞳で見つめている。妖婆でありながら、

その艶めかしい瞳は妖婆のものではない眼光。

アレンは決して視線を逸らそうとはしなかった。これは二人の間で繰り広げられる壮絶な戦いなのである。だが、その静かな戦いもすぐに終わってしまった。

ぐうううううううううう。

アレンの腹が奇怪な音を立てて鳴いた。

「腹減ったんだけど」

「緊張感のない奴じゃ。わしの瞳で見つめられたものは男女問わず、獣であってもわしに魅了されるはずなのじゃが。食欲が性欲に優るか」

「ババアの身体になんて欲情しねえよ、ふつー」

妖婆リリスの眼光は人の身も心も虜にするはずであった。それがいと簡単に破れてしまったのだ。

「ほっほっほっ、おぬしになら 扉 の向こうになるが、いる

” の話してやってもよいぞ」

「興味ないね」

「じゃが、そこで眠っておる若いのはどうかの？ 若いのはアレ のことをただのエネルギープラントだと思っておるよ  
うじゃが、実際はもつと恐ろしい存在じゃ」

「で、なにがいんのさ？」

「アレ の正体は人型エネルギープラントとでも言うておこ  
うかの」

「でさあ、あんた 扉 を開けてくれる気あんの？」

「さて、それはおぬし次第じゃな」

「条件は？」

「ない」

「はあ？」

『おぬし次第』と言っておきながら、条件はないという。これではなにをしいのかわからない。

突然、どこからか玲瓏たる鈴の音が家中に鳴り響いた。

「招かれざる客が来たみたいじゃな」

リリスの意識は家の中ではなく、窓の外に向けられていた。

「外にずっといたの気づいてたクセに」

アレンがボソツと言うと、リリスは妖々と微笑んだ。

「相手の出方を窺っていただけさね」

青々と茂る草むらの一角に建つ、小さな木造立ての家。

風が草木の匂いを運び、この男も運んできた。

シユラ帝國のお抱え殺戮集団“鬼兵团”の一員であるスイキ。彼は息を殺し、身を潜めながら草を踏みしだき、古屋に一歩一歩近づいていた。

スイキの首から下は、怪物の甲羅を切り抜いて作られた胸当てと、肩から二の腕にかけて保護する防具、足にはジェットエンジンを搭載したメカニカル・ブーツを装備していた。特質した装備として人々の目を集めるのはジェット・ブーツだが、人々が最初に見るのは別の場所だろう。

スイキの顔は人のモノではなく異形のモノであった。鱗のついた青い顔から伸びる口は鳥の嘴のようで、眼は黄色く光り瞳

孔が縦に長細く、尖がった耳が忙しなく動き、顎からは老人のような立派な白髭が蓄えられていた。その顔は河童によく似ていた。

スイキ 水を操る鬼。“鬼兵团”のひとり水鬼は水を操る妖術に長けた刺客だった。

古屋の石壁に近づいた水鬼は聞き耳を立てた。近くに窓があるが、そこから顔を出すなんてへまはしない。彼の聴力を持つてすれば、石の壁の向こう側で人がなにをしゃべり、何人の人がそこでなにをやっているかなど、手に取るようにわかってしまうのだ。

中にいる標的は全部で四人。

やがて、ひとりが寝息を立てはじめた。

そして、またひとり。

二人が眠りに落ち、残るは二人。水鬼にとっては好都合な出来事であった。

話の内容を聴いていると、どうやら老婆が扉を開く鍵であるらしい。となると、残る三人を殺害し、老婆を連れ去るのが今回の仕事になりそうだ。

狭い家の中の戦闘は水鬼の戦闘スタイルには合わない。そこで水鬼はジェット・ブーツ使用して、屋根の上に登り、標的が家の外に出てくるのを待つことにした。

ジェット音は吹き荒れる強風に紛れ掻き消され、宙に浮いた水鬼は軽々と屋根の上に昇った。だが、水鬼が屋根に足の裏をつけた刹那、家の中で鈴の音が鳴り響いた。その音を水鬼もし

かと聴き、苦い妙薬でも飲んだような顔をした。

「儂としたことが、家の外見に惑わされてしまうたわい」

老人のような嗶れ声を嘴から発した水鬼は、この家をただの檻樓屋だと思っていたらしい。警戒を怠っていた理由はそれだけではあるまい。必要な情報を仕入れた今となつては、敵と正面からぶつかろうが、結果は同じだと絶大なる自信を持っていたのだ。

水鬼は屋根から地面に飛び降り、玄関の前で敵を待ち構えた。不意打ちなどする必要もない。自分は絶対に勝つ。

古屋の中から小僧と婆が、慌てもせずにゆつくりと出てきた。婆の方は大魔導師とか言われていたが、ただの枯れ木にしか見えない。ちよつと突付いてやれば、全身の骨が砕けてしまいそうだと水鬼は心の中で嗤った。

お腹を擦りながらアレンが水鬼に向かって叫んだ。

「あんた誰さ？」

「儂は“鬼兵团”のひとり水鬼。うぬらの殺し、その婆さんをもらい受けようぞ」

「へえ、そうですかあ」

あまりのヤル気のないアレンの言い草に、水鬼の米神に太い血管が浮き上がった。

「小僧、儂をおちよくつておるのか！」

「いいや、ただ腹が減つてヤル気がないだけえ。なあ、姐ちゃん、俺の代わりにこいつやつつけてくんない、ここあんたの家だろ？」

「わしの庭じゃが、無駄な戦いは好まぬ。おぬしがどうにかせ  
い」

「自分の庭に入った害虫くらい、自分で駆除しろよな」

アレンに害虫と呼ばわりされ、水鬼の青い顔は徐々に赤みを  
差してきた。

「おのれーっ人をおちよくりおって、血祭りに上げてくれる  
わ！」

水が滴り落ちた。水掻きのついた水鬼の手から水が滴り落ち、  
地面に生えた草を潤した刹那、水鬼の腕が大きく横に振られ、  
人の頭ほどの水の塊が投げられた。

リリスの耳はどこかで鳴った歯車の音を聴いた。

猛スピードで襲い来るボール状の水の塊を、アレンは間にも  
止まらぬスピードで躲した。

水鬼の瞳孔が開かれた。このとき彼は、目の前にいる“少年  
”がただ者でないこと知らされた。

水の塊を躲したアレンが後ろを振り向いて、しまったと口を  
開けた。

「あゝあ、穴開いちゃった」

石造りの壁に一メートルほどの穴が穿たれ、家の中まで風通  
しがよくなっていた。こんな攻撃を一撃でも受けたら、全身の  
骨が砕けてしまいそうだ。相手の操る水の破壊力はわかった。

開いた穴を指差して、アレンはリリスに話しかけた。

「ほら、器物破損。これである野郎と戦う理由ができたじゃ  
ん？」

「こんなもん、すぐに直せるわ」

「ああ、そーですかーっ」

作戦失敗。アレンはリリスの感情に揺さぶりをかけたつもりだったのだが、作戦は失敗に終わった。もとよりアレンは、この作戦が成功するとは思っていなかったが。

気を抜いていたアレンの背中に水の塊が迫っていた。だが、アレンは前屈運動でもするように軽々と躲してしまった。

攻撃が当たらぬことに苛立ちを覚えた水鬼は作戦を変えた。水鬼の両手から水がレーザービームのように連続的に放たれる。先ほどまで一球入魂の攻撃よりは破壊力が劣るが、こちらの方が連続的に発射できるため、標的に当たる確率が高い。

「儂の水撃から逃げられるものか！」

二本の水撃をアレンは上手く躲すが、先ほどに比べて動きが可笑しい。理由は地面にあった。青草と大地が水を含み、地面が滑りやすくなっていたのだ。

地面に足を取られながら、アレンは必死に水撃を避けて避けて、避けることしかできなかった。敵に近づけないのだ。

「糞っ、水遊びなんかキライだーっ！」

水に遊ばれ、叫び声をあげるアレンを見ながら、水鬼はニヤニヤと醜悪な顔を歪めていた。

「ほうれ、ほうれ、逃げてばかりでは儂を倒すことおろか、触れることすらできんぞ」

口ぶりは敵を甚振るようであったが、水鬼は内心焦っていた。こんなに来て自分の攻撃が当たらなかったことなど、今だ嘗て

なかつたのだ。

ちよこまかと鼠のように逃げ回るアレンに、次第に苛立ちを増幅させていく水鬼。

水撃の水圧が上がり、水が蛇のような動きを見せはじめた。

水鬼の必殺技のひとつ “水竜”だ。

水がまるで生き物のように大きくゆるやかに曲がりくねり、二方向からアレンに襲い掛かる。その瞬間、アレンの眼には水が大きな口を開けて、牙を剥いたように見えた。

「飛べ姐ちゃん！」

歯車が激しく回転し、アレンは地面を激しく蹴り上げ宙に舞った。その下で二本の“水竜”がぶつかり合って、激しい水飛沫を辺りに撒き散らした。

水鬼は水が霧のように散乱する先で、アレンが屋根の上に乗って笑っているのを見た。

アレンが懐から魔導銃　グングニールを抜いた。

「喰らえ糞つたれ！」

怒号の声とともにグングニールの銃口から稲妻が吐き出され、その稲妻は空気中を漂う水分子はおろか、水が浸透して湿地帯のようになっていた地面に電撃を走られ、そして水鬼の身体を稲妻の槍が貫いた。

世界が眩いフラッシュに包まれる。

やがて色の戻ってきた世界の中で、水鬼は立っただまま身体を痙攣させていた。

勝ち誇った満足げな顔をしたアレンがグングニールを懐にし

まうと、何者かに後頭部を殴打された。

「莫迦者がっ！ わしも殺す気じゃったのか！」

「イテテテテテ……後ろから殴んなよ！」

後頭部を手で押さえながらアレンが後ろを振り向くと、そこにいたのはリリスだった。

「老人に急な運動をさせるでない」

「自分で老人とか言ってるクセには、ちゃんと屋根の上までジャンプしてんじゃん」

「年の功というやつじゃ」

「意味わかんねえよ」

「それよりも小僧、あ奴まだ生きて居るぞ」

「えっ!？」

勢いよくアレンが振り返ったその先で、水鬼が嗤いながら構えのポーズを取っていた。

「電撃の耐性くらい持つておるわ！」

水鬼の両手から放たれる“水竜”が、回転しながら注連縄のように一つに混じり合い、アレンに襲い掛かる。

大口を開ける“水竜”が間近に迫り、歯車が急回転するが、アレンは避けることができなかった。

信じられないほどの水の圧力がアレンの胸を衝き、水が四方に爆発するように弾け飛び、アレンの身体は屋根の上から飛ばされて家に向こう側に消えてしまった。

なにかが地面に落ちる鈍い音をリリスは聴いた。

「坊やは気を失ったみたいだね。じゃが、心臓は廻り続けてお

るわ」

リリスはその身体を水鳥の羽に変えてしまったように、ふわりと地面に降り立った。地面に浸っていた水はまったく跳ねなかった。

妖婆リリスと水遣い水鬼が対峙する。

風が吹いた。

土の香りが風に運ばれ、それとともにお香の匂いが水鬼の鼻を衝いた。

妖婆が老婆とは思えぬ艶っぽい口元で微笑んだ。

「爺さん、わしと殺るかいい？」

「うぬは殺さずに連れて行く」

「それじゃあ、力づくでやってみるがいいさね！」

強風がリリスの身体を包み込み、彼女の羽織っていた茶色いローブが天に舞う。そして、水鬼は見た。そこにいたはずの老婆が絶世の美女に変わってしまったのを。

「妾がリリスじゃ」

玲瓏たる声が辺りに響き、妖女リリスが月のように静かに微笑んだ。

老婆が一瞬にして二十歳半ばの美女に変化してしまった。果たしてどちらがリリスの真の姿なのだろうか？

黒い喪服を着たリリスは艶めく長い髪を腰の辺りで揺らし、蒼白い月のような顔をして、ただひたすらに緋色の眼で水鬼を見つめていた。その眼差しは、恋人を愛する眼差しだった。

この世にこんなにも美しい生物が存在しているのか。全ての

存在をその美貌で否定し、足元に平伏せさせる絶対的な存在。もはやこれは神が手違いか、気の迷いで創り出してしまったとしか思えなかった。

リリスの柳眉が微かに動く同時に、水鬼の身体が金縛りにあったように動かなくなってしまった。

「わ、儂に、なにをしたのじゃ!？」

「妾はなにも……汝の本能が恐怖したのじゃろうて」

美に恐怖する。リリスの持つ美は、魔性のモノだったのだ。

「!？」

水鬼の眼が限界まで見開かれた。そして。

「世界に還して進ぜよう！」

膨張した水鬼が一瞬にして弾け飛んだ。まさにそれは刹那の出来事であった。水風船が爆発したような現象だった。

血まみれの肉片が辺りに散乱する中、目の前にいたはずのリリスの顔はおろか、衣服すらいつさいの汚れを付けていなかった。もしかしたら、壮絶なる美を前に、穢れが恐れおののき、自然の法則を破ってしまったかもしれない。

地面に落ちる眼球を指先で拾い上げたリリスは、それを迷うことなく口の中に放り込んだ。

喉元が艶めかしく動き、眼球をひと呑みにする音がした。

ジープを走らすトツシユは納得のいかない顔をしていた。自分が寝ている間に、なにがあつたのかさっぱりわからない。わかることは、大魔導師リリスが助手席に乗っているということ

だけだ。

「まったく砂漠ってやつは埃っぽくて嫌いだよ」

などと妖婆は愚痴をこぼしている。

ジーブの荷台では相変わらず誰かさんがいびきを掻いて寝ているし、いつの間にかその誰かさんに膝を枕にされてしまっているセレンは、そろそろ足が痺れてきて嫌な顔をしはじめている。けれど、結局なにも言えないところがセレンらしい。

自分の太ももの上で豪快ないびきを掻く少女の寝顔を見つめながら、セレンは『いつもこんな可愛い顔しててくれればいいのに』なんて思っていた。

トツシュは前方を見ながら、横でさつきからブツブツ文句を垂れているリリスに話しかけた。

「ところでリリス殿、封印されている入り口の封印を解いてくれる気におなりか？」

「さあてね、まだ決めかねてる途中じゃよ」

相手にはれないようにトツシュは静かにため息を漏らした。

ジーブに乗ってくれているだけマシと言ったところだろうか。

ジーブの荷台から奇怪な声が聞こえてきた。

「肉、肉、もも肉喰いてえ！」

もちろんアレンの寝言だ。

セレンは自分の太ももの上で『もも肉喰いてえ』と言われると、少し腹立たしくなる感じがして、あからさまに嫌な顔をしたら。

「わたしの太ももが必要以上に太いとしても言いたいんですか

!?

「太もも太もも……うひゃひゃ」

「もお、わたしのこと莫迦にしてるんですか!」

寝言に話しかけて怒るセレンもセレンだが、いつたいアレンはどんな夢を見ているのだろうか。口元から涎が垂れていることから、食べ物夢が濃厚だが……?

太ももとべつとりとした涎で汚され、セレンは少し怒った顔をするが、それでもアレンを起こさずに、自分のポケットからそつとハンカチを出した。

「もお、涎なんて垂らして……!？」

セレンは自分の太ももに付いた涎を拭き取り、アレンの口元にも付いた涎を拭こうとしたときだった。消えた。

目を丸くするセレンが素っ頓狂な声をあげて叫んだ。

「消えちゃいましたーっ!」

声に驚いたトツシュがすぐにブレーキを踏んで、荷台に向かって振り返った。そして、彼もまた目を丸くした。

「あの小僧はどこ行った?」

「わたしに聞かないでくださいよぉ」

困った顔をするセレンの膝元には誰もいなかった。そこにはたしかにアレンがいたはずなのに、先ほどまではいたはずなのに、そこには誰もいなかったのだ。

急ブレーキのせいで首を痛めたか、リリスは首の裏を手で擦りながら後ろを振り向いた。

「ありゃま、本当にいなくなっちゃったね」

と言葉では驚いているが、リリスの表情はいたって平常だった。

三人の中で一番驚いているのはセレンだ。アレンは彼女の膝の上から突如消えてしまったのだから、驚くのも無理もない。

「わたしの膝の上でいびき掻いてたんですよ。それがいきなりパツと消えちゃったんです」

訝しげな表情をしていたトツシュが、お手上げして宙を仰いだ。

「つたく、普通は人が消えるわけないだろう」

「だって消えちゃったんですってば！」

セレンは今にも泣きそうな顔をしていた。自分のせいじゃないのに、自分のせいのような気がしたからだ。

遙か遠くの景色を眺めるような眼差しをしているリリスが呟いた。

「 塵の夢 じゃな」

天を仰いでいたトツシュも顔を首を下げて、リリスの視線の先を見た。そして、涙目になっていたセレンもまた。

そこには、そこにあるはずのない映像が映し出されていた。

塵気楼 それすなわち塵の見る夢の幻影。砂漠の真ん中で

塵の夢 を見た。

そして、妖婆がその容姿に相応し声音で言った。

「あ奴、塵の夢 に囚われ墮ちたか……」

「世話の焼けるガキだ」

鼻で息を吐いたトツシュは、頭に手を乗せながら目をゆっく

りと閉じた。

オアシスの幻影を前にして、セレンの頭は混乱していた。

「リリスさん、アレンが囚われ墮ちたってどういうことですか!?」

「あの坊やは 塵の夢 の住人になちまったってことじゃよ」

「どうしたら、戻ってくるんですか!」

「さて、あの坊や次第じゃよ。どうするトツシユ、あの坊やを待つかい?」

トツシユは目を閉じながら返事をした。

「一時間くらいなら待つか。それ以上は待てないな」

「アレンを置いて行く気ですか!」

そんなことセレンにはできない。だが、トツシユの言葉がセレンの胸を突いた。

「戻って来る確証のない者を待つつもりか?」

「でも……それでもわたしは……」

戻って来る確証がないなんて言われたら、身も蓋もなくなってしまう。けれど、セレンは言葉を続けた。

「それでもわたし待ちます。人を置き去りにしたり、人を犠牲にしたり、そんなことわたしにはできません。ちっばけなわたしにできることって少ないですけど、それでも目の前にいる人は放つて置けませんから、できる限りのことはしたいと思うんです」

帰って来ないかもしれない者を待つというのか。

なにを思ったのか、リリスは荷台に転がっていた双眼鏡を指

「差してセレンに命じた。」

「そこに落ちてる双眼鏡であのオアシスを見てごらん」

「双眼鏡ですか？」

不思議に思いながらも、セレンは言われるままに双眼鏡でオアシスを眺めた。すると、そこにはアレンの姿が!?

湖の畔でアレンが昼寝しているのを、セレンは双眼鏡を通して目撃した。

「どういうことですか!？」

「それが 蜃の夢 の住人になっただってことじゃ」

帽子の上から頭を掻きながら、大あくびをしたアレンは、湖の畔で目を覚ました。

上半身を起こしたアレンはすぐに辺りを見回す。

「どこだよここ？」

水底の砂まで見える透き通った湖の周りに、ナツメヤシなどの草木が生い茂り、その先に広がる砂漠を見て、ここはオアシスなんだと、アレンは頷きながら納得した。

でも、どうして自分がこんなところにいるのか、皆目見当が付かない。

寝ている間に置き去りにされたのかもとアレンは考えたが、その理由はピンと来ないような気がした。

辺りには人の気配もなく、湖の水面は波風一つ立っていない。アレンは頭を悩ますばかりで、これが 蜃の夢 だということに、まったく気づいていなかった。

しばらく考え込んでいたアレンであったが、考えるのは彼女の性に合わないらしく、地面の上に寝転んで蒼空を眺めはじめた。

「腹減ったなあ」

と、こんなときでも少女の口から出るのは、こんな言葉だった。

鼻先をポリポリと指先で掻いたアレンは、雲ひとつない蒼空を眺めながら、自分の喉が渴いでることに気づいた。その渴きは通常の渴きよりも激しく辛く、まるで血を欲している吸血鬼のような渴欲だった。

苦しい。

喉を掻き雀りたくのを堪えながら、アレンは急いで水辺に駆け寄ると、頭から水の中に顔を突っ込んだ。

口から吐き出される幾つもの気泡が、水面で弾け飛んでは消え、そしてまた消え。儂い夢のように消えて逝く。

光差し込む水の中で、アレンは眼を大きく見開き、夢の中で夢を見た。

アレンの口から大量の紅い血が吐き出され、水を真つ赤に染めていく。やがて、紅色に変わってしまったスクリーンに、紅よりも紅い血塗れの少女が映し出された。

年の頃はアレンよりも若い、六、七歳の可憐な少女が血塗れになって倒れている。少女の右脚が股間からもがれ、右腕も肩から同じくもがれており、右脇腹から内臓がはみ出してしまっている。この悪魔の所業としか思えぬこの光景を、凄惨と言わ

ずしてなんと言っ。

手足を失った少女が、この世のものとは思えぬ苦痛の中で死んでいったことを、アレンは知っていた。

生きたままもぎ取られた腕や脚は、少女の見る前で貪り食われた。涙はでなかった、恐怖も感じなかった。残ったのは憎しみだけ。

そして、少女の心臓はたしかに鼓動を打つことを止めた。

だが、ここにいる。少女はここにいた。

アレンは自分の心臓を鷲掴みするように、胸を強く強く握っていた。その瞳からは、自分でも知らぬうちに涙が流れ、止まることなく頬を伝って流れ落ちる。

水の中にいたはずのアレンは、いつの間にか闇の中で独りぼちになっっていた。

長い間、独りだったような気がする。

多くの人も出会ったが、みんな別れの時が来た。

最後はいつも独りだった。

闇の中で独りぼちになっっていたアレンの手を誰かが掴んだ。

それは天使？

それとも悪魔？

それは光だったかもしれない。

それとも闇だったかもしれない。

手を引かれるアレンは導かれるままに黄泉がえった。

人ではない、機械ではない、その中間の存在として、科学と魔導の申し子として。

最大の罪。

偉大なる大魔導師は、死人からヒトを創ったのだ。

嗚呼、夢が溶ける。

闇の壁がチヨコレートのように溶けはじめ、光の世界が目覚  
ます。

夢の中の夢が目覚め、塵の夢 が発狂した。

そして、アレンは還った。

瞼の上に光を感じ、頬に落ちる熱い雫を感じたアレンは、ゆ  
っくりと目を開けた。

「わたし見ました……」

そう言いながらセレンは大粒の涙を流して泣いていた。

「あつそ」

相手が驚くほど素っ気ない返事をアレンはした。

果たしてアレンは自分が 塵の夢 に囚われたことを知って  
いるのだろうか？

きつと、知っている。だから、そんな返事をした。

運転席にはトツシュがいた。その背中はなぜか暗く重い。顔  
は見なくて、どんな表情をしているか察しはつく。

セレンが観たということは、残りの二人も観ていたに違いな  
い。それでもアレンの態度は素っ気なかった。

「胸糞悪い夢見ちまった……オエエ」

わざとらしく嗚咽したアレンは上体を起こし、ふと助手席に  
いたりリスに目をやった。

「あんたが俺のこと助けたんだろ？」

「そうじゃ。地中で眠っておった塵を一瞬だけ叩き起こしてやった」

「ところで俺とあんた今日が初対面だよな？」

「はて、最近歳のせいか物忘れが激しくてのお」

「俺も昔のことはよく覚えてない」

そこでアレンは口をつぐんだ。

セレンはまだ泣いていた。でも、なにも言わなかった。なにも言えなかった。ただ、アレンのことを見ているだけだった。

見られている方のアレンは、わざとらしくはにかんで見せて、「俺のこと潤んだ目で見つめんなよ。抱きしめて押し倒したくなるだろお」

なんて冗談で言ったのだが、セレンが急に抱きついてきて、さすがのアレンも眼を剥いて驚いた。

セレンの手がアレンの背中に廻され、服をギュツと掴む。

自分の胸で泣きじゃくる女に、アレンは途方に暮れた顔つきをしていた。その表情もわざとらしい。

なにも言わずジープが走り出す。

タイヤが巻き上げた砂埃の中で、セレンはずっと肩を上下に揺らし、鼻を嚙っていた。

### 第三章 いにしえの少女

ジーブでクーロン近くまで来ると、否が応でも巨大な鉄の塊が目に入った。

「なんですかあれ!？」

とセレンが声を上げるのも無理はない。空を飛ぶ乗り物が一般的でないうえに、この飛空艇の大きさは尋常ではない。シユラ帝國が世界の誇る キュプロクス がそこにはあったのだ。ハンドルを握っていたトツシユが嫌な顔をする。

「あれは皇帝専用の飛空艇だ」

すぐ近くに悪名高き皇帝ルオがいる。

ぞつとした顔をしたのはセレンだった。

「でも、そんなまさか……クーロンは完全な自治領で、シユラ帝國は勧誘して来ないはずじゃ？」

自由の名の下に繁栄と陰を築き上げてきたクーロンは、シユラ帝國の領土ではあったが、その自治は完全に独立国と叫びたいほどであった。

ジーブは迂回し、キュプロクス が停めてあるのとは反対の方向から街に入り、さすがに目立つジーブはすぐに空き地に捨てた。

街に入った四人はすぐに話し合いをはじめ、三手に分かれることにして、それぞれの方向に歩き出した。

セレンはすぐに自分の教会に戻ることにした。あのときは一生戻って来れないかと思った。けれど、どうにか戻ることができそうだ。

教会の前で通りまで来て、セレンは懐かしの教会を見上げた。数日見なかっただけに、どうしてもこんなにも懐かしく感じるのだろうか。外観はなにひとつ変わっていないというのに。教会の静寂の中で、ただひとりの足音が鳴り響き止まった。

セレンは美しき色彩が差し込むステンドグラスを見上げ、深い息を肺の底から吐き出した。

所々襜褕がきて壊れてしまっている教会だが、このステンドグラスだけは、時が経つのを忘れたように輝き続けている。

静かに微笑む聖母が赤子を抱きかかえている構図のステンドグラスは、まるで自分のことを象徴しているようだ。セレンは思った。

生まれて間もない頃に、この教会に拾われた。セレンは父と母の顔も、その名すら知らない。セレンを育ててくれたのは、若い神父と新米のシスター・ラファディナだった。その二人も、今はもうこの世にいない。

ラファディナは若くして病魔に胸を犯され、この世を去ってしまい。神父もまた……。

セレンは沈痛な表情をしながら、胸で輝くクロスを握り締めた。

この教会は自分が絶対に守りぬくと決めた。

長い間、時が経つのを忘れて、セレンはずっとステンドグラ

スを眺めていた。

静寂に包まれた冷たく硬い石の床に、ブーツの踵を鳴らす音が鳴り響いた。

はっとしたセレンが後ろを振り向くと、そこには白い影が揺れていた。

「あなたは!？」

セレンの声は上ずっていた。

知っている。この女性を知っている。終日前に、この女性に襲われ教会を追われた “ライオンヘア”。

艶やかに微笑むライザが、

「お帰りなさい」

と静かに声を響かせた。

自然とセレンは一歩足を後退させた。

「なんであなたがここに?」

「人質が必要なのよ」

せつかくあの人たちと別れたのに。平穏な日々が送れると思つたのに。自分の考えが甘かつたことをセレンは悔やんだ。トッシュは自分もこれから帝國に狙われる可能性があるると示唆していたのに。

街の入り口で話をしたときも、誰かをセレンの護衛に付けると言つてくれたのに。それを断つたのはセレン自身だった。

「わたしはもうあの方たちと無関係です。わたしを人質にしても無意味です!」

「あら、それはアナタが決めることではなくつてよ」

「まったくそのとおりだな」

第三者の声だった。

教会の入り口に立ち、輝く白い光を背に浴びる人影。それは少年 いや、少女だった。その名はアレン。

「まったくよー、せつかく誘導作戦してもアンタが捕まったら意味ねえもんな」

アレンの息は少し上がっていた。今さっきまで銃弾を浴びせられていたところなのだ。

四人はクーロンに入り、三手に分かれた。セレンは教会に戻り、トツシュとリリスは坑道に向かい、そしてアレンは街で暴れていた。そう、アレンが囷になっている隙に、トツシュとリリスは警戒の網をぬけて坑道に入ったのだ。

腹を擦りながら教会の中へアレンは入っていく。

「腹空いちやってさあ、文無しだからここでなんか喰わせてもらおうと思ったんだよ。そしたら変な女いるし」

変な女とはもちろんライザのことである。

「坊やが単独行動してるって通信が入ったから、そちらに行こうと思ったのだけれど、教会にシスターが戻ったって聞いたものだから、この子を人質にして坊やと楽しく遊ぼうと思ったのにな、坊やの方から会いに来てくれるなんて、嬉しいわ」

「坊や坊やうるせえぞ、俺の名前はアレンだ。呼ぶときはアレン様と呼びやがれ！」

威勢のいいアレンを見て、セレンは心から安堵した。たまにはアレンの食欲も役に立つことがあるものだ。そのお陰でセレ

ンは救われた。

白い陰が動いた。歯車の音もなっていた。二人は同時に動作を取り、硬直した。

神聖なる教会で、二丁の銃が抜かれた。だが、まだ牙は剥いていない。

アレンの構える銃は雷撃を噴く。グングニール。そして、ライザの構えるハンドガンもまた正体不明の魔導銃だった。

二人の間に緊張という名の糸が張り詰められるが、それもすぐにライザの不敵な笑みによつて解かれた。

「アタクシは銃を撃つ気ゼロよ。なぜなら、このピナカは荒々しい怒りによる、想像を絶する破壊の象徴。こんなのをぶつ放したら、アタクシの身体まで吹っ飛んでしまうわ」

紋様が刻まれて入るが、それ以外は普通のハンドガンと変わらない。そんなちっぽけな銃が、想像を絶する力を持っているというのか。グングニール。以上の力を。

「俺は撃つぜ」

相手が撃たないのなら、アレンは勝ったも同然だ。しかし、ライザは嘲笑う。

「ならアタクシも撃つわ。同時に撃てばアタクシが勝つ。けれど、坊やが撃たない限りはアタクシも撃たない。まだ死にたくはないもの」

相手の言葉が嘘ではないことにアレンは気づいていた。

どちらも動けない状態で、第三者のセレンが叫んだ。

「教会の中で争いはやめてください！」

と言つてから、小さな声で付け加えた。

「……やるなら外で」

そうは言つても、二人は一触即発状態で、どちらも一步も動けない状態だ。つた。

ため息を漏らしたアレンが、なんと　グングニールの銃口を床に向けたのだ。

「外出んぞ」

「わかつたわ」

なんとライザも銃口を下ろし、アレンの提案に同意したではないか!?

アレンは敵に背を向けながら教会を出て、ライザは最後まで銃を放つことはなかった。

教会の前の通りに出た二人は、五メートルほどの距離を取つて向かい合った。二人とも銃は構えていない。

舗装されていない剥きだしの大地を踏み鳴らし、アレンは前屈運動をしながら独り言をこちた。

「さーてと、どーっすつか。こつちが撃てばあつちも撃つだろ。でもさ、こつちが早く撃つて、相手に撃たせる時間を与えなきゃいいんじゃない？」

「あれ嘘よ」

ライザがボソツと呟いた。いったいなにが嘘なのか？

「嘘つてなにがだよ？」

「同時に撃てばアタクシが勝つわ。でも、アタクシの身体が吹っ飛ぶというのは嘘よ。普通の人間が撃てばそうなるかもしれ

ないけど、「この子」を飼いならしているアタクシなら平気」  
ライザは ピナカ の銃口を天に向け、そのスライド部分を  
愛でるように片手で愛撫し、銃の先端に口付けした。

少し背中をゾクゾクとさせながら、アレンは生徒が教師に質  
問をするように手を上げた。

「はい、はい。じゃ、なんで俺のこと撃たないんだよ？」

「アナタを殺したくないのよ。アナタをアタクシの奴隷にした  
いのよ！」

「オエエエ……」

「だから、降伏なさい。一生アタクシの足下で可愛がつてあげ  
るわ」

濡れた唇をライザは艶めかしく嘗め回し、よりいっそう唇は  
妖艶な輝きを放った。

気分的にアレンは負けそうだった。

砂や砂利を荷台に乗せ、次から次へと行き来するトラック。  
坑道の入り口は獅子軍によって警備され、そいつらの手には小  
型マシンバルカンが構えられている。その他にも、見張りの数  
は数知れない。

そんな警備厳重な坑道入り口に、小柄な“少年”が単身で突  
っ込んだ アレンだ。

「糞兵士どもがつ、掛かって来いや！」

アレンの手に握られているのは グングニール。歯車  
の音も轟々と鳴っている。その姿を見た者は破壊神でも現れた

と思つたかもしれない。

尋常ではないスピードで地面を駆ける“少年”は、稲妻を吐きながら次から次へと兵士たちを打ちのめしていく。

雷撃が生き物のように駆け巡り、雷雲の中に入ってしまったかのようだ。その中で雷鳴に負けぬほどの叫びをあげる破壊神。「オラオラオラオラッ！」

雄叫びあげる“少年”が通つたあとは、稲妻が大地を抉り、全てを灰にする。草木などは未来永劫生えないかもしれない。それほどまでに壮絶だった。

アレンが走るあとを銃弾が追いかけて、大地に穴をつくり砂煙が上がる。

さすがのアレンも、複数の方向から撃たれる銃弾に耐えかね、坑道の中に駆け込んだ。

薄暗い坑道の中に雷鳴とともに稲光が翔ける。

坑道の入り口からフラッシュする光が逃げ出し、ついでにアレンも大勢の兵士に追われて逃げ出てきた。

このとき、アレンは本能だけで動いていた。もはや作戦もあつたもんじやない。とにかく暴れまわることだけしか頭にない。大勢の兵士を引き連れ、アレンはハーメルンのヴァイオリン引きのように、ヴァイオリンの代わりに雷鳴を鳴らして兵士たちを街の中へと導いた。

天を突く雷が遠くに見え、雷鳴の音が徐々に遠くなっていく。雷雲は去っていったのだ。

坑道入り口からは兵士の数が減り、警備も手薄となつたとこ

るで、トツシユとリリスがひよっこりと顔を出した。

「あれじゃあ、ただのヤケクソにしか見えんな」

苦笑するトツシユにライフルの銃口が向けられたが、トツシユの動きの方が早い。

疾風のごとく風を切ったトツシユはハンドガンを撃ち、この場に残っていた数人の兵士の脳天を撃ち抜き、慣れた手つきで弾倉を入れ換えて、弾のなくなった弾倉を地面に放り投げた。

「さて、リリス殿を 扉 に案内するか」

「ほほっ、扉 を見るのは久しぶりじゃの」

果たして妖婆リリスの『久しぶり』とは、どのくらいの時間を指し示すのか。それは途方もない年月に違いない。

坑道の中は静かだった。遠くから掘削機の音が響いては来るが、兵士たちの数はアレンの活躍によって減っている。

前よりも広くなったと思われる坑道を、点々と壁に埋め込まれたオレンジ色のライトに沿って歩く。

道は入り組み、迷路のようになっているが、道順は前と変わらない。ただ、心配なのは兵士と出くわすことぐらいだろう。

トツシユが不意に足を止め、リリスの身体をそつと手で押し戻した。近くに人の気配がする。

曲がり角からトツシユがそつと顔を出す。その視線の先には二人組みの兵士が、立ち話をしていた。

二人組みの兵士は頭からフルフェイスのヘルメットを被っている。そのヘルメットは通常の弾丸を弾き返し、口のところには空気浄化機が付いている。それを見たトツシユはあることを

思いついた。

曲がり角を勢いよく飛び出したトツシユは、そのまま止まることなく一気に兵士の懐に廻り込み、相手の首に腕を掛けて一気にへし折った。

骨の折れる音が鳴り響く中で、残った兵士がライフル銃を構えるが、トツシユは長い円筒状の銃身を脇に抱え込み、そのままハイキックで兵士のヘルメットを蹴り飛ばすと、ライフルを思わず手放して地面に倒れた兵士の上に乗れり、首に腕を掛けた。鈍い音が鳴り響き、兵士はそのまま息を引き取った。

二体の死体を見下ろしながら、トツシユは物陰から顔を出したりリスに話しかける。

「俺様はこれを着られるが、リス殿は……」

ローブを纏う枯れ木のような老婆に、兵士の服が着られるか。それがトツシユの心配だった。

「わしがこんな汗臭い服、ごめんじゃな」

服のサイズが合うか以前の問題だ。

トツシユはしかたなく自分ひとりでもと、兵士の装備と服を脱がし、素早く自分の服と取り替えるために着替えをした。その横でリスが嫌な顔をして呟く。

「レディーの前で裸になるんじゃないよ」

「……………」

この老婆に乙女の恥じらいがあるとは思えなかったが、トツシユは押し黙りながらリスに背中を向けた。

着替えを済ませたトツシユが振り返ると、そこにはなんと兵

士が立つており、トツシユは自然と身構えた。

「わしじゃよ、わしじゃ」

フルフェイスの中から響く声は、まさしくリリスのものだった。着替えるのが嫌だと言いながらも、しっかりと着替えたらしい。しかも、どう見てもそこに立つ兵士の背丈は、リリスの背丈とは異なっていた。

不思議なことと言えばもうひとつ。素っ裸で転がっているはずの兵士の死体すら見当たらない。すべては妖婆の成す業か？ リリスは地面に転がっていたトツシユの服を持ち上げると、それをトツシユの目の前で壁に押し付けた。すると、まるで壁が粘土かゼリーになってしまったように、服がズブズブと壁の中にめり込んでいくではないか！？

兵士の死体もこうやって処理したいに違いない。

目を丸くしたトツシユを尻目にリリスはさっさと歩いていてしまった。その歩き方も老人のそれではない。

扉 までの道のり、何人かの兵士とすれ違ったが、それほど怪しまれずにことが運んだ。

不気味の輝きを魅せる金属の 扉 の前には、二人組みの兵士が開かぬ 扉 の門番として立っていた。

トツシユは物怖じすることなく兵士たちに話しかけた。

「交代の時間だ」

「もうそんな時間か」

とひとりの兵士は怪しみもせず受け答えたが、もうひとりの兵士が不信を持った。

「まだ、交代まで一時間はある。それに坑道の入り口で騒ぎを起きたと連絡が入っている。おまえらがその一派という可能性もある」

一筋縄ではいかないらしい。

ここでリリスが前に出て、被っていたヘルメットを取り、胸ポケットからIDカードを提示した。その顔は妖婆リリスの顔とは異なる若い男のもので、IDカードに写っている顔写真ともピタリ一致した。あのときに身包み剥がした男と瓜二つの顔だ。

兵士二人はほつと胸を撫で下ろし、先ほど不快感を抱いていた兵士が声を弾ませた。

「なんだマイクか、そうならそうと早く言えよ」

リリスが使った顔は顔見知りの“顔”だったらしい。

「外の騒ぎのせいで、タイムシフトが大幅に変更になったんだ」

とリリスはその顔に相應しい声で言った。

こうして二人の兵士はなんの疑いも持たず、この場を離れて行った。

再びヘルメットを被るリリスを見ながら、トツシユは魔導師という存在が異界の存在であることを痛感した。

魔導師という存在は、普通に暮らしていれば、まずお目にかれない存在だ。普通の暮らしをしていなくて、一生内に出会えるかどうかわからない。魔導師というのは、それほどまでに数が少なく、半ば伝説上の存在なのだ。

扉　　を手の甲で叩いたリリスは老婆の声で、

「本当に開けていいのかい？」

「そのためにあなたを呼んだ」

「そうかい。じゃが、わしの仕事は　扉　を開けるまでじゃ。

そのあと世界が滅びようがわたしには関係ないってことを覚えておいで」

とんでもないことを口にするリリスだが、トツシュはその言葉をただの脅しとして受け取った。

「誰かが来る前に早く開けてくれ」

「せっかちな奴じゃな」

リリスの両腕が、羽ばたく巨鳥のように大きく広げられた。

巻き起こるはずもない強風が吹き荒れ、微かにリリスの足が宙に浮いた。そして、玲瓏たる声が響いた。

「ここを封じたのも妾の気まぐれなら、ここを開けるのも妾の気まぐれじゃ」

玲瓏たる声はリリスの声だった。その声は妖女リリスの魅言葉。誰をも魅了する声音。

トツシュの全身は弛緩し、思わず足から地面に崩れてしまった。だが、彼の意識はほぼ正常なものを保っている。狂人的な精神力の賜物というところだろう。普通の人間であれば、快楽に酔いしれて墮ちてしまっていただろう。

「妾の愛しい子……迎えに来たぞよ」

扉　　がよりいっそう妖しい輝きを放ち、悲鳴をあげた。

キーンと耳を突くような高い音が鳴り響き、　扉　　が熱せら

れたチヨコレートのように溶けていく。

幾星霜の時を経て、ついに 扉 は開かれた。

ひとりの気まぐれな女の力によって 。

通りに風が吹き、甘い香りを含んだ妖気が場を満たす。

白い影は微笑み、“少年”は嫌な顔をしていた。

相手の妖気に中つて、アレンは戦う前から負けそうだった。

アレクの前方には ピナカ を構えるライザが、濡れた唇を歪ませながら微笑んでいる。

「アタクシの奴隷になれば、一生なに不自由なく暮らせるわよ」

「俺は束縛されんのが嫌いな」

「アタクシは束縛するのが好きなのよ」

「このサド女！」

「本当のことを言われても、痛くも痒くもないわ あら？」

白いロングコートのポケットで鳴る通信機に気づき、ライザは魔導銃 ピナカ を持った手をアレンに向けつつ通信機に出た。

通信内容を聞いたライザが、この上なく妖艶な笑みを浮かべる。

「ふふっ……そうなの……」

通信機を切ったライザの浮かべる表情が気になったのか、訝しげな表情でアレンが尋ねる。

「なんだったんだよ？」

「魔導感知器が、地下から放出された魔導エネルギーを感じたそうよ。もしかしたら 扉 が開いたのかもしれないわ」

ライザの勘は当たっていた。先ほどトツシユたちによって 扉 を開いたのだ。

扉 が開かれたかもしれないと聞き、アレンがニヤツと笑う。

「俺の活躍が実を結んだってことだな」

「そういうことになるかしらね。でも、 扉 の中に入ったトツシユは袋の鼠。 扉 の中になにがあるにせよ、それをどうやって持ち去るのかしら。巨大な装置だったら運べないわよね」

扉 を開けること。それはまさに今回の作戦の入り口ではない。果たしてトツシユの策は？

「俺、中になにがあるか知ってんぞ。人型エネルギープラントがあるんだってさ。人型なら自分で歩くんじゃないのか？」

この情報はアレンがリスから聞いたものだった。そして、この情報はトツシユもライザもまだ知らぬことだった。

エネルギープラントと聞き、この世界の者たちが、まず頭に浮かべるものは魔導炉の存在だろう。魔導により放出されたエネルギーを電気エネルギーに変換し、膨大なエネルギーが二十四時間、止まることなく都市にエネルギーが供給される。だが、この技術は失われし科学技術であり、ゼロから魔導炉を造り出す技術は現代には残っていない。魔導炉がなんらかの理由で大爆発を起こしたとしたら、その被害は計り知れない規模となる

だろう。

人型エネルギープラントなどと言うモノ、科学者であり魔導師であるライザも聞いたことがなかった。

「人型エネルギープラント？ 古の時代に戦争で投入された巨神兵……いえ、あれはただのゴーレムと機械の合成物……だとすると？」

ブツブツと独り言を言いながら、ライザの思考は巡らされ、古い書物に書かれた事柄を思い出していた。それでも人型エネルギープラントに関する事柄は思い出されなかった。いや、その事柄に関する書物を読んだことがないのだろう。それでは思い出すことなど不可能だ。

現在、世に残っている魔導炉の規模を考えると、それを人型にするなど不可能だとライザは考えた。できたとしても、全長何メートルもの巨人だろう。

未知への探究心が、ライザの欲望を駆り立てた。

「休戦にしないかしら？」

「はあ？」

突拍子もないライザの提案に、アレンは思わず口を半開きにしてしまった。

「アタクシはアナタを殺したくない。だから、アタクシには戦う理由がないわ。扉 までアタクシが案内するわよ」

「はあ!？」

「それに、そちらのシスターもアタクシといっしょのほうが安全よ」

突然ライザに視線を向けられたセレンは、

「えっ!？」

と眼を剥いて後退りをした。

先ほどまで自分を人質にしようとしていた人が、今度は自分  
といたほうが安全だと言う。セレンは困惑した。

「あの、どうしてあなたといっしょだと安全なのでしょう。そ  
の、あなたは……敵なわけですし」

「アタクシはアナタを人質にするのをやめたわ。けれど、他の  
ものがアナタを狙うかもしれない。少なくともアタクシと行動  
をとみにすれば、アタクシ直属の獅子軍に命を狙われる心配は  
ないわ」

「でも、それは……その……」

つまりこれは休戦というより、捕虜になれと言っているので  
はないだろうか？

「俺はいいぜ、別にいい」

「なに言ってるんですかアレンさん!？」

セレンが声をあげるが、アレンは構うことなく両手を上げて  
降伏のポーズを示した。あまりにもあっさりし過ぎだ。

ピナカ を構えていたライザも、ピナカ を下げてコー  
トの内ポケットにしまいこんだ。

「やっとアタクシの奴隷になる気になったのかしら？」

「絶対違う!」

アレンは即答で断言した。

「俺があんたの休戦を申し入れたのは、道がわかんねえから。」

扉 までの道聞いたんだけどさ、忘れちゃって」

坑道の中はまるで迷路のようになってる。はじめて入る人間は地図でもなければ 扉 まで辿り着くのにも多くの時間を要する。だが、トツシユは地図が紛失し、誰かの手に渡ることを恐れ、口頭でアレンに 扉 までの道のりを説明しただけだった。

「まあ、いいわ。二人ともアタクシに付いて来なさい」

踵を返してコート裾を跳ね上げたライザの後ろを、なんの迷いもなくアレンが付いていく。その行動はセレンの理解しがたいものだった。ライザは仮にも敵なのだ。

その場に立ち竦んでいるセレンに、振り返ったアレンが声をかける。

「さっさと行くぞ」

「でも……」

口ごもるセレンに対して、アレンは人懐っこい笑顔を贈った。  
「俺が守ってやんよ」

守ってやるもなにも、敵の中心に自ら入るなんて とセレンは思ったが、アレンの表情から感じられる、底知れぬ自身を信じた。

「絶対守ってくださいよ。わたしになにかあったら一生怨みま  
すからね！」

「任せとけて、たぶんなんとかなるからさ」

「……………」

一瞬セレンの心が揺らいだ。 やっぱり信用できないかも。

それでもセレンの進み道は限られていた。

前を歩く二人をセレンは小走りで追いかけた。

一〇〇メートルばかり歩くと、鉄の囲いをされた工事現場が見えた。この中行動入り口がある。

工事現場の中は殺伐とし、兵士たちがあれやこれやと走り回っていた。そして、ライザがこの場に来たことで、兵士たちの動きが慌ただしくなり、ライザの傍らに居る“少年”の顔を知っていた者は、ぎよつと眼を剥いて驚いた。

先ほどアレンがこの工事現場で暴れたことは記憶に新しい。多くの兵士は負傷して運ばれていったが、中には無傷の者や軽傷の者もいて、この場に残った者もいる。その者たちがアレンの顔を忘れるはずもなく、ライフル銃を構えて身構えた。

だが、それをすぐにライザが抑えた。

「この二人はアタクシの客人よ、銃を下ろしなさい」

兵士たちは頭を混乱させながらも、ライザの言葉に従わざるを得なかった。

すぐに上級兵がライザのもとに駆け寄ってきて敬礼した。

「地下から放出された魔導エネルギーを感じしてすぐ、“鬼兵団”のキンキが何人かの兵士を引き連れて 扉 に向かいました」

兵士の報告を聞いて、ライザがあからさまに嫌な顔をする。

「あの脳なしの莫迦鬼が向かったの？」

「はい！」

「アナタたちも脳なしだわ！」

目の前にいた兵士の股間をブーツの踵で蹴り飛ばしたライザは、鼻で嗤いながら早歩きで坑道の入り口に向かって歩き出した。

股間を押さえて蹲る兵士を見下げながら、

「ご愁傷様」

と呑気にアレンは言っ、ライザのあとを追った。そのあとを気の毒そうな顔をしたセレンがすぐに追う。

魔導を孕む空気が漂う坑道の入り口に、三人は足を踏み入れた。

白銀の長方形の箱。切れ目も繋ぎ目もない箱。その中にトッシュとリリースはいた。

先ほどまで薄暗い坑道の中にいたせいか、眩しい光で目が霞む。

目が落ち着いてきてもなにも変わらなかった。やはりなにもない部屋。

ざっと辺りを見回したトッシュが呆れた声を響かせた。

「なんだここは？」

期待していたものがなにひとつない。

空っぽの部屋の床に、トッシュは胡坐をかいて手に顎を乗せた。

「俺様はここになにをしに来たんだったか？」

苦笑する横で老婆の声でリリースが笑う。トッシュがヘルメットを取っているのに対して、リリースはまだフルフェイスのヘル

メットを被っていた。

「ほほほっ、現代人は古代人よりも頭が悪くなったのかね。エネルギープラントはこの部屋の床下に眠っておるのじゃ」

「なにっ？」

「あの時代はなんでも収納して隠してしまうのが流行での、エネルギープラントも隠してあるのじゃ」

「この部屋のどこにもスイッチは見当たらないが？」

トツシユの言うとおり、部屋のどこにもスイッチはない。凹凸すらなく、切れ目すらない部屋のどこにもモノを隠せるのか？未だ武装兵の格好をしたりリスは、優雅な足取りで部屋の中心に向かった。果たして、フルフェイスの奥に隠されたリスの顔は今？

部屋の中心で足を止めたリリスは床に肩膝を付け、右手を天井高く上げ、床に向かって振り下ろそうとした刹那、リリスの動きが止まった。

床すれすれでピタリと手を止めながら、リリスは部屋の入り口に視線を移動させた。

腰を曲げて頭を下げた巨人が部屋の中に入って来た。

立ち上がった男の背の高さは三メートルを超えていた。上半身裸の巨人の胸板は鉄板のようで、そこから伸びる腕は丸太のように太く、そして理想的な逆三角形のボディが美の輝きを放っている。だが、その上についた頭はなんと醜悪なことか。

顛られた瞬間みたいな顔をした坊主の頭の巨人が、手に持った金棒でブンと風を切った。

「オラノ名前八金鬼ダ。水鬼ヲ殺シタ奴、許シテオケネエ。ドコノドイツダベ？」

胡坐をかいてるトツシユが首を横に振り、リリスもぬけぬけと首を横に振った。

「わしじゃないよ。水鬼なんて奴の名前、はじめて聞いた」

「嘘付クデネエ、オマエラノ仲間ガ水鬼ヲ殺シタノハワカツテル。オラ怒ッタ！」

突然金棒を振り回し暴れ出そうとした巨人を近くにいた兵士が止める。せつかく開いた扉の中で暴れられ、施設を破壊されてしまつては元も子もない。だが、暴れまわる巨人を静止させることはできなかった。

金棒が轟々と風を唸らせ、兵士のヘルメットの中味を砕いた。銃弾を弾き返すヘルメットも、中味は打撃による衝撃に耐えられなかったのだ。地面に倒れた兵士のヘルメットの中は崩れた豆腐のようになってしまっている。

さすがに身の危険を感じた残りの兵士はライフルを構えようとしたが、その前に殴打され地面に沈んだ。巨人の割には動きが速い。

仲間殺しをした巨人金鬼は地面に足音を響かせながら、胡坐をかくトツシユの前に立つた。

「オマエガとつしゆ力？」

「ああ、俺様がトツシユ様だ」

トツシユは立ち上がったが、巨人との体格の違いは明らかだ。これでもトツシユは体軀もよく、身長も一八〇センチを越える。

それでも、まるで大人と子供に見えてしまう。

首を曲げて上を向くトツシユと金鬼の視線が合致する。どちらも負けず劣らずの鋭い眼をしている。

「とつしゅト言ウ男ヲ殺セ言ワレテル」

「殺れるもんなら、殺つてみな！」

遙か頭上から振り下ろされる金棒を後ろに飛び退き躲したトツシユは、愛用のハンドガンを抜いて引き金に手を掛けた。

火を噴く銃口。

放たれた銃弾は三発とも命中した。

トツシユが眼を剥いた。

「嘘だろ」

金鬼は胸板で銃弾を受け止めたのだ。そして、金属音を立てた銃弾は虚しく地面に転がった。金鬼の胸に傷ひとつ付けることもできず。

トツシユの持つハンドガン　レッドドラゴン　は、「失われし科学技術”の代物で、五センチの鉄板を貫通する威力を誇る大口径の銃だ。それが肉すら皮膚すら貫通できなかった。

「オラノ身体八鋼鉄ヨリモ硬イ。銃弾ナンテ恐クナイゾ」

つまりトツシユのハンドガンは武器としての意味を成さなくなつた。

頭を抱えるトツシユがリリースをチラリと見るが、

「年寄りのわしを扱き使う気かい？　わしはここでおぬしらの戦いを見ておるから、思う存分戦うがよい。幸い、この部屋はおぬしらがいくら暴れても壊れんようになってるでな」

視線を巨人に戻したトツシユは床を駆けた。

敵と距離を取りながら、作戦を練る。が、武器の効かぬ相手  
とどう戦う？

金鬼は金棒を無鉄砲に振り回しトツシユを追いかけてくる。  
巨人の割には意外に動きの素早い金鬼だが、トツシユの動きの  
方が素早さでは上回っている。それに金鬼の武器が金棒という  
こともあって、近づかれなければ負けることはない。だが、い  
つまでも逃げ回っているわけにはいかないだろう。

部屋中を駆け巡りながらトツシユは金鬼の金棒を見ていた。  
あの威力は先ほど目の当たりになっている。一発でも喰らえばア  
ウトだ。それでもトツシユは接近戦を目論んでいたのだ。

床を蹴り上げたトツシユが速攻を決める。

金鬼との距離を一メートルに縮めたところで、トツシユが  
レッドドラゴン を構える。だが、金棒が地面を割るように  
振り下ろされて、トツシユの鼻先を通過して地面を叩いた。

グオオオン！ と床が唸り声を上げるが、床にはなにひとつ  
傷が付いていない。リリスの言うことは本当だったらしい。

肝を冷したトツシユは再び金鬼を問合いを取っていた。

「ふう、死ぬところだったぜ」

冷や汗をぬ拭ったトツシユが再び速攻を決めた。

狭まる金鬼との距離。

トツシユには振り下ろされる金棒がスローモーションに見え  
た。

遙か頭上から振り下ろされた金棒は鼻先を通過し、床を力強

く叩こうとしていた。トツシユはこの刹那に全神経を集中させた。

僅かな隙を突く。

レッドドラゴン の照星を通して照準が定められた。

引き金が引かれ、銃口が火を噴き、また火を噴いた。

「ギヤアアアアアアッ！」

奇声をあげた金鬼は金棒を投げ捨てて、両手で顔面を覆って床に膝を突いた。

続けざまに発射された銃弾は確かに金鬼を貫いたのだ 金鬼の両眼を。

指の間から血を滴り落とす金鬼は床の上を転げまわりながら泣き叫んでいた。これほどまでの苦痛は、この鉄巨人にとって初めてものだったのだろう。

仰向けになって天井に咆哮する金鬼の口の中に冷えた金属が突っ込まれた。

「俺様の勝ちだ」

金鬼の口に突っ込まれた銃口がなんども叫び声をあげた。

飛び散る血飛沫が レッドドラゴン を持つトツシユの手を紅く染める。

やがてカチカチと音を鳴らした銃は弾切れを起こし、トツシユは血まみれになった金鬼の口から銃身を引き抜いた。

もうすでに金鬼は息を引き取っている。それも最初の数発目には息を引き取っていた。それがわかっていながらトツシユは撃ち続けたのだ。

屍体の傍らに跪いたトツシユは、血だらけになった手と銃を金鬼のズボンの布で拭った。普通の神経を持つ者がする行為ではない。トツシユの持つ名 “ 暗黒街の一匹狼 ” の由縁は、トツシユが単独行動を好むためではなく、誰もトツシユと組みたがらないために付けられた名前だったのだ。

立ち上がったトツシユの視線に三人の人物が目に入った。

「なんでその女と一緒にいる？」

トツシユの問いはすっ呆けた顔をしたアレンに向けられたものだった。

「一時休戦」

簡潔に述べるアレンをすぐさまセレンがフォローする。

「あ、あの、わたしの命を保証してもらおう約束もして……そのお」

フォローになっっていないかった。

鬘を靡かせながら “ ライオンヘア ” が一步前に出る。

「一時休戦して、お互い無意味な争いはやめたのよ。それにしても、前よりヒツドイ顔ね、この莫迦鬼」

床に転がる屍体にライザは言葉を吐き捨てた。決して仲間とは思っていない口ぶりだ。

屍体の横を素通りしたライザはリスの前に立った。

「アナタが 扉 を開けてくださった方かしら？」

「いかにもそうじゃ、ライザちゃん」

「あら、アタクシの名前を知っているだなんて、光栄だわ」  
「なにもない部屋を見回したライザが言葉を続ける。」

「ところでエネルギープラントはどこにあるのかしら？」

「わしが目覚めさせようとしたところで、そこで眠る木偶の坊が邪魔に入ったのじゃ」

「あら、なら殺されて当然ね。では、さっそくだけどエネルギープラントを出してくれないかしら？」

「よいじゃろう」

部屋を中心まで歩いたりリスが足を止め、再び床に肩膝を付け、先ほどと同じように右手を天井高く上げ、床に向かって振り下ろそうとした。

その刹那、床に着いたリスの手を中心して強風が吹いた。リスの一番近くいたライザが後ろに吹き飛ばされたほどの強風だ。

風はその勢いを増し、光の波紋が部屋の中心から放たれ、光の通過した床には魔方陣らしき紋様が描かれていた。

「娘よ、お目覚め！」

リスの声が響いた。妖女リスの音がフルフェイスのヘルメットの奥から響き渡った。

部屋中が目も開けられぬほどの眩い光に包まれ、それが合図となって部屋中からモーター音が轟々と鳴り響いた。

光の渦の中で歯車もまた、なにかに共鳴するように激しく回転していた。

その日、クーロンが局地的な地震に見舞われた。

時間にして一〇秒にも満たなかった揺れは、轟々と地獄の叫

びをあげながら地面に亀裂を走らせ、街を闊歩していた多くの者が足を取られ亀裂の中に吞まれていった。

悲鳴があがり、幼子が泣く声や獣の咆哮は、地響きに掻き消された。

悲痛の声をあげたのは人や獣だけではない。建物や道や風さえも声をあげ、ガラス製品の割れる音が街のあちらこちらから鳴り響き、街中の点けてもない電気が勝手に点き、蛍光灯や電球が弾け飛んで割れた。

魔導炉からのエネルギー供給は一時的にストップし、電気系統のトラブルや二次災害による事故や火災が起きた。そして、多くの場所で被害が出るとともに死傷者も出てしまった。

これが自然災害ではなく、あるモノによって引き起こされた地震であることを知っているのは五人のみだ。その五人は今、クローンの地下にいる。

銀色の箱は凄まじい輝きを放ち、リリスが部屋の中心から少し離れると、その床から鳴り響くモーター音とともに煙が立ち昇り、筒状の物体がせり上がってきた。荘厳とさえ言えるその登場は、神の光臨を思わせたほどだ。

激しい揺れによつて壁に叩き付けられていたセレンだったが、やっと揺れが治まり、光も治まってきたところで、自然と部屋の中心に向かって足を運ばせていた。そう、部屋の中心に現れたモノに惹き付けられるように、足が勝手に動いてしまったのだ。

部屋の中心に現れた筒状の物体は、直径一・五メートル、高

さ二メートルほどの液体が満たされた硝子ケースで、中には人型をした物体が入っていた。

硝子ケースに片手をつけたセレンは、中に入っている物体に魅了されていた。

「……綺麗」

表現力の乏しい言葉だが、そうとしか言えなかった。

中に入っていたのは可憐な“少女”だった。

硝子ケースの中に入っていたのは十三、四歳の“少女”で、衣服などはまったく身に付けていなかったが、その代わりに白と紅の翼が身体を包み込み、膝を抱えるようにして“少女”は安らかに眠っていた。その表情はまるで天使のように安らかで、世の中の穢れを知らぬ純粹無垢な顔をしていた。

腕組みをしながら“少女”を見るトツシュが、難しそうな顔をした。

「これがエネルギープラントか？」

トツシュの横でライザも難しい顔をしていた。

「人型とは聞いていたけど、ただのキメラにしか見えないわ」  
キメラとは獅子の頭を持ち、山羊の胴に蛇の尾を持つ怪物こととで、異なった遺伝子型が身体の各部で混在する生物のことも指し示す。

誰にも気づかれずに、ロープを纏った老婆の姿になっていたリスが、硝子ケースの中にいる“少女”を懐かしい眼差しで見つめていた。

「人型エネルギープラントのゼロ号機じゃ。これが最初で最後

の人型エネルギープラントじゃよ」

「開発が打ち切りになったということか？」

トツシユがそう尋ねると、リリスは深く頷いた。

「そうじゃ。あまりにも強大な力を持つがゆえに、造られたのはこれ一機のみ。そして、この子の存在は歴史から抹消され、地下深くに嚴重に封印されたのじゃ」

そんなものをなぜリリスは今更封印を解く気になったのか？

リリスは深い皺の刻まれた顔で哀愁を浮かべた。

「この子を永遠の眠りに就かせたのはわしらの勝手じゃ。この子が望むようにしてやるのもよいじゃろう。たとえ世界が滅びようとわしには関係ないからの、ほほほっ」

硝子の中で眠る“少女”に世界を滅ぼすほどの力があるのか。だとしたら、この“少女”は、天使ではなく悪魔だ。

四人が硝子ケースの近くに集まる中、ただひとり遠く離れた場所でもたれ掛かっている者がいる。アレンだ。

歯車の音は鳴り続け、アレンは額から冷たい汗をかいていた。

「わけわかんねえ……」

それはアレンにも理解しがたい、今までに経験したことのない現象だった。

近づけば近づくほど“身体”が苦しくなる。けれど、アレンは硝子の中で眠る“少女”に呼ばれていた。アレンは今、矛盾という壁に板ばさみにされている状態だった。

蒼ざめた顔をしているアレンに気が付いたセレンは、少し慌てた表情をしてアレンの元へ駆け寄ってきた。

「アレンさん大丈夫ですか、顔色が悪いですよ」

「腹が減っただけ」

「はい？」

不思議な顔をしたセレンは不思議な音を聞いた。それは腹の虫が鳴く音ではない。もつと奇妙な音だ。その音が歯車の回転する音だということを知るとは知る由もない。

セレン以外のものはアレンを気にすることなく、硝子ケースの前で話を続けていた。

「中から出して平気か？」

と聞きながらトツシユはリスに視線を向けた。

「出してもいいのじゃが、そのときは子のが目覚めるときじや」

「俺様に装置全体を運ぶ術はない。となると、中味だけを運ぶしかないな」

「おぬし、本当にこの子を目覚めさせる気がい？」

「もちろんだ。でなきゃ、ここまで来た甲斐がないだろう」

「ちよつと待つてくださらない、アタクシのことをお忘れかしら？」

二人の会話にライザが割り込んだ。

「アタクシ　いいえ、帝國側としても、このエネルギープラントの所有権を主張するわ」

「ちよつと待て、扉　を最初に発見したのも、この部屋に入ったのも、俺様が先だ」

少し声を張り上げたトツシユの眼前に、長く伸びた人差し指

が立てられ、ライザが舌を鳴らしながら人差し指を横に振った。「残念だけど、この土地は帝國が買収したわ。だからこの土地から出てきたものは、帝國のもの」

「それは地上の空き地の話だろう。おそらくこの上は街の中心部、空き地から遠く離れた場所だ。それでも権利を主張するか？」

「だったら、この場で殺り合うかしら？」

ライザの手は白いコートの内側に差し込まれ、トツシユもそれに応じて腰に手を掛けようとしたときだった。「少女」の口から小さな泡がシャボン玉のようにいくつも吐き出されたのだ。思わずライザとトツシユは「少女」に目を向けた。

「少女」の安らかな表情はなにひとつ変わらない。ただ、小さな口から泡が吐き出されただけだ。けれど、誰もがそれを予兆と感じた。

歯車が鳴っている。

呼ばれている。

セレンはゆっくりと歩くアレンの背中を追っていた。

硝子ケースの前に立っていた三人は、なぜかアレンに道を空けた。それは本能的なものだったに違いない。

「少女」を包んでいた白と紅の翼が水の中で揺れ動き、閉じられていた瞳が微かに動く。そして、リリースの瞳が妖しく輝いた。

「ほほほっ、共鳴しているようじゃな。わしが目覚めさせなくても、この子が目覚めるようじゃぞ」

その言葉はすぐに実現した。

「アレンと“少女”の距離が一メートルを切ったとき、“少女”を包んでいた硝子ケースが、シャボン玉が弾けるように跡形もなく割れた。それはまるで儂い夢が弾けたように。」

“少女”を優しく包み込んでいた溶液は、壁を失い外に流れ出し、七色に輝いた。そして、すぐに蒸発して消える。すべてはおぼろげな記憶と化したのだ。

白翼が開かれ、紅翼が開かれ、そこに現れた一糸纏わぬ清らかなる“少女”の裸体は、瑞々しさを放ち輝いていた。まさにその姿は狂い無き創造物。神ですら創らなかつた美を、古のヒトが創り出していたのである。それは果たして神をも恐れぬ大罪か？

静かに開かれた“少女”の瞳が、目の前にいる“少年”を寝ぼけ眼で愛くるしく見つめた。

「私と……同じ……」

小さな声を漏らした“少女”は赤子のよつな無邪気な笑みを浮かべた。

純粹過ぎるが故の不自然と底知れぬ恐怖を感じたライザが微笑んだ。

「いいわ、最高よ。この子はアタクシが預かるわ」

素早くライザが“少女”の腕を掴むが、掴まれた当の本人は自分の置かれている状況が理解できないのか、きよとんとした表情をしながら真ん丸の瞳でライザを見つめている。

“少女”を我が物にしようとするライザに対して、トツシユ

が レッドドラゴン の銃口を向けた。

「可愛い子の独り占めはよくないな」

「あら、早い者勝ちじゃなくて？」

「四対一だ」

この言葉に対して、すぐにセレンが声を荒げた。

「わたしを数に入れないでください！」

「わしも入れないでもらおうかの」

セレンとリリスに嫌な顔をされ、頭を掻いたトツシユはアレンに視線を移した。するとアレンは、今までにないほどの真剣な顔をしているではないか。

「その子を外に出しちゃいけない……よーな気がする」

と、そのままリリスに視線を移して言葉を続けた。

「あんたはやっぱ糞婆だ。なんで封印を解いたんだよ！」

「わしは自由気ままに生きていただけじゃ」

「糞婆！」

リリスを罵ったアレンはライザに視線を戻して、グングニール を構えた。

これで二対一。ハンドガンを構える“少年”と“暗黒街の一匹狼”、“少女”を人質に捕った“ライオンヘア”。互いに対峙し一歩も動かない。

ライザの身体が霧の中のように霞んだ。だが、すぐになにごともなかったように輪郭がシャープになり、ライザが舌打ちをした。

「ここじゃ無理みたいね」

「いったいなんのことを言っているのか？ それに気づいたのはリリースとアレンだった。しかし、声に出したのはアレンのみだ。」

「空間転送か！」

いつかの市場でアレンの前からライザが突如姿を消したあの現象。だが、この白銀の箱の中ではその効果を発揮できなかったのだ。

“少女”の腕を強く掴んだライザが床を力強く蹴り上げる。

出口へ走るライザの背中を追いながらトツシュが叫んだ。

「攻撃するな、“少女”を無傷で奪還しろ！」

「言われなくてもわっかつてらーっ！」

逃げるライザをトツシュとアレンが素早く追う。しかし、ライザの勝ちだ。

白銀の箱を出たライザは後ろを振り返り妖しく微笑んだ。

「では、御機嫌よう」

ライザの身体とともに“少女”の身体が霞んだ。

「セレン捕まえる！」

それはアレンの叫びだった。

アレンの視線の先にはトツシュが居り、その先には出入り口付近で突っ立っているセレンがいた。この距離ならセレンが一番近いとアレンは判断したのだ。

突然のことにセレンはびっくりしながらも、すぐに自分のするべきことに気づき、“少女”に手を伸ばした。

そして、消えた。

ライザと“少女”が空間に解けるように消え。“少女”の腕を掴んだセレンもまた、空間に呑み込まれるようにして姿を消してしまったのだ。

三人もの人間が消えてしまうという不可解な現象を前にして、トツシユは口を半開きにしながらアレンとリリスに顔を向けた。  
「なんだありゃ、人が消えたぞ？」

それはトツシユにとつてはじめて見る光景だった。魔導というものが、この世に存在していることを理解しながらも、人が消えるなどという現象は信じがたいことだったのだ。

床に胡坐をかき頭を抱えるトツシユのもとにリリスが歩み寄った。

「あれは空間転送じゃな」

「空間転送ってなんだ？」

「人を瞬間的に移動させる手段じゃよ。とは言っても、決まった場所にしかいけないうえに一方通行じゃ。街の外に飛空艇が停まって居ったことを考えると、あの中に移動したのかのお？」

手に顎を乗せて考え込みはじめたトツシユの前にアレンが座った。

「仕事どーすんだよ。あの“少女”を奪還しに行くのかよ？」

「行かない」

「はあ!？」

それはアレンにとつても予想だにしなかった返事だった。

「行かないと言ったんだ。ミッシヨンは失敗、おまえへの支払

いは半額の五〇〇〇イエンだな」

「はあ？　ちゃんと全額支払えよ」

「仕事に失敗したんだから、半額だけでも払ってもらえるだけ感謝しろ」

「もういらねえーよ。あんたから一銭ももらわねえ。だから今後一切俺にかかわるなよ糞オヤジがっ！」

顔を真っ赤にしたアレンが、のっしのっしと大股開きで出口に向かって行く。そんな怒りを露わにするアレンの背中に、飄々とした声でリリスが声をかける。

「どこに行くのじゃ？」

リリスの呼び止めに、アレンは顔を蛸みたいな真っ赤にして振り返り、大声で怒鳴った。

「あんたも今後一切俺と関わるなよ！　あんたらと組むと口なことがないっつーことに気づいた。……糞っ！」

アレンは独り坑道の奥へと消えていった。

待遇としては牢屋に入れられなかったただけマシだろう。それが自分を慰めるセレンの考えだった。

部屋は一人でいるには広く、床には金糸と銀糸の刺繍がされた赤絨毯が敷かれ、テーブルや椅子といった家具にはこみいった曲線模様の細工がされ、部屋は華やかな色彩を放つロココ様式にまとめられていた。

豪華絢爛なこの部屋にもてなされるのは、普段であれば一流の貴族に違いないが、今この部屋にいるのは、汚れた僧服を着

た十五歳の小娘だ。釣り合いが取れていないのが目に見えて明らかだ。

こんな部屋に入れられている以上は、立派な客人として迎えられていると思いきや、どうやら違うらしい。ドアは鍵が掛けられておらず開きっぱなしになっているが、その先には見張り役の男が立っており、窓はもとから開かぬように嵌め殺しの窓になっている。これでは逃げようがない。

セレンは部屋中を意味もなく歩き回った。やることがないのだ。

窓の外に広がる光景は、朱色に染まったクーロンの街だ。朱色に染まった空へ街から吐き出される黒い煙が伸び、街はずでに地震から立ち直り、二十四時間眠らぬ街にふさわしい活気を取り戻している。

セレンはクーロン地下坑道からここ　　キユクロプス　艦内への空間転送に巻き込まれてしまった。そして、すぐにこの部屋で軟禁状態にされ、“少女”がどこに連れて行かれたか知らない。

部屋は今セレンがいる場所の他に寝室とシャワールームがある。なに不自由ない部屋だが、それは囿いの中の自由だ。こんなところにいられない　　というのが、セレンの気持ちだった。どこでどう運命を見誤ってしまったのか。アレンと出会わなければ、もっと平凡なシスターとして一生を終えていただろう。いや、アレンと出会う前の時点で、裏路地に入ってさえいなければ、あの時間にあの道を、買い物　　運命の鎖を辿れば尽

きることない。

部屋を歩き回っていたセレンはシャワールームに足を運んだ。シャワーを浴びるためではない。逃げ道を探すためだ。

天井を見上げた視線の先に、通気孔の入り口が見えた。蓋が閉まっているが、簡単に外せそうで、小柄なセレンならば中に入れるくらいの大きさだ。

天井までの高さはそれほど高くないが、セレンが両手をめいっばい上げてジャンプしても届きそうもない。

部屋の外の見張りに悟られぬように、セレンはそつと椅子を一つ運んで来ると、通気孔の真下に置いた。

椅子に乗ったセレンが両手を上に伸ばすと、楽々と天井に手がついた。これで上に登れる。

通気孔の蓋を開けたセレンは、暗闇の中に恐る恐る手を入れ、縁に手を掛け、肘を掛け、踵が少し浮いた。

ぐつと細い腕に力が入り、踵がゆつくりと椅子の上に降りた。「登れない」

肘を掛けたところで足が浮いてしまい、それ以上動けない。筋力のないセレンには、とても通気孔までよじ登ることができないようだ。

小さな口元から、ゆつくりと息を吐いたセレンは、心の中で数を数えた。

三、二、一。

椅子を踏み台にしてセレンが勢いよく飛び上がった。

片足が椅子の背もたれに引っかかり、椅子が大きな音を立て

て床に倒れた。

通気孔の中に両肘を掛けられたのはいいが、足場を失い、力も入らず、セレンは足をバタつかせながら、その場から動けなくなってしまうた。

やがて部屋の外から物音を聞いて駆けつけて来た見張り役の兵士に、ライフルの銃口を向けられてしまった。

「そこでなにをしている？ 早く降りて来い！」

セレンからは下にいる兵士の顔が見えなかった。顔を通気孔の中に突っ込んでいる。

声に命じられるままにセレンは降りようとしたが、下が見えないために床までの距離が掴めず、

「すみません、降りるの手伝ってくださいませんか？」

と暗い通気孔の中に声を響かせた。

どこからかため息を吐くような声が聞こえ、セレンの両足が抱きかかえられるように掴まれた。

「ゆっくりと手を放して降りて来い」

「ありがとうございます」

床の降ろされたセレンは、そのまま腕を掴まえれ、リビングまで歩かされると、銃口を向けられ椅子に座らされた。

「じつと座っている」

「はい」

力ない声でセレンは返事をした。

状況は完全に悪化した。

手足を縛られることはなかったが、椅子から一步も動けず、

常に自分に銃口を向ける兵士が凜とした態度で立っている。セレンは目を伏せ、重いため息を吐いた。逃げ出そうなんて考えなければよかった。

そもそもセレンひとりで逃げられるわけがない。それに逃げる途中で銃弾に晒される可能性は大いにある。そう考えると、セレン身体をゾクゾクとさせて身震いをした。

最初から殺す目的なら、こんなところに閉じ込めておくはずがない。じっとしていれば殺される心配はない。そう思ったセレンは運命に身を任せることにした。

だが、しばらくしてセレンは足をムズムズと悶えるように動かしはじめた。

妙な動きをするセレンに対してライフル銃を構え直した兵士が聞く。

「どうした？」

「あの、えっと……トイレに行きたいのですが？」

顔を真っ赤にしたセレンは恥ずかしそうに言った。そう言えば、ずっとゴタゴタに巻き込まれ、トイレに行く暇などなかったのだ。

尿失禁しそうな強い尿意を催し、寒気がして鳥肌が立ったセレンは、相手の承諾を得る前に立ち上がった。

「ごめんなさい、我慢できません！」

「仕方ない、俺の前をゆっくり歩け」

背中に銃口を突きつけられ、トイレに向かってゆっくりと歩き出した。速く歩きたいのは山々だが、ゆっくり歩けと命令さ

れている上に、走りなどしたら恥ずかしいことになってしまいそうだった。

「扉は開けたままにしる」

トイレの前に来たところで、兵士がとんでもないことを言い、セレンは顔を真っ赤にして眼を剥いた。

「な、なんでですか!？」

「可笑しな真似をしないと限らない」

「窓もない密室から逃げられるわけないじゃないですか!」

「わかった、ドアは閉めていい。その代わり早く済ませろよ」

ドアを閉めて密室の中でひとりになったセレンは、僧服の裾を巻く仕上げパンティを下ろすと便座に腰掛けた。

「はあ」

自然と安堵のため息が漏れ、セレンはふと天井を見上げて、大きな目をいつも以上に大きく開けた。

トイレの外で待っている兵士はライフルの銃口を天に向けて構え、微動だにせずセレンのことを待ち続けていた。

三分の時間が流れ、五分を過ぎた。

なにか可笑しいと思った兵士はトイレのドアを強く叩いた。

「早く出て来い!」

少し強い口調で言ったが、応じる答えはなく、しーんと静まり返っている。まるでなかに人がいなようだ。と、ここで兵士ははっとした顔をしてドアノブに手を掛けて、壊れんばかりに強く廻した。

「返事をしろ!」

返事はない。ドアも開かない。　　してやられた！

兵士は足を上げてドアを蹴破ろうとしたが、足跡が付いたただでびくともしない。

已む無く兵士はライフル銃を構えた。艦内での銃の使用は基本的に制限があるが、これは緊急事態だった。

ドアノブに三発の銃弾を喰らわせ、ドアを蹴破り中に突入した兵士は辺りを見回した。

一般人には不必要と思える大きな個室には、洗面台が設置され、便器の蓋は閉められ誰も座っていない　もぬけの殻だ。ただ、びゅうびゅうと風の音が鳴っている。天井の通気孔が開いていた。そこからセレンは逃げたのだ。

通信機でどこかに連絡をした兵士は、閉まっている便器の蓋に足を掛けて、すぐに通気孔の中に入っていた。

そして、少し経ったところで、洗面台の下に設置されていた棚の蓋が内側から開かれ、セレンがひよっこり顔を出した。彼女はずっとトイレの中で息を潜め、じっと兵士が通気孔に入ってくれるのを祈っていたのだ。セレンの作戦にまんまと敵は嵌ったわけだ。と言いたいところだが、これは不幸中の幸いももたらした出来事だった。

本当は通気孔から逃げようとしたのだが、またしても背が足りなかったのだ。セレンが右往左往していると、外から兵士の怒鳴り声が聞こえ、慌てて彼女は棚の中に隠れたのだ。そして、運は彼女を味方した。

だが、これから先、セレンはこの敵陣の中からどうやって脱

出する気なのだろうか。運もそうは味方してくれないだろう。そして、セレン自身も自分の運が、人よりも悪いことを身に沁みてわかっていた。

頭を抱えたセレンは重い足取りで歩きはじめた。

「これが人型エネルギープラントかい？」

少年とは言いがたい妖気を纏う皇帝ルオが尋ねた。

「ええ、そうらしいわ。検査はこれからしようと思っているのだけれど、なにからしようかしら？」

ライザは硝子板を通して、その先の密室にいる“少女”を見ていた。

冷たい金属の壁に包まれた部屋で、“少女”は瞬きもせず壁に一点を見つめ続け、ただじつと膝を抱えて座っているだけだった。逃げるでもなく、動くでもなく、声すら漏らさない。生きているのかと疑うほどだ。いや、はじめから“生物”ではないのかもしれない。

“少女”が閉じ込められている部屋の壁は、魔導炉の爆発にも耐えうる超合金であり、硝子の板もただに硝子にあらず、魔導的なコーティングを施しており、周りの壁よりは脆いが、それでも壊されることなど有り得ない。魔導炉の小型版とも言える、人型エネルギープラントが突如爆発しようとも、絶対壊れない筈だ。筈というのは、“少女”の力が未だ未知数だからだ。白い布の服を着せられた“少女”は、まるで天上人のような雰囲気醸し出し、肌は着せられた服よりも白く輝き、穢れな

き純粹さをイメージさせた。そして、背中に生えた二対の翼が、天上人の雰囲気をもよおす強いものにする。しかし、片方の羽根は紅い。

「まるで天から降って来た“少女”だね。いや、墮ちてきたのか」

悪戯な表情をして笑うルオに対して、ライザは深く頷いた。

「そうね、だから古代人は地の底に封印なのでしょうね。魔導硝子越しでも、ゾクゾク感じるわ」

「魔導を帯びた風を纏っているのが、ここにいっても感じられる。その“少女”は魔導の塊に等しいかもしれない」

「帝國の力　いいえ、貴方の力になるわ」

「朕に操れると思うかい」

「アタクシがお手伝いたしますわ」

「それは頼もしい言葉だ。では、あとは君に全て任せるとしよう」

「畏まりました」

紅いマントを翻し、部屋をあとにするルオの背中に一礼したライザは、再び檻の中の小鳥を見つめた。

翼の生えた“少女”は尚も膝を抱えじっとしている。

ライザにはひとつの疑問があった。

古代人は、なぜこんなモノをつくったのか？

そもそもエネルギープラントを造るならば、人型である必要はない。人型の方が不便であるし、造るのにも手間が掛かるはずだ。なのに、古代人は人型エネルギープラントを製造した。

人型“エネルギープラント”というのは嘘、もしくは便宜上  
なのではないかとライザは考えた。古代人は“人型”のモノを  
つくろうとしたのではないか？

では、“少女”はなんの目的で、この世に生み出された  
のか？

人型兵器 否、人型は兵器の形としては欠点が多すぎる。  
だが、それでも人は人型にこだわりを持つらしく、ゴーレム、  
ホームクルス、自動人形、F男爵という医師は、死体を繋ぎ合  
わせ人型のモンスターを創り上げた。人はいつの時代も生命の  
創造を試み、神の真似事をしてきたのだ。

古代人は初めから新たな生命を創ろうとしていた それが  
ライザの結論だ。

ライザがこのような結論を出したのは、彼女自身が生命の創  
造主になろうと試みたことがあるからである。しかし、彼女は  
自分が納得できる結果を出せず、成功と言える例は一例もない。  
その成功の糸口が目の前にいる。ライザは心躍らせた。

だが、問題はこれから“少女”をどう扱ってよいものか？

せっかく手に入れたサンプルを壊すわけにもいかない。それ  
に、小型魔導炉とも言うべき力を持つモノに、もしもなにかが  
あってからでは済まない。“失われし科学技術”はなにが飛び  
出すのかわからない、ピックリ箱のようなものなのだ。

“少女”の翼が微かに煌き、光の粒子を呼吸するように放出  
している。

「翼は内部に溜まったエネルギーを外に放出するためのものな

のね」

ライザは自分の言葉に自分で納得し、深く頷いた。

翼は空を飛ぶためのものではないだろう。あのような形状と大きさでは、ヒトが空を飛ぶことは物理的に不可能だ。できたとしても、それは翼が羽ばたく力によるものではなく、他の力の働きによるものだろう。

ライザの考えでは、翼は“少女”の原動力になっている魔導エネルギーを体内から外部に排出するためのものであり、翼から零れる煌めきは魔導のカス 廃棄物に違いない。

立てた人差し指を唇に当てたライザは、甘い息を漏らし考え事をすると、なにかを思い立ったように白いコートの裾を翻した。

電子ロックにカードキーを差し込み、暗証番号を紅いマニキュアを塗った爪で押すと、金属の扉が横にスライドして開いた。その先にいるのは“少女”。

ブーツの踵を鳴らし、ライザは優雅な足取りで“少女”の横に立った。

どこを見ているのかわからない“少女”の瞳に、しゃがみ込むライザの姿が映し出された。

「アタクシの言葉が理解できるかしら？」

なんの反応もない。

「創造主に魂を入れてもらわなかったのかしら？」

“少女”の眼は死んでいた。

「でも、アタクシは見たわ。アナタの瞳に光が宿った瞬間を」

それは“少女”が永い眠りから醒めたときのこと。“少女”は愛くるしい瞳をしながら、小さく呟いたのだ。『私と……同じ……』と。あのときと今、なにが違う？

「……あの子の存在」

唇を舐めたライザの脳裏に浮かぶ“少年”の影。あの“少年”が鍵に違いないとライザは確信したのだ。

「となると、あのシスターがやはり役に立ちそうね」

シスターとはもちろん、シスター・セレンのことである。人質としての効果が今発揮した。あとは、セレンを出しにアレンを呼び寄せればいい。

「さあ、アナタはアタクシと王子様に会いに行きましょう」

“少女”の腕を掴んだライザがゆっくりと立ち上がり、“少女”は抵抗することもなく、揺ら揺らと立ち上がった。

虚ろな“少女”を外に連れ出そうとしたライザの足が止まった。

静かだった部屋に通信機の音が鳴り響く。“少女”は音など聞こえていないように、なにも反応を示さない。虚ろなままだ。通信機に出たライザが艶やかに笑う。

「あのシスターも、見かけによらずおてんばさんだこと……ふふ」

それは拘束中のセレンが逃げ出したとの連絡だった。

掴まれていた腕を放された“少女”は、木の葉が舞い落ちるように床にへたり込み、ブーツを鳴らす音が遠ざかって行った。

## 第四章 夢見

周りの壁や床は鼠色の金属でできており、走りなどしたら大きな足を音が立ってしまう。横幅三メートルほどの大きな通路を、セレンはなるべく摺り足で歩いていった。

足音だけに注意を払ってはいけけない。いつどこから人が飛び出してくるかかわからなので、聴覚を研ぎ澄ませて耳を常に立ておかなければいけないのだ。そのため、セレンの疲労は雪のように深々と積もっていった。

シユラ帝國が世界に誇る超巨大飛空艇 キュプロクス の内部は、そこが飛空艇の中であることを忘れてしまうほど広く、まるで巨大な鉄の要塞の中にいるような感覚だ。

セレンはここに連れて来られたときの記憶を辿り、出口までの道順を思い出そうと勤めるが、そもそもセレンは出入り口から入ったのではなく、空間転送によって艦内に連れて来られたのだった。それにここに連れて来られた当初は、極度のパニック状態にあり、通ったはずの道ですら覚えていなかった。

セレンの足が不意に止まり、顔が強張る。

金属の床に響き渡る足音。

「その場を動くな！」

男の声が響き渡り、セレンは泣きそうな顔をして後ろを振り向いた。

二人組みの兵士が駆け寄ってくる。

ライフル銃、ハンドガン、ナイフを装備しているが、そのどれ一つも構えていない。兵士たちはセレンを無傷で捕らえろと命令されていた。だが、セレンをそんなこと知らないのです、殺されると思っただけで逃げた。逃げれば当然、相手も必死で追ってくる。

僧服の裾を激しく揺らしながら走るセレンの視線に、エレベーターが飛び込んで来た。

運がいいことに、ちょうどエレベーターはこの階に停止中で、セレンは手動のドアを急いで横にスライドさせ、エレベーターの中に乗り込んだ。

手動ドアを閉めようとしたセレンだが、ドアの隙間に男の手が伸びる。

「ごめんなさい！」

と叫んだセレンは、男の手に構わずドアを閉めた。

ドアに手を挟まれ、『うがっ！』と重い空気の塊を口から吐いた男が、苦痛に表情を歪ませながら手を引いた。

エレベーターは兵士たちの目の前で下がって行った。

密室の中でセレンはパニック状態に陥っていた。

逃げなきゃ！

それだけが頭の中を駆け廻り、逃げるためにどうしたらいいのかまで頭が廻らない。

冷静になろうと呼吸を整えようとするが、呼吸は荒くなるばかりで、心臓の鼓動は激しいドラム演奏のように鳴り響き、セ

レンは足元から崩れて床に尻餅を付いた。

頭の天辺から意識がすーっと抜けていくような感覚に陥り、目がチカチカしはじめた。

壁にもたれ掛かるうとしたところでエレベーターが停車し、セレンは必死の思いで立ち上がると、渾身の力で手動ドアを開けた。

待ち伏せはなかったようだ。それもそのはずで、このフロアにいるのはセレンを含めて人間は二名。このフロアに来るための唯一の道はエレベーターのみだった。だが、セレンはそんなことなど知る由もない。

覚束ない足取りで歩くセレンの前に、とある部屋から出てきたばかりの白い影が立ちほだかった。

「あら、シスター、御機嫌よう」

甘ったるい声を漏らしたのはライザだった。

セレンの運もここまでのようだ。

逃げることをやめたセレンにライザが踵を鳴らしながら歩み寄ってくる。

「アナタも見かけによらずおてんばさんなのね。あの部屋がお気に召さなかったのかしら？」

「別にそんなんじやありません。わたしはただ……!?」

ライザの白い織手は伸ばされ、紅いマニキュアを塗った指先がセレンの頬を包んだ。

「アタクシと行動している間は、アナタの命を保障すると言ったはずよ？ 少なくとも、アナタに利用価値がある間は」

紅い爪がセレンの頬を傷つけた。

柔らかな頬に一筋の紅い線が走り、痛みを覚える前にセレンはビククリして眼を剥いた。

頬に伝わる生暖かく柔らかい感触。それは艶めかしく動き、紅い血を美味しそうに舐め取った。

セレンの頬から顔を離れたライザは恍惚とした表情を浮かべた。

「アナタ処女でしょ？」

「はい!？」

「血の味でわかるのよ」

「変なこと言わないでください！」

「アタクシは魔導師だからわかるのよ。あの坊やとはまだ寝てないみたいね。あの子、意外に奥手なのかしら？」

「勘違いしないでください！ あたしたちそんな関係じゃありませんし、だってアレンは」

セレンが最後まで言い終わる前に、エレベーターから大量の兵士が流れ出してきた。

一本道でセレンは逃げ場をなくした。

すぐ目の前にはライザ、後ろには隙間なく通路を塞いでいる兵士。

セレンは床を力強く蹴り上げた。

白いロングコートの隙間を抜け、セレンは伸ばされるライザの手も振り切った。そして、開きっぱなしになっていた扉の中に飛び込むと、ドアの開閉ボタンを叩いてドアを開めた。

兵士たちの声に紛れてライザが叫んだが、それはすぐにドアの向こう側に消えた。

閉められたドアは向こう側から開かれることはなかった。なぜなら、ドアの開閉ボタンは、セレンが火事場の馬鹿力で叩いた衝撃で、バチバチと火花を散らし壊れてしまっていたのだ。

口を半開きにするセレンだったが、これは好機だ。いい時間稼ぎになった。セレンの運はまだ続いているようだ。しかし、これは今まで運が悪かった反動か、これから運が……。

部屋の中は薄暗く、蒼白いライトだけが心細げに点っていた。セレンは見た。硝子の向こう側にいる世にも美しい存在を。

紅白の翼を持つ“少女”は、膝を抱え壁の一点を見つめているようだった。

硝子の向こう側にいる“少女”に気づいてもらおうと、セレンは硝子を力いっぱい叩いたのだが、硝子は衝撃も音も吸収してしまった。魔導的なコーティングをされた硝子は、物理的な衝撃及び、音などを吸収してしまうのだ。

ドアの前に廻るが、そこでセレンの動きが停止する。開け方がわからない

電子ロックを解除するには、カードキーを差し込み、暗証番号を入力する必要がある

恐る恐るセレンは指を伸ばし、番号の描かれたボタンを三つほどプッシュした。が、なにも起こるはずがない。

再び硝子板の前に立ったセレンは深く息を吐いた。中にいる

“少女”は先ほどからまったく動いていない。もはやセレンにはどうしようもない状態だった。

この部屋から逃げるすべもなければ、唯一の出入り口の扉は、そのうち外側から壊されるだろう。これでセレンも万事休すだ。だが、セレンが万事休すになっても、この場にはもうひとつの存在がいた。

まったく動かなかった“少女”が、ついに自らの足で立ち上がったのだ。

大きな翼を広げ、光の粒子を散らすも、“少女”の瞳は未だ夢現。完全に覚醒め切っていない。それでも“少女”は本能か、それともプログラムか、なにかに呼ばれるようにフラフラとしている。

はっとするセレンが見守る中、“少女”は硝子の向こう側でなにかを呟いた。

その呟きは硝子のこちら側にいるセレンには届かなかったが、中に備え付けてあったマイクはしっかりと“少女”の声を拾っていた。

迎えに来る。

その呟きは誰に対してのものか？

“少女”は軽く硝子に触れた。それだけだった。それだけで硝子は煌びやかな粒子に姿を変え、霧のように辺りに四散した。思わず顔を伏せたセレンが元の位置に顔を戻したとき、そこには“少女”は空気のよう立っていた。

「……迎えに来る。私……行かなければ……ならない」

虚ろな眼をした“少女”は上を向いた。

その眼は何処を見る？

それは果たして天井か、その先の空か、宇宙か、それよりも先のセカイか？

セレンは虚ろな“少女”の腕にそつと触れた。

「あの、どこに行かなければならないんですか？」

「……わからない」

「はあ、そうですね」

間延びした返事を返したセレンは途方に暮れた。虚ろな“少女”を見て取って、まともなコミュニケーションができないと判断したのだ。

天を見上げふらふら歩き廻る“少女”に付き添いながら、セレンはとにかく言葉による意思伝達をしようと頑張った。

「ええと、お名前は？」

「……行かなければ……ならない」

「どこに？」

「……名前？」

「そう、あなたのお名前は？」

「……名前？」

「あなたをつくった人は、あなたをなんと呼んでいたんですか？」

「つくった……そう、私は創られた。二人の魔導師に創られた」

“少女”の思考が晴れて来たのか、口調が少しずつだが明瞭

になり、瞳に光が微かに輝きはじめた。

糸口を掴んだセレンは、この糸が切れないように話を続けようとした。

「ええと、それで、あなたのお名前は？」

「私を創った魔導師の名前はリリスとレヴェナ。二人の姉妹が私を創った」

「その二人は、あなたになんとという名前を付けてくれたんですか？」

「私の名前……私の名前……レヴェナは私をこう呼んだ  
「ヴァ」

“少女”の瞳が爛々と輝き、翼が煌きを放った。

だが、セレンの目は“少女”とは別の方向に向けられていた。ドアにレーザー光線が走り、それは長方形の線を描くと、切り取られたドアが外側から激しく蹴破られた。

太陽が西の地平線に沈み、空で踊っていた朱たちがどこかに消え、代わりに東の地平線から月が昇りはじめると同時に蒼が世界を包む。夜が来る。

砂塵の吹き荒れる大地に立ったアレンは、遙か前方も見えない鉄の塊を視察していた。

問題は キュプロクス のどこにセレンがいるのかなのだが、それに見当をつけるのは用意ではない。なぜならば、キュプロクス が超巨大飛空艇だからだ。

キュプロクス の全長は三五〇メートル以上にも及び、全

高と全幅もともに一〇〇メートルを超す。この中からセレンを  
探すのは容易ではない。それに、皇帝ル才専用機とのこともあ  
って、中に乗っている兵士の数も尋常ではない。

砂を踏みしだき、アレンは一步一步慎重に キュプロクス  
に近づいた。手にはすでに魔導銃 グングニール が構えられ  
ている。

飛空挺の一〇〇メートル以内に近づくと、警備用の丸いライ  
トが幾つもの地面の上を飛び交い照らしていた。アレンはそれに  
照らされぬように、吹き抜ける風となって地面を駆けた。だが、  
その途中で敵に見つかってしまった。

アレンを見つけたのは人の目ではない。機械の眼によって熱  
探知をされてしまったのだ。

飛空挺側面に取り付けられたレーザー銃が光線を発射する。  
空高く跳躍し、翔けるアレンの後を光線が追う。

飛び交う光線の中を縫うように翔け抜け、光の線は天を突き、  
地平線の彼方に消え、地面を焦がした。だが、どれ一つとして  
アレンを焼け焦がすことはできなかった。

そして、アレンは金属の壁に背を当てた。

どうやら飛空挺と直角の位置にいれば、レーザー銃の射程距  
離から外れるらしく、光のイリュージョンは止んだ。

レーザーの攻撃は止んだものの、敵にアレンのことがバレた  
明白で、これから先、警備が強固なものとなるのは間違いない。  
もはや、こっそり進入というわけにはいくまい。となると、強  
引にいくしかない。

今アレンがいる場所から斜め頭上を見上げると、艦尾から迫り出している壁が見えた。飛空艇を横から見ると、そこはバルコニーのような場所だということがすぐにわかる。

バルコニーまでの高さは三〇メートル以上ある。

歯車が廻る音がどこからか聞こえ、グングニールを懐にしまったアレンは右膝を屈伸させた。

そして、飛蝗か蛙のように高く飛翔した。

天に伸ばされたアレンの右手はバルコニーの柵を掴み、飛んだときの反動と右手の力で、ひよいと柵を跳び越えてバルコニーの中に入った。

広々とした辺りを見廻したアレンが苦笑いを浮かべた。

「あはっ、お邪魔なようで……」

次の瞬間、アレンに銃口が一斉に向けられた。

兵士の数はざっと一〇名。アレンを待ち伏せていたわけではない。たまたまここに居合わせたのだ。

ライフル銃を構える七名の兵士と、ハンドガンを構える他の兵士たちとは井手達の異なる三名。アレンの目を惹いたのは、その三名に取り囲まれたひとりの少年だった。

「朕の晩餐に招待した覚えはないが？」

大人びた　否、悪魔の笑みを浮かべる少年は皇帝ルオだった。

手にフォークとナイフを握っているルオは、夜風を浴びながら夕食を摂っていたのだ。今日のルオは食事を邪魔されたことを怒るでもなく、慌てるでもなく、“少年”に気さくに声をか

けた。すべては気の向くままのである。

「ところで君は誰かな？ まさか単身で朕の命を狙いに来たというのはあるまい？」

「俺はただの通りすがりー」

「あはは、おもしろいことを言うね」

「そりゃどーも」

いつも通りのアレンだった。

相手が皇帝ルオだということは、ひと目見てすぐにわかった。ルオを取り囲んでいる三名の兵士の質や発する気が、他の屑とは違うことも一目瞭然であったし、なによりもルオ本人のなるとも言いがたい魔性の気が、史上最悪ならぬ至上災厄の暴君を示していた。

銃口を向けられていても余裕か、アレンは鼻の頭をポリポリと掻いた。

こんな状況に置かれたことならいくらでもある。つい先日もどつかの中華飯店で機関銃を乱射されたばかりだ。逃げようと思えば逃げることはできるが、あのときは決定的に違う点がある。皇帝ルオがいることだ。

アレンにとって皇帝ルオはただの餓鬼とは思えなかったのだ。それはルオにとつても同じであった。

「君さ、普通じゃないよね。うん、余興が観たい」

ナイフを持ったルオの手がアレンに向けられた刹那、それを合図として銃口が火を噴いた。

いつ撃たれるともわからない状態ではあったが、これは不意

打ちだ。

高速で襲い掛かる銃弾を避けるべく、アレンは床が抜ける勢いで金属板を叩き蹴り上げ、宙を舞った。だが、これでは標的にしてくれと言っているようなものである。飛び上がったあとは、物理法則に従って落ちるしかない。

落下するアレンに当たった弾が甲高い音を立てて火花を散らし、他の弾が頬に一筋の紅い線を走らせても、アレンは冷静さを保ち、懐から銃を抜いた。

グングニール が吼えた。

雷鳴が轟き、稲妻がまるで亀裂のように降り注ぎ、天に向かって降る銃弾の雨を呑み込んだ。

古の老神が持っていた凄まじい破壊力を持つ槍 その名がグングニール。魔導銃 グングニール の名の由来はそこから来ており、銃に刻まれた紋様は失われし古代ルーン文字であった。

アレンは グングニール を我が手中に収めたのだ。

雷光が轟き、稲妻が翔け翔け、兵士の身体を槍の如く貫いた。燃え上がる衝撃の炎。

兵士たちが燃え揺れ、黒く焼け焦げた人影が崩れ落ち逝く。金属板の上に膝を突き着地したアレンが、凜と顔を上げた。

恐れを知らぬその顔が向けられた先にいるのは、この場でただひとり無傷でいる少年 皇帝ルオ。

自分を守っていた兵士が次々と殺られていく中で、ルオは優雅に食事を続けていた。そして、何事もなかったように、口を

拭いたナプキンを投げ捨て、ゆっくりと席から立った。

ルオの周りには、彼を守るように一本の大剣が宙を廻っていた。この剣こそがアレンの攻撃をすべて防いでいたのだ。

大剣は最初から鞘に納まつてなどいない。常に牙を剥き、妖々とした輝きを放っている赤黒い剣身には、読むことの叶わない古代文字がびっしりと刻まれ、剣の周りで風が唸り声をあげている。

大剣が宙を舞いながらルオの手の中に納まった。

「朕の愛剣 黒の剣 が君を斬りたくて仕方ないそうだ。ほら、風の音が聴こえるだろ？」

黒の剣 の周りで風が唸っている。それは『早く血を飲ませろ』と言わんばかりに荒々しく殺気立っていた。まるで剣が生きているようだ。

歯車は廻り続けている。だが、それ以上はない。グングニール を構えたアレンはルオと距離を縮めることなく、その場から足を動かすことはなかった。

「俺飛び道具、あんた剣。それでどーやって戦う気なんだよ？」

「知りたくば、早く掛かってくるといい」

「あとさあ、そんなデカイ剣、あんたに使えんの？」

ルオの構える大剣は、彼よりも少し背が低い程度で、一五〇センチほどあるだろうか。通常の剣より長く、大の大人でも使いこなすのが大変なこの剣を、小柄な少年が本当に使いこなすというのだろうか？

「朕が皇帝ルオと知つての口の利き方かい？」

「だからどーだつてんだよ？ 俺あんたの国民じゃないし」

こんな口の利き方をされたのは、ルオにとって初めてだったのだろう。微かにルオの口元が緩んだ。

「くくくつ……あはは、なんて愚かな。朕もまだまだ絶対者には遠いか」

「絶対者なんか、この世にいねえよ、ばーか」

「ならば、朕が最初で最後の存在となるう。恐怖こそ力、ゆくぞ 黒の剣 ！」

朱色のマントが舞い上がった。

切っ先を床に向けて構えるルオが駆ける。

迎え撃つは、アレンの魔導銃 グングニール。

「喰らえ糞餓鬼！」

稲妻が空を横に裂き奔る。だが次の瞬間、アレンの表情が曇る。やはり無駄だった。

銃口から放たれた稲妻が 黒の剣 の呑み込まれていく。

魔導を無効としたルオは、そのまま臆するなくアレンの懐に斬り込んだ。

びゅんと風が唸る。

「くおつ、危ねえ！」

鼻先で切っ先を感じたアレンは、後ろに飛び退いて体制を整えようとするが、その隙すらルオは与えない。

襲い来る剣技を前に押され気味のアレンが、再び引き金に指を掛けた。

銃口が吼え、眩い雷光が辺りを包む。だが、それも一瞬の輝き。見る見るうちに稲光は 黒の剣 に呑まれた。

ルオは辺りを見廻した。アレンの姿が消えた。眩い光に眼が眩んだ、その一瞬にアレンが消失したのだ。

「後ろか！」

振り向いたルオが見たものは、上空から金属板の上に着地し、艦内に飛び込むアレンの姿だった。

「逃げるが勝ち！」

この勝負、分が悪いと判断したアレンは逃げることを選択したのだ。

「待て！」

「待てと言われて、待つ奴なんていねえよ！」

だが、アレンの足は止まった。

蒼白く巨大な輝きが艦内の廊下を飛んで来る。

光とともに空激破がアレンの横を擦り抜け、アレンの身体が宙に浮いて吹っ飛ばされた。

金属板に尻餅を付いたアレンが見たものは？

「……………!？」

歯車が激しい音を立てて廻りはじめた。

ルオも見た。この場に現れた輝ける天使の姿を。

果たして天使がもたらすものは愛か平和か、それとも破壊か？

月明かり照らすこの場所で、輝ける天使とも言うべき、少女

”はセレンとともに現れた。

巨大な翼から落ちる煌く粉が、風に揺れて消えていく。

”少女”は無邪気な笑みを浮かべながら口を開いた。

「私と……同じ……」

その言葉はアレンだけに向けられたものだった。

自分の胸を鷲掴みにしているアレンの表情は苦悶に満ち、額から大量の汗が零れ落ちていた。

歯車が廻る。

苦しい。

けれど、それはアレンには制御できないことだった。

床に膝をついて崩れ落ちたアレンに、すぐさまセレンが駆け

寄った。

「大丈夫ですかアレンさん!」

「ぜんぜんへーき。つーか、助けに来なくても平気だったじゃなか、損した」

「もしかしてわたしのこと助けに来てくれたんですか?」

アレンはなにも答えず立ち上がると、ルオに視線を向けた。

「ついでにその子ももらってく」

「朕を倒せたらね」

ルオの手はしっかりと”少女”の腕を掴んでいた。

「下がってろ」

アレンはそう言うと、セレンの身体を自分の後ろに押し退けた。

「アレンさん大丈夫ですか?」

「大丈夫じゃねえよ、ばーか」

「莫迦つて、酷くありませんか!？」

「ギャーギャー喚くな。今の俺マジだから」

「……………」

まだなにか言いたそうなセレンを黙らせて、アレンは一步前へ出た。

“少女”を捕らえているルオも一步前へ出る。

二人の戦いが今またはじまるうとしていた。

が、女性の声が二人の間に割って入った。

「タイムよタイムよ。少しお時間をいただけじゃないかしら？」

白い影がブーツの踵を鳴らすのを見て、ルオが低く呟いた。

「ライザか……神聖な戦いに水を注しに来たのかい？」

「いいえ、貴方が戦いたいと言うのなら、アタクシはお止めしませんわ。ただ、その前に準備を」

ライザとともに出入り口から流れ出して来た兵士がルオと“少女”を取り囲んだ。二人を取り囲んだ兵士は一・五メートルほどの筒状の物体を持っていた。

なにかを合図するようにライザが手を上げた。

「ルオ様、“少女”を放し、お下がってください」

“少女”から離れ、素早くルオが後退すると、筒を持っている兵士機械的な動作で“少女”を取り囲み、筒を床に設置した。

筒は“少女”を囲み、その効果を発揮する。

ライザが指を鳴らすと同時に、天に向けられた筒の先端から煙と光が放出された。それは煙幕のように“少女”の周りを覆

い、やがてきよとんする“少女”の前に壁ができた。それは半透明の壁。筒が境界を作り出し、“少女”を境界の中に封じたのだ。

自分を取り囲む壁に子供が興味を抱くように、好奇心の塊と化した“少女”が軽く触れた。壁に波紋が生じ、すぐに消えた。薄い羊膜のようなのに、決して破れることはない。それがこの境界の力だった。

境界の効果を確認したライザがルオに視線を向けた。

「あとは貴方のお気の召すまま」

「これで思う存分戦えるよ、ありがとうライザ」

黒の剣を一振りしたルオがアレンの顔を凝視した。

「手出しは無用。手を出した者は、あとでミンチにして家畜の餌だ」

この言葉でアレンとセレンに向けられていた銃口が床に向けられた。

帽子の上から頭を搔いたアレンが少年のように無邪気に笑う。

「大した自身だな、俺にマジで勝つ気でやんの」

「朕は絶対に負けない」

「勝手に言ってる。すぐに痛い目見せてやんから。お尻ぺんぺんしてやるぜ！」

「朕が負けるわけがないだろう、神が下郎に」

「神なんざいねえよ！」

攻撃するは魔導銃　グングニール。

迎え撃つは魔剣　黒の剣

だが、グングニール の雷撃は、黒の剣 によってすべて無効とされている。

いかにして戦うアレン？

アレンの手から雷撃が放たれた。それと同時にアレンがルオとの距離を詰めた。接近戦に持ち込む気だ。

稲妻は刹那のうちに 黒の剣 に呑まれてしまった。やはり、ルオを前に グングニール の雷撃は太刀打ちできないのか。だが、アレンはルオの懐に飛び込んでいた。

歯車が鳴る。それはルオの予想を超えたスピードだった。アレンの左フックがルオの顔面に炸裂した。

「ルオ様！」

頬を抉られて後方に吹っ飛んだルオの姿を見て、ライザが叫び声をあげた。

地面に片手を付き、口から血を吐き捨てるルオの姿を見て、アレンがガッツポーズを決めた。

「よっしゃ、1ポイント先取！」

「朕を殴ったな！」

口を拳で拭い、ゆっくりと立ち上がったルオの肩は震えていた。

「くくく……母君にも父君にも手を上げられたことのない、この朕を殴ったね……あははははっ！」

アレンはルオを殴った最初の者となった。それがどのような意味を持つか、ルオを知るものならば震え上がり泣き叫ぶだろう。だが、アレンはアレンだ。

「殴られて笑うなんて、頭イッてんな、あんた」

悪態を吐くアレンを睨みつけたライザは、ルオの元に駆け寄るうとしたが、それをルオが切っ先を持って静止した。

「手出しは無用と言ったはずだが？」

「わかりましたわ」

首に剣の切っ先を突きつけられたライザは、それ以上はなにも言わず、後退りをしてルオから離れた。

ルオは 黒の剣 を構え直すと、踵を弾ませて微笑んだ。

「あはは、今日はとっても楽しいよ君のこと、子供だと思って甘く見たのが間違えた。だから、次は本気で行くよ」

子供とは思えぬ邪悪な笑みを浮かべたルオと共鳴するように、黒の剣 が意思を持つように低く唸った。

アレンが グングニール を懐にしまい、右手をフリーにした。今度は“右手”で殴ってやるつもりなのだ。

「俺も本気で行くぜ。謝るなら今のうち。それとも一対一は止めにして、そこにいる兵士たちに助けてえって頼めよ」

「一対一は朕の美学。美のなんたるかを知らぬ者に口出しされたくない」

「なにが美学だよ。喧嘩なんつーものは、勝ちゃいーんだよ、勝てば。卑怯な手を使ってもな！」

歯車がフル回転で廻り、アレンが床を蹴り上げた。

目にも止まらぬ速さとは、まさにこのことだろう。

アレンの残像だけがその場に残り、瞬き一つした間にアレンは忽然とルオの前に現れた。このアレンの瞬間の動きを眼で追

えたのは　ただひとり。

まさかの出来事にアレンが眼を剥いた。

剣戟の響き。

ルオも眼を剥いて驚いた。彼の一撃は確実にアレンを捕らえたはずだったからだ。しかし、アレンは受けた。

「たかが掌で朕の一刀を受けようとは」

「たかがじゃねーよ、特別製」

大剣を受け止めているのはアレンの右手だった。そう、人ならぬアレンの右手がルオの一撃を受け止めたのだ。

どちらも動かぬ状況だった。アレンもルオも動かない。だが、四肢は振るえ、全身の力はただ一点に注がれていた。気を抜いた方が負けだ。

柄を握るルオの両手に力がこもる。

例えルオが超一流の剣技を持っていようとも、その腕力には限界がある。その点、アレンの右手が持つ力は計り知れない。だが、二人の力比べは五分と五分。

黒の剣　が激しく唸った。

それはアレンにとつて予期せぬ出来事であった。

四本の指が親指を残し、硬い床に落ちて音を立てた。

そして、次の瞬間には、アレンの右腕が斬り飛ばされ、宙を回転しながら飛んでいたのだ。

言葉も出ないアレン。

すべてを見ていたセレンが両手で顔を覆った。

不敵に嗤うルオに握られた　黒の剣　が再び低く唸る。

寒空の下で、空気が震えた。

自然の摂理すらが、あるモノに恐怖したのだ。

大剣を振りかざし、アレンに止めを刺そうとしていたルオの動きが止まった。

動きを止めたのはルオだけではなかった。この場にいた皆が動きを止めてしまった。それは本能的なものだったに違いなく、セレンは自分で気づくまで呼吸を止めてしまっていた。

美しくも恐ろしい力を秘める存在。

再び空気が震える。

それは怒りか悲しみか、それとも別の感情か。

“少女”は結界の中で慟哭していた。

二対の羽根は枯れた花のように垂れ下がり、“少女”が肩を震わせるたびに空気が震える。それはあり得ぬことだった。結界の中にいるモノが外に影響を及ぼすはずがない。空気が震えるはずがないのだ。

危機感を覚えたライザが叫んだ。

「破壊されるわ！ 退却なさい、ルオ様もお引きください！」

“少女”を包む結界が、大波に揺られるように激しく波打つ。そして、液体のような壁に蜘蛛の巣のような輝が入り、みしみしと音を立てながら、少しずつ壁が剥がれ落ちていく。もう、長くは持たないと誰もが確信したとき、轟々と風が唸り声をあげ、結界が爆発した。

結界の破片が煌く粒子となって、風に乗って天に昇る。“少

女”はその真下に立っていた。

「私と同じヒト……傷つけるなんて……許さない……」

掲げられた“少女”の片手にエネルギーが溜められ輝き、それを見たライザがルオに向かって叫んだ。

「お逃げください！」

「朕の辞書に逃げるなどという言葉はない！」

不敵に笑い 黒の剣 を構えたルオに、“少女”の手からレーザービームとも言うべき攻撃が放たれた。

突風がどこからか吹き込んだ。その風は人の形となり、ルオと“少女”の間に立ちはだかった。

「もうおよし、わしの可愛い娘 エヴァ」

その声はまさしく老婆リリスのものだった。

放たれたレーザービームはリリスの前で光の壁に弾かれ、天に向かつて飛んで消えた。

突然のリリスの登場に、眼を丸くしているセレンの背中に、大柄な男が声をかけた。

「シスター、ぼさつとしてないで早く逃げるぞ」

「はい？」

セレンの振り向いた先にいたのは、気を失っているアレンを背中に担いでいるトツシュだった。

「シスターを助けに来たのはいいが、グッドタイミングだったのか、バッドタイミングだったのわからんな」

バッドタイミングだ。

“少女” エヴァは銀盤の上を滑るように、床の上を低く

飛翔し、セレンとトツシユの前に立った。だが、二人のことなど眼中にない。エヴァが見つめるのはただひとり アレンのみだ。

「……私と同じ」

これだけだった。なにをしたわけでもない。無邪気に笑うエヴァが、ただ一言の言葉を漏らしただけで、セレンとトツシユは全身が弛緩し、腰を砕かれたように床に倒れてしまった。

床に寝転ぶアレンの頬に、エヴァの蒼白い纖手が伸びる。

「待つんじゃない」

ゆつくりとエヴァが振り返った先にリリスが立っていた。

「よい子じゃエヴァ。わしの言葉をちゃんと聞き」

幼子を諭すようにリリスが話しかける。だが、エヴァは聞く耳を持たずアレンを抱きかかえようとした。

空気が激しく震え上がった。

エヴァが声にならない叫びをあげ、超振動の波紋が広がり、エヴァを止めようとした兵士たちが散り散りに吹き飛ばされた。その場で耐えたのはリリスのみ。

「聞き分けのない子じゃな。まったく誰に似たのやら……」

愚痴を溢したりリリスは、優雅に片手をエヴァの額に乗せようとした。再び眠りにつかせようとしたのだ。だが、見えない衝撃によって、リリスの身体は後方に五メートルほど吹き飛ばされて止まった。

「わがままなところはわしに似たか……」

少し笑いながら呟くようにリリスが言った直後、彼女の眼は

大きく見開かれた。

大きく広げられた紅白の翼から、大量の煌きが零れる。

羽ばたいた。

飛ぶ。

アレンを抱きかかえたエヴァが、天に向かって羽ばたこうと  
している。

大事な実験サンプルに逃げられると思ったライザがエヴァに  
向かって走った。だが、エヴァの身体から放たれた光柱が天を  
衝き、激しい閃光とともにライザの身体は後方に吹き飛ばされ  
た。

光が天に昇る。

飛び立とうとしているエヴァの前で老婆リリスの姿形が変化  
した。老婆リリスから妖女リリスへ。

「妾の話を聴くのじゃ。その子は重傷を負って、放っておけば  
死ぬ。全機能停止じゃ」

黒の剣 によつて腕を切られたアレンの傷口からは、煌く  
砂とも液体ともつかぬ物質が流れ出し、顔は生気を失い蒼ざめ  
ている。

『全機能停止』という言葉を聞いて、エヴァの顔に陰が差す  
が、それでも“少女”は“少年”を連れて行こうとした。

舞い上がるエヴァの身体。

逃がさまいとリリスが手を上げた。

宇宙へ昇ろうとするエヴァの足に黒い触手が絡みつく。その  
触手はリリスのナイトドレスから伸びていた。

「妹の言うことしか聴けぬのかえ？」

月のような静かな激昂だった。

黒い触手がアレンの身体を包み、エヴァはアレンを奪われま  
いとするが、“創造物”は“創造主”には勝てなかった。

黒色に包まれたアレンがリリスの胸に抱かれ、一筋の流星が  
天に向かって降り注ぐ。

金属板の床が激しく揺れ、足場が崩れようとしていた。

衝撃波が巻き起こり、床が落ち崩れる。

ルオは気を失って倒れているライザを抱え出入り口に走り、  
トツシユはアレンを抱えながらセレンとともに走った。しかし、  
床は轟音を立てながら崩壊した。

「きゃっ！」

足を滑らせたセレンにトツシユが片手を差し伸べるが、彼  
の立っていた足場も崩れた。

崩れ落ちた金属板たちは、遙か三〇メートル地上に叩きつけ  
られ、砂煙が辺りを包み込み、視界をゼロとした。

すべては砂煙に埋もれ、姿を消してしまった。

夜空には二つの輝きが昇っていた。

静かに微笑む月と、月よりも美しく輝く儂げな“少女”。

意識は微かにあった。

薄く開けた瞼の先に見えるライトが眩しく、視界がぼやけ、  
黒い人影が自分の顔を覗きこんでいるのに、誰だかまったくわ  
からない。

「エーテル体が不足しているようだわ」

誰の声なのかわからない。

前にもこんなことがあったような気がする。

もしかしたら意識は戻っていないのかもしれない。

過去の回想かもしれない。

アレンにはどちらでもいいことだった。

「エーテル体の流出が激しいようじゃな」

過去と現在がリンクする。

「オリハルコンとの合金を」

「オリハルコンの合金のようじゃが」

過去の声と今の声が交差する。

「わたくしの力で」

「わしの力で」

凍てついた手術台の上にひとりの少女が横たわっていた。

一糸纏わぬ少女の身体は紅い血で覆われ、右脚も右腕も欠損し、内臓も飛び出してしまっている悲惨な状態だった。

凍てついた手術台の上にアレンは寝かされていた。

服を脱がされ、鼠色の金属が右半身を覆い、右腕はルオとの

戦いで失われていた。

造り変わる身体。

造り直される身体。

過去の偉大な魔導師は、死人からヒトを創った。

現在の偉大な魔導師は

「これで完璧じゃ。修理だけでこれほどまでに身を削る思いを

するとは、此奴を創った者は……」

そこでリリスは口を噤んだ。その表情に刻まれた皺は深い。手術台の上で寝ていたアレンが、ゆっくりと瞼を動かした。

「……胸糞悪い」

機械の右手をゆっくりと天井に向けたアレンが、自分の右手を眺めながら上体を起こした。

「あんたが直してくれたのか？」

「わし意外に誰がおる？」

しんと静まり返った金属の部屋にはリリス以外の者はいない。さきほど聞こえていた声も、やはり幻聴だったようだ。

「あんたが直したのか……。これでひとつはつきりしたことがある。やっぱあんたじゃねえ」

「なにがじゃ？」

「別にい。あと、あんたと初めて会ったとき、初めてじゃない気がしたけど、あれ俺の気のせい」

死人からヒトを創った偉大なる魔導師は誰か？

その問いはアレンに解けることはなかったが、ひとつだけはつきりしたことがある。

リリスではない。

手術台から飛び降りたアレンはリリスから服を受け取ると、素早く着替えて帽子を被り、最後にゴーグルを頭の上に乗せた。

「あんがと」

そう呟いてアレンはリリスを残して部屋を後にした。

部屋の外は長方形の筒のような廊下が続いていた。

所々が茶色く錆びている廊下を照らす明かりは、等間隔に天井にぶら下がっている裸電球だけで、廊下全体が薄暗いために遠く先は闇だった

見覚えのある廊下だった。

「アレンさん、あの、もう大丈夫なんですか？」

部屋の外でアレンに声をかけたのはセレンだった。その表情は沈痛な面持ちだ。

それに対して、アレンの言葉は素っ気無いものだった。

「へーき」

「……わたし心配してたんですよ。それなのに、そんな返事……」

「心配すんのはあんたの勝手だろ。それとも“ありがとう”とか言って欲しいわけ？」

「別にそうじゃありませんけど」

「じゃ、ちょーへーき。これでいいだろ」

「……………」

セレンは言葉を失った。

悲しいとか、怒りといった感情を越え、ただ啞然と言葉を失ってしまった。アレンの神経構造が、セレンの理解の範疇を越えたのだ。

そして、アレンは前の話がなかったように、

「つーかさ、ここどこ？」

「トツシユさんの隠れ家だそうです」

「やっぱね。どーりで見覚えがあったと思った」

アレンがここに来たのは二度目だった。その二度とも、意識を失っているときに運ばれた。

自分勝手に歩き出したアレンが、いきなり後ろを振り向く。

「で、トツシユはどこにいんの？」

「えっと、そっちじゃなくて、こっちです」

セレンが申し訳なさそうに指を差したのは、アレンがいるのとはまったく逆の方向だった。

「早く言えよ」

「だって、アレンさんが勝手に歩き出したのが悪いんですよ」

「気が利かねえなあ」

ぶつくさ言いながらアレンはセレンに連れられて廊下を歩いた。

いつもよりもアレンの機嫌が悪いことをセレンは感じていた。自分の知らないうちに、なにかあったのかもしれない。けれど、なにがあったのかは想像も及ばなかった。セレンにとって、アレンは未だ正体不明なのだ。

廊下に二人の足音が響く中、アレンは点々と割れた電球たちに目をやった。その電球はエヴァの封印が解かれたときに割れたものだ。エヴァの解放はクーロンの街に大きな爪痕を残したのだ。

だが、アレンは感じていた。

まだだ。

封印は解かれても、覚醒めてはいない。

幾星霜を経て眠りから醒めたが、“少女”が、真に覚醒めると

き、世界にどのような影響をもたらそうか？

封印を解いたリリスは知っているのだろうか？

知らぬはずがない。

事の解決にはリリスの力が必要かもしれない。けれど、アレンはリリスに話しても無駄だろうと思っていた。　　だったら、最初から封印を解いていない。それがアレンの考えだ。

しかし、リリスという女は気まぐれだ。物事がどう転ぶかはわからない。一寸先は闇だ。

電球が割れてしまっているせいで、普段よりも暗い廊下を進み、セレンはアレンをトツシユの部屋の前まで案内した。

「ここがトツシユさんのお部屋です」

セレンがドアをノックしようとする、アレンがノックなしにドアを開けた。

「お邪魔します」

と言うくらいなら、ノックくらいすればいいものを。

ドアを開けると廊下に大量の光が流れ込んだ。

突然部屋に入って来たアレンの顔を見て、トツシユはあからさまに嫌な顔をする。

「ノックくらいしろ。どんな教育を受けて来たんだ」

「悪かったな、俺はガツコーも行ってねえよ」

小さなテーブルに着いているトツシユは、コーヒーを飲みながらアレンの右腕を見た。

「それで、腕は治ったのか？」

「直ったんだけど、そんなことより」

「

「なにも言うな」

コーヒーカップに口を付けようとしていたトツシユの動きが止まり、空いている手をパーにして力強く前に突き出した。

「話くらい聞けよ」

「いや、聞かない」

断固として自分の意見を曲げないトツシユに詰め寄ったアレンは、彼のコーヒーカップを持っている手を下げて言った。

「聞けつてば」

「聞かないと言っているだろう。俺様は二度もおまえを助けて、俺様のせいで危険なことに巻き込んだシスターもちゃんと助けた」

「じゃあ、ついでに」

「ついでではない」

「じゃあ、そのついででのついででいいからさ」

ここでトツシユがため息をついて折れた。

「話だけは聞いてやる、言ってみろ」

「まずさあ、人型エネルギープラントはどうなったんだよ？」

「空の上に飛んで行った」

そう言つてトツシユは人差し指を立てて天を示した。

天に昇つたエヴァはクーロンの街からも見る事ができ、今もまだ夜空で星のように輝いている。それ以上の動きは見せない。エヴァはクーロン上空で、ただじつとしているのだ。

アレンはトツシユの指差す方向を見た。そこには天井があるが、アレンはその先を見て、なにかを考えるように目を閉じた。

歯車が廻っている。

こんなに離れているのに、歯車が廻っている。  
なぜ、歯車は廻る？

ゆっくりと目を開けたアレンはトッシュに尋ねた。

「あのさ、飛空機とか持っていないのかよ？」

「この街にそんな高価な代物を持っている奴がいると思うか？」

「あんただったら持つてそうだし。小型のプロペラ式でいんだけど？」

「だから持つていないと言っているだろう。それと、この街中を探しても無駄だと先に言っておくぞ」

「使えねえなあ」

腕組みをしたアレンは、そのまま床に胡坐をかいて黙り込んでしまった。

「アレンさん、床に座るなんて汚いですよ」

「うっせーよ」

セレンに悪態をついたアレンは再び黙り込む。

少し顔を膨らませてドアの前で突っ立っていたセレンを押し退けて、リリスが足音も立てずに部屋に入ってきた。

「空飛ぶ乗り物なら、この街の地下に眠っておる」

「マジか姐ちゃん!？」

床を叩いて飛び上がったアレンを、リリスは老女とは思えぬ艶やかな瞳で見つめた。

「ほほほっ、ついて参れ」

月光が鋼色の機体に反射する。

けたたましい爆音を静かな夜に鳴り響かせながら、巨大な鉄の塊が砂煙を上げなら空に舞い上がる。

魔導を動力源とし、巨大なエンジンに膨大なエネルギー送り込む。

全長は三五〇メートル以上もの巨体が宙に浮いた。

シユラ帝國が世界に誇る、世界最大級の飛空艇 キュプロクスが、夜空を支配しようとしている。

幾つものライトを灯台の光のように撒き散らし、キュプロクス が天へ天へと昇っていく。

風が少し強い。

まるで風が唸り声をあげているようだ。

キュプロクス が目指す航路は、夜空に燦然と輝く巨星エヴァのもとへ。

艦内では慌ただしく兵士たちが動いていた。

武器の整備から小型飛空機の整備に時間を追われ、ひとりの“少女”を捕獲するために万全の準備が進められていた。

皇帝ルオの前での失態は許されない。それは死に直結するからだ。それゆえ、兵士たちの士気は高まり、“少女”捕獲の準備は万全に万全を期した。

艦内のほぼ中心部にある広い司令室では、皇帝ルオが艦長の椅子 つまりルオの特等席に脚を組んで座っていた。

「ライザ、どうするつもりなんだい？」

ルオは斜め上を見上げて、不機嫌そうなライザに尋ねた。

「アタクシといたしましては、捕獲を第一優先事項、それができなければ破壊を推奨いたしますわ」

「破壊は勿体ないね」

まったくそのとおりだとライザは思っていた。破壊と口にはしたが、ライザはエヴァを破壊する気など毛頭ない。

「では、人型エネルギープラント捕獲のために、“黒い翼”を投入いたします」

「朕は参謀ではないから、君の好きなようにやってくれればいい」

「御意のままに」

ルオに軽く頭を下げたライザは、前方の席にいるオペレーターに命令を下した。

「“黒の翼”に出動の命令をなさい」

それだけを言った。そう、すでに作戦は決まっていたのだ。

“黒の翼”を投入することは最初から決まっており、艦内ではそれに沿って準備が進められていたのだ。

シウラ帝国のエースパイロットで構成された、小型飛空機の精鋭部隊が“黒の翼”である。彼らの任務は常に戦闘の最前線に立つことであり、空での仕事を一手に引き受けるスペシャリスト集団でもある。“黒の翼”は常に模範でなければならぬのだ。

“黒い翼”の名のとおり、黒い翼を持つプロペラ型飛空機の周りには、黒尽くめの服に身を包む隊員たちが出動の要請を待

っていた。

格納庫で待機していた“黒の翼”部隊長に通達が下る。

通信機を口元から下げた部隊長が、すぐさま隊員たちに指示を下す。

隊員たちが慌ただしく動き、格納庫になんともいえぬ緊張感が走る。

月明かりの下での作戦は困難を極める。その困難さと危険さは昼間の比ではない。それでも彼らは行く。ある者は愛する者のため、ある者は名誉や誇りのため、ある者は己のために空を翔け巡る。

飛空機を運ぶための昇降口が開かれ、一機目の飛空機が飛空艇上部の発着場にエレベーターで運ばれていく。

開かれた昇降口の先は闇だった。暗い夜空が広がっている。

星々の煌きだけでは心もとない。それでも機械制御のエレベーターは上へと向かう。

長く伸びる甲板の上から観える星はいつもよりも騒がしく輝いていた。

二一時ちょうど作戦開始。

プロペラが高速で回転し、助走をつけた飛空機が夜空へ飛び立った。

後に続けと次々と黒い機体が空に飛び立つ。

六機の黒い機体が群れをつくり、魔鳥のごとく夜空を舞う。

星よりも、美しく輝く月下の“少女” エヴァ。彼女は未だ夢現であった。

“黒い翼”が近づいてくるのに気づいているのかいないのか。エヴァの瞳は遠くを見据えていた。

六機の雲に映る黒い魔鳥の影が迷いなく、船を導く灯台のように輝くエヴァに向かって飛んでいく。

“黒の翼”に課せられた任務は、エヴァの破壊に非ず捕獲だ。だが、どうやって宙に浮かぶものをプロペラ型飛空機が捕獲するのか？

この手の任務は他に類を見ないと思いきや、“黒の翼”はこれまでにも数多くの捕獲作戦を成功させていた。

“黒の翼”のターゲットは必ずしも人や機械だけではない。中には宙を泳ぐ空魚や、巨鳥、空竜などもいた。この手の作戦をさせたら、“黒の翼”に優る飛空部隊はいないだろう。だが、今回の作戦は今までもつとも困難が予想された。

キュプロクス 艦内の司令室にいるライザが、オペレーターに向かって喚くように指示を出す。

「無傷で捕獲するのよ！」

そう、“無傷”で という言葉が今回の作戦を困難なものにさせていた。しかも、相手はあくまで“生物”ではなく、“機械”なのだ。生物であれば、麻酔弾で眠らせることもできるが、姿形がいくらヒトに似ていようと機械に麻酔弾が効くはずがない。

宙でじっとしているエヴァに近づいた“黒い翼”は、陣形を崩さぬまま減速する。

エヴァに動きは見られない。逃げることもなく、戦う気配も

なく、魂が抜けてしまっているようだ。

黒い機体を操縦する部隊長が通信機を通して仲間に指示を出す。

《魔導ネット発射！》

これを合図に六機の飛空機がエヴァを取り囲み、機体の先端から七色に輝く捕獲ネットを六機同時に発射した。

輝く捕獲ネットは蜘蛛の巣のように広がりエヴァの身体を捕らえ張り付く。

現代科学技術と“失われし科学技術”のアンバランスな融合。プロペラ機が超科学の粋を使っているのだ。

伸縮自在の魔導ネットは見事エヴァを捕獲して捕らえた。

エヴァはなんの抵抗もしなかった。それゆえに作戦がスムーズに進んだのだ。

並んで飛ぶ六機の飛空機の先端から垂れ下がる六本の紐の先には、七色に輝く魔導ネットに包まれ毛糸玉のようになってしまっているエヴァがいる。あとはエヴァを キュプロクス まて運べば、作戦のほとんどが終了する。だがしかし、エヴァは空竜などとは違い麻酔弾によって眠らされていない。ただ、夢現なだけ。

自由の象徴である翼を無理やり丸められ、身動き一つできないエヴァが、やっと目を大きく開けた。

魔導ネットを破り白い翼が出た、紅い翼が出た。万が一、空竜が目を覚まし暴れても破れないはずの魔導ネットが破られた。紅白の翼から零れる煌きが、魔導ネットの力を中和させてしま

ったのだ。

星よりも、月よりも、世界に昼をもたらす太陽よりも、エヴァは力強く燦然と輝いた。

あまりに眩しすぎる輝きは、エヴァを包んでいた魔導ネットワークを、煌く炎によつて燃やしてしまった。

燃えがる炎の中でエヴァは巨大な翼を力いっぱい広げた。

“黒い翼”の一機を光の柱が下から突き上げるように貫いた。夜空に儚い爆発音が響き渡る。

エヴァの身体から幾つもの光の筋が放たれ、無差別に世界を照らし、上空で火炎の華が咲き乱れる。

六機の機体は、火花のように儚くも美しく散った。

キュクロプスの司令室で、“黒の翼”が壊滅させられたことを聞いたライザは、苦い顔をして皇帝の顔をちらりと覗きこんだ。

ルオは素っ気無い表情をしていた。

「やっぱり駄目だったようだね。君も無理だとわかっていたのだらう？」

「はい、わかっておりました」

“無傷”でエヴァを捕らえるなど無謀だった。それはライザも十分承知していた。だが、そうとわかっていても、彼女はエヴァを無傷で捕らえたかったのだ。

前の席に座っているオペレーターが後ろを振り返った。

「ターゲットがカメラの撮影可能圏内に入りました」

「すぐさまスクリーンに映像を出しなさい」

ライザが指示を出すと、前方の巨大スクリーンに白一色の映像が映し出された。スクリーンの故障かと思われたが、すぐに白はその大きさを縮め、闇に浮かぶ光球を映し出した。エヴァの身体は光の膜　球体状のバリアによって優しく包まれていた。

オペレーターが激しく振り切られたメーターの針を見て叫んだ。

「測定不能のエネルギー反応を検出！」

魔導師でもあるライザは背中に冷たいものを感じた。本能がなにかを恐れている。そして、彼女は発狂するように声をあげた。

「最大出力で防御フィールドを張りなさい！」

スクリーンを見ていたライザは眼を見開いて言葉を詰まらせる。

皇帝ルオは不気味に笑う。

「来るよ」

ルオは畏れてなどいない。彼は心から楽しんでいた。危機的な状況の中に彼は至福を感じるのだ。

夜空に浮かぶ光の玉は膨張し、縮んだ。

エネルギーの集束。

そして、放出。

巨大なエネルギー光線がエヴァから放たれた。

轟々と唸る光線は大気を燃やし、よりいっそう輝きを増してキュプロクス　の真横を掠め、全長三五〇メートルを超す巨

艦を激しく揺らした。そう、巨大な光の光線は キュブロクスを外れたのだ。

だが、それだけでは終わらなかった。

巨大な光線は輝きを増しながら キュブロクスの横を抜け、地上に向かって降り注ぐ。その先には巨大都市クーロンがあった。今、巨大な光は巨大都市を呑み込みようとしていたのだ。

街に住む人々は、誰もが空を見上げ慌てふためいた。巨大隕石が振って来る。そうとしか思えない巨大な光だった。

空飛び乗り物を求めるアレンはリスとともに、坑道入り口がある空き地の近くに来ていた。

「本当に空飛び乗り物なんてあんのかよ？」

「わしを信じておらぬのか？」

「ぜんぜん信じられないね。あんたって得体が知れないし、目的がハッキリしねえんだよ」

「得体が知れないのはお主とて同じことじゃ。お主はなぜ行くのじゃ？」

どうしてアレンはエヴァのもとに行こうとしているのか？

「そんなの俺の勝手だろ」

「じゃったら、わしもわしの勝手じゃ。あの子の封印を解いたのも、お主に力を貸すのも、わしの勝手じゃ」

舗装されていない乾いた道を進み、空き地の入り口までやって来たアレンは、顔を少し出して空き地のようすを窺った。

地下遺跡でエヴァが見つかったもなお、坑道の入り口は帝國

の兵士によって守られていた。だが、前よりは数がぐんと少なくなっている。これなら大暴れはしなくて済みそうだ。

グングニールを構えたアレンが、リリスをこの場に残して空き地の中に飛び込んだ。

アレンに気づいた兵士が小型マシンバルカンをいち早く撃つた。

夜の静寂に銃声の華々しい音が乱れる。

兵士の誰かが大声をあげた。

「指名手配リストに載っている“少年”だ！」

すでにアレンは帝國の指名手配リストに名を連ねていたのだ。しかも、この“少年”を生け捕りをした者には、七〇万イエンもの賞金が懸けられていた。三万イエンあれば、困ることなく一年間暮らせる額だということから、七〇万イエンがいかに高額かということがわかるだろう。そして、この賞金を懸けたのはもちろんライザだ。

ちなみにトツシユに懸けられている懸賞金は、生け捕りならば一〇〇万イエン。死亡した場合は半額の五〇万イエンである。兵士たちはチャンスを逃さまいと必死になっていた。

目の前にいる“少年”を生け捕りにしなければならぬ。だが、無傷というのは条件に含まれていない。兵士たちは銃で“少年”の足元を狙った。

アレンは地面の上で躍らされた。

「糞野郎どもが！」

グングニールが吼える寸前だった。老婆リリスが風のよ

うに地面を滑り移動し、戦渦の真っ只中に立った。

「お眠り、童子たち」

温かい風が吹き荒れた。

その風は春の薫りを運び、花の蜜のような甘い香りで場を満たした。

甘い香りは夢への誘い。

小型マシンバルカンの音が静かな小雨になり、やがて止んだ。バタンと一人目の兵士が倒れたのを皮切りに、二人、三人と兵士が次々と深い眠りに堕ちていく。

その中でアレンもまた、目を両手で力いっぱい擦っていたが、ブツンと糸が切れて背中から地面に倒れた。

いびきをかいて大の字になって眠るアレンの頬にリリスが平手打ちをした。

「お主まで眠ってどうするのじゃ！」

それは仕方あるまい。リリスの魔導によって眠りに堕ちたものは、ちよつとやそつとでは目を覚まさない。もしかしたら一生目を覚まさないこともある。それはリリス次第なのだ。

リリスによって眠りから覚まされたアレンは、眠気眼の夢心地で魂が抜けてしまっているようだった。夢の世界はそれほどまでに魅惑的だったのである。

「もう肉喰えねえ……腹いっぱい……」

どんな夢を見ていたのかは想像ができた。

「しつかりするのじゃ！」

呆れたリリスは、もう一度強くアレンの頬を打った。

「痛えっ!? なにすんだよ!」

「あの程度の魔導に魅了どうするのじゃ」

「あんたが悪いんだろ、無差別に眠らせるんじゃないやねえよ!」

「五月蠅い小僧じゃ。ささ、先を急ぐぞよ」

「自分勝手な女」

「お主も自分勝手な」

女。と言おうとしたときだった。輝きはリリスの口をつぐませた。

空の上でなにかが一際輝いている。

アレンは見た。流れ星が落ちてくる。いや、違う。エネルギーの塊が飛来してくる。

強風が吹き荒れ、物が上空へ吸い込まれるようにして舞い上がる。

人の身体が持ち上げられ、看板が上空を飛び、外に干してあった洗濯物は一つ残らず空に吸い込まれた。

光が世界を包み込む。

目は開けられるはずがない。目を開いてしまつたら、その眼は一生使い物にならなくなってしまう。

アレンは反射的に眼を閉じて、地面に這いつくばった。

その中でただひとりリスだけが全てを見定めた。

クーロンに飛来してくるエネルギーの塊は、流れ星のように長い尾を夜空に描き、大気を燃やし輝きを増した。

その輝きは“失われし科学技術”の最悪の恐怖　魔導砲の光に似ていた。

古の戦いで使用された魔導砲の光は世界の大半を焼き、今もなお世界にその爪痕を残す。クーロン一帯に広がる砂漠地帯も、その戦いの名残だった。

「外れたようじゃな。じゃが、砂の雨が降るぞよ」

リリスが呟いた次の瞬間、巨大なエネルギーの塊がもつともクーロン上空に近づいた。

そして、尾を引く輝きはクーロンの遙か先の砂漠地帯に激突し、世界を昼に変えて巨大な茸雲に姿を変えるときに、世界に砂の雨を降らせた。

空から降り注ぐ砂は真っ黒に焦げており、クーロンの街はたちまち黒一色になってしまった。

砂を払いながら立ち上がったアレンは、すぐさまリリスの首元に掴みかかった。

「あんた、なんであんなものの封印を解いたんだよ！ 今のところでもねえ攻撃はあいつの仕業だろ！」

「心を持つ者には、自由に生きる権利があるじゃろう？」

「はあ？」

「例えヒトの創り出した生命であろうと、自由に生きる権利はあるじゃろう？」

「はあ？」

「強い者が生き残る。それが自然の摂理じゃろう？」

「意味不明」

自分の首元を掴んでいるアレンの手をそつと外したりリリスは、それ以上はなにも言わず歩き出した。

「おい、待てよ！」

リリスは返事を返さなかった。

小声でぶつくさ言いながら、アレンは仕方なくリリスについて坑道の中に入った。

オレンジ色のライトは、そのほとんどが壊れており、坑道の中はほとんど闇に近かった。

リリスの足音を追うようにアレンは歩き、やがて前方に白い輝きが見えてきた。その輝きは白銀の部屋から発せられているものだった。そう、リリスがアレンを連れてきた場所は、エヴァが封印されていたあの部屋だったのだ。

部屋の中心にはエヴァが眠っていた円柱状のケースがだけがあった。

「マジでここに空飛ぶ乗り物があんのかよ？」

アレンは半信半疑だった。

艶やかにリリスは微笑んだ。

「この部屋ではない。この先の部屋じゃ」

この先の部屋？

扉は今アレンたちが入って来た扉しか見当たらない。それに部屋には切れ目すら入っていないのだ。そのどこに扉など隠されていようか。だが、部屋の中心にあるケースも最初は床の下に隠されていたのだ。

なにも見当たらない壁にリリスの手が触れると、切れ目一つ入っていないかった壁に線が入り、扉のように左右に開けた。その先には別の部屋があるようだ。

別の部屋に移動するリリスに続いてアレンもその部屋に入った。が、ここもなにもない白銀の箱だった。きつと、この部屋に物も全て収納されてしまっているのだろう。

リリスはまた壁に触れ、別の部屋への入り口を開いた。次の部屋にもなにもない。これと同じことを三回繰り返し、ようやくリリスの足が止まった。

「ここじゃ」

やはり、この部屋にもなにもない。だが、もうアレンはなにも言わなかった。

しゃがみ込んだリリスが床を叩いて小声でなにかを呟くと、床に切れ目が走り、床の下からなにかがせり上がってきた。

それはスクーターに似ていた。しかし、タイヤがない。車体の下部は平らにできていた。

タイヤのないスクーターを見て、アレンはすぐに理解した。

「空飛ぶから、タイヤはいらないのか」

「そうじゃ。わかつたら、さつさと乗るのじゃ」

「マジで飛ぶのかよ？」

「さあて？」

「なんだよ、その返事は？」

「わしがこのエアバイクに最後に乗ったのは……？」

途方もないくらい前だったことは確かだ。

ちよつと嫌な顔しながらも、アレンはリリスに促されてスクーターに乗った。しかし、エンジンの掛け方がわからない。そもそもエンジンというものがあるのかも怪しい。

「エンジンはどうやって掛けんだよ？」

「わしの声に反応する」

そう言ってから、リリスはエアバイクに向かって小声で囁きかけた。すると、エアバイクがアレンを乗せたまま少し浮いた。音もなく浮いたエアバイクを見て満足そうにリリスは頷き、言葉を続けた。

「バイクの乗り方はわかるじゃろ？」

「前に一回だけ乗ったことある」

「それなら心配ないの……？」

宙に浮いていたエアバイクが力なく床に落ちていく。

「なんだよ、飛ばねえじゃねえか！」

「可笑しいの……やはり、整備もせんと放っておいたのが悪かったようじゃ」

ガン！

リリスの足がエアバイクの尻を蹴った。すると、エアバイクが再び宙に浮きはじめてでないか！？

「直ったようじゃ、早う行け」

「空から俺が落ちたらあんたのせいだかな」

エアバイクが強い風を巻き起こした。

アレンが頭に乗せていたゴーグルを目に装着する。

「そんじゃ、行ってくるわ」

エアバイクが床の上を滑るように走り去り、リリスは子供の背中を見守るような母の眼差しでアレンを見送った。

アレンを乗せたエアバイクは狭い坑道の中を走り、まだ運転に慣れてないアレンは壁にぶつかりそうになりながらも、そのスピードを緩めることなく、絶叫マシンにでも乗るようにアレンは無邪気に笑っていた。

「ヤッホー！ こりやすげえ」

坑道の出口が見えてきた。

爆風とともに出口を抜けたアレンは、ハンドルを上にも引くようにして、車体の前方を上にも傾けた。すると、エアバイクは上に向かって進路を変える。

夜空を我が物のように飛ぶアレンは、全身に風を感じながら光に向かって突き進んだ。目指すは星よりも、月夜よりも、燦然と輝くひとりの“少女”。

風と一体になったアレンの目に、巨大な黒い影が飛び込んできた。

空に浮かぶ巨大な鉄の塊　超巨大飛空艇　キュプロクスだ。

巨大な　キュプロクス　の船首にある巨大な眼のような穴  
魔導砲の遙か先にエヴァはいた。

アレンは　キュプロクス　の横を飛び抜け、夜空を翔けて光り輝くエヴァのもとへ向かった。

空の上は風が強く、エアバイクに乗ったアレンは風に煽られ遊ばれる。だが、風はただ強く吹いているだけではなかった。風が魔導を孕んでいる。

煌く光の粒子がエヴァを包み込むように集まっている。

キュプロクス 艦内にいたライザは再び背中に冷たいものを感じた。

オペレーターが激しく振り切られたメーターの針を見て、また叫んだ。

「測定不能のエネルギー反応を検出！」

脚を組んでゆったりと座っていたルオが立ち上がった。

「次はないね。さつきと同じのを喰らったら、この飛空艇もただでは済まない。いいねライザ？」

「わかりました」

皇帝の言葉に“ライオンヘア”が深く頂垂れた。

ライザはエヴァの捕獲を諦めたのだ。

「魔導砲の準備をしまえ！」

声高らかにルオが命じた。

キュプロクス の船尾にエネルギーが集中する。

ちょうどそのとき キュプロクス の船尾近くを飛行していたアレンは見た。

巨大な眼に蒼白い光が灯った。

エネルギーを充填する魔導砲は轟々と地獄の風を鳴らし、深い穴の中から妖しい輝きを放つ。

すぐにアレンは魔導砲が放たれることを悟った。もちろん、魔導砲の標的は夜空に浮かぶあどけない“少女”。大地を炎の海に変える魔導砲が、ただひとつの存在のために使われようとしているのだ。

エヴァの輝きが増し、魔導砲が迎え撃つ。

魔導を孕んだ空気の対流が乱気流を起こし、アレンはエアバイクから振り落とされそうになり、被っていた帽子が空に舞うが、そんなことにかまっていられなかった。

「糞っ、操縦が利かねえ！」

アレンを乗せたエアバイクは、どんどんエヴァから離されていく。

轟々と叫ぶ風がアレンの耳元で鳴り響く中、夜空に二つの光線が奔った。

光の世界で風が荒れ狂い、アレンを乗せたエアバイクが、まるで強風に煽られる木の葉のように回転しながら落下していく。光と光が空で交差したとき、激しい輝きとともに、煌く粒子が雨のように地面に降り注いだ。

大爆発を起こした光の渦から、一筋の光線が抜けた。

ゴオオオオオオツ！！

巨大な鉄の塊が傾いた。

世界を恐怖のどん底に落とす力を持つ魔導砲が負けたのだ。

大爆発とともに煙を上げる キュプロクス が、ゆっくりとしたスピードで地面に落ちていく。

落ちていくのは巨大な鉄の塊だけではなかった。

紅白の翼が色褪せ、煌きが失われていく。

夜空で星よりも一際輝いていた“少女”が地に墮ちる。

“少女”の夢は醒めることなく、そのまま地の底へ深い眠りに墮ちようとしていた。

どこかで歯車の鳴る音が聴こえた。

大きく広げられた腕。それは決して大きくはないけれど、“少女”は“少年”の胸の中に包まれた。

“少年”を乗せていた乗り物は地に向かって落ちてしまったけれど、“少年”は夜空の上に浮かび、月光を浴びながら“少女”と抱き合っていた。

二つの歯車が鳴る。

光の宿る瞳で“少女”は“少年”を見つめた。

「私と同じひと」

“少年”は頷く。

「俺たちは“ひと”だ」

「……嬉しい」

“少女”は顔を赤らめ微笑んだ。

紅白の翼に煌きが還る。

封印が解かれたときは、まだ覚醒めてはいなかった。

けれど、今。

“少女”の柔らかな薔が“少年”の口に触れ、巨大な翼が“少年”の身体を優しく包み込んだ。

繭に包まれた“少女”は、美しい“大人”へ。

墮ちる墮ちる墮ちる。

夜空からふたりはどこまでも墮ちていた。

このとき、地中に眠る層は夢を見た。

“少女”が大切にしまっていた宝石箱の蓋が開けられる。それは夢や憧憬が叶うとき。

宝石箱から飛び出した煌きたちが、美しいメロディーとともに

にダンスを踊りながら想いを乗せて、巡り巡りて世界を呼び覚ます。

夜空には雲ひとつなく、星が歌い、月は燦然と輝き世界を照らし、オアシスの湖が水面を揺らす。世界は変わるうとしていた。

湖の底から泡が溢れ出てきて、それは七色に輝くシャボン玉のように、いくつもいくつも天に昇っていく。

シャボン玉が静かに弾けると、その中からオーロラ色に輝く蝶が生まれ、美しい蝶たちは可憐に宙を舞い、シャボン玉から孵った蝶は世界の成長を暗示していた。

湖の表面が金色に輝き、荘厳たる輝きとともに崇高さを兼ね備えた白い繭が水底から浮上してきた。

蘇る想い、目覚める想い、大切な想い。

繭に小さな輝が幾つも入り、それはやがて大きな輝となり、白い繭から眩い光が漏れ出す。

清らかなる魂を守っていた繭が硝子のように砕け飛び、中から美しい一糸も纏わぬ“大人”が生まれ出た。

突然、世界は弾け飛んだ！

塵の夢 が無理やり壊されたのだ。

アレンはいつの間にか、砂の上に膝をついていた。エヴァに包まれたアレンは、無事に地面に降りることができたのだ。しかし、エヴァはどこに？

エヴァは“少女”のまままで砂の上に横たわっていた。

風が吹き、老婆リリスが姿を現した。

「エネルギーを全て使い切ってしまったようじゃな」

哀愁に満ちた瞳でリリスは横たわる“少女”を見た。すでに“少女”から輝きは失われている。そして、紅い翼も色褪せ、白く変わっていた。“少女”の翼は煌きを失っても、白く美しく輝いていたのだ。

歯車が激しく音を立てる。

アレンは千切れんばかりの胸を掴み、歯を食いしばった。

創られた存在に魂はあったのか？

頬から零れ落ちた雫が、枯れた砂の大地を潤し、アレンの顔は砂の中に埋もれた。

“少女”は永遠に“少女”のままに　。